

青色の薔薇と虹色の薔薇

空丘ルミイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて“音楽界の虹”と呼ばれた少年は数年前に忽然と音楽界から姿を消した・・・理由もなく音楽界から消えた少年を数々のテレビ局や報道陣は追いかけた。しかし少年はそんなテレビ局の人たちから逃げ続け、ついにはあらゆるサイトから自分の個人情報、動画、音楽・・・全てを世界中のサーバーから消し去つた。この大きな事件はマスコミに騒がれるかと思われていたが、マスコミ陣はこれ以上の追及を止め、少年への取材はすべて打ち切られた。

それから数年後・・・

少年は出会う、この音楽界に咲き誇る5輪の青い薔薇に。

少年の人生に芽吹く薔は新しい音楽界に再び咲き誇るのか？

【主人公設定】

名前：翠川藍沢（みどりかわそうが）

誕生日：8月16日

趣味：昼寝、ネットゲーム

学年：高校3年

学校：私立季瀧（きりゅう）学園 《単位は取れてるため学校にはほとんど通っていない》

部活：バスケット部（キャプテン）で、ポジションはポイントガードとシューティングガードの両刀。《特別上手いわけではないがバイタリティ（体力）とアジリティ（敏捷性）の高さから1年生のインハイで『不倒の翠藍（すいらん）』と呼ばれるようになった》

（季瀧学園では9月末まで3年生は部の練習に顔を出さないといけない決まりがある）

目 次

with one word	Epilogue: A future that changes	ve	Chapter 16: On the day of the l	Chapter 15: Old and present	afterwards	Chapter 14: Enjoy it this time.	Chapter 13: Summer festival	Chapter 12: Tanabata festival	Chapter 11: Sports festival	Chapter 10: Enjoy it this time.	Chapter 9: Revival	Chapter 8: Nursing	Chapter 7: Stray and Promise	Chapter 6: Stars that continue to	Chapter 5: Neo Fantasy Online	Chapter 4: Another Color	Chapter 3: Help me I am Hesitati	Chapter 2: Break time	Chapter 1: once again	Prollogue: First contact
180	167	i	156	145	:	.	132	119	104	93	82	72	63	53	44	36	27	19	11	1

198 E
X

Chapter : C e l e b r a t e

B i r t h d a y

Prologue : First contact

【東京・商店街のとある家】

5月6日

藍沢「はあ……どこもかしこも騒がしくておちおち寝れないな……暇だしちよつと出歩くか」

【ライブハウス：c i r c l e外】

藍沢「ん？なんだここは。ライブ……ハウス…？なんだつてこんなところにライブハウスがあるんだ？しかし歩き疲れたからちよつとここで休憩していくか……」

【c i r c l e：ロビー】

藍沢「おじやまします」

？？「あら、いらっしゃい！見ない顔ね、新しいお客様かしら？」

藍沢「えつと……ちよつと休憩に寄つただけなんんですけど。ところであなたは？」

？？「私は月島（つきしま）まりな。このライブハウス、c i r c l e（サークル）のオーナーよ」

藍沢「俺は翠川藍沢（みどりかわそうが）と言います。ところでここは何をする場所なんですか、オーナー。」

まりな「あはは、まりなでいいよ。ここはライブハウスつていつて、ライブをする人たちの練習する場所よ。」

藍沢「なるほど…ライブ…ね。」

まりな「あれキミ、音楽に興味あるの？随分と考え事してるけど」

藍沢「いえ、昔のことを思い出していただけです。昔はよく楽器を演奏していたのでちよつとだけ思い入れがあつただけですから」

まりな「へー、なんだ。あ、ちょうどいいところに！」

藍沢「何ですか？物欲しそうな顔をして」

まりな「ちよつと今一組のバンドが楽器の調子が悪いって言つてゐる
んだけど、私はロビーから今手が離せなくつて…手伝つてもらえない
かな？」

藍沢「んー…まあいいですよ。休憩がてらに立ち寄つただけなんですが休憩だけして帰るっていうのは俺の性格には合わないんで」
まりな「本当ー？ありがとう！それじゃあ私についてきて！」

【c i r c l e : 練習室】

まりな「はい、ここだよ！それじゃあよろしくね！」

藍沢「任せました」

藍沢「失礼するぞ」

(ガチャリ)

??「あら、新しいスタッフの人かしら？でもまりなさんからは何も聞いてないのだけれど」

??「でもまりなさんが連れてくるほど今人手が足りない、ということがなのでしょう。」

??「いいじやん、音楽に詳しい人が来てくれるなら頼もしいよ！」

??「我らの元に現れし新たな援軍…我らの力が昂るぞ！」

??「困つていたので…良かつた…です。」

藍沢「えつと…キミたちがまりなさんが言つてたバンドの人たち？」

??「ええ、私たちは『R o s e l i a』というバンドなの。私は湊

友希那（みなとゆきな）、ボーカル担当よ。」

??「私は氷川紗夜（ひかわさよ）、R o s e l i aのギター担当です。」

花咲川学園で風紀委員をやっています。」

?? 「じゃあ次はアタシだねー。アタシは今井（いまい）リサ、Rosa seliaのベース担当なんだー。」

?? 「じゃあ次はあこの番！我こそは暗黒の世界に生きし聖墮天使・・・宇田川（うだがわ）あこ！この咲き誇る青き薔薇の一輪、振撃を与えるものぞ！」

藍沢 「えっと・・・なんだ？誰か翻訳してくれ頼む」

リサ 「えっとねー、あこの名前は宇田川あこだつて。担当楽器はドラムって言つてるよ」

藍沢 「えっと・・・ありがとうございます、今井さん。」

リサ 「あはは、そんな堅苦しくなくていいよ！「リサ」でいいって！」

藍沢 「じゃあ・・・リサさんで」

?? 「あの・・・次は私・・・ですね・・・私は白金燐子（しろかねりんこ）って・・・います・・・キーボード担当・・・です・・・」

藍沢 「俺の名前は翠川藍沢っていうんだ。今日はまりなさんの代役で手伝いに来たんだが・・・」

友希那 「藍沢くんね。それじゃあこれだけど・・・」

藍沢 「ドラムの調子が悪い？うーん・・・ちょっと調べてみる」

紗夜 「よろしくお願ひします。一つの音が悪かつたらリズム全体が悪くなってしまうので。」

【メンバー紹介：湊友希那（みなとゆきな）、羽丘学園の高等部に通う3年。Rose liliaのギター担当。花咲川では風紀委員に所属しており、少しの乱類の猫好きで、猫を見るとしばらく動かなくなるくらいだという。俺曰く「猫デレ」。

水川紗夜（ひかわさよ）、花咲川学園の高等部に通う3年。Rose liliaのボーカル担当。クールな性格とは裏腹に無れも見逃さない、ある意味潔癖症。フライドポテトが好きで、ファーストフード店では毎回頼んでいるらしい。俺曰く「世間知らずの箱入り姫」。

今井（いまい）リサ、羽丘学園の高等部に通う3年。面倒見がよく、料理も裁縫も上手くて家庭的。友希那とは幼馴染で、昔からよく歌を歌っていたという。俺曰く「楽しいことに目がないギャル」

宇田川（うだがわ）あこ、羽丘学園の高等部に通う1年。Rose liliaのドラム担当。常にカッコいいことを追求する自由奔放な性格。だがカッコいいことを言おうとしても語彙力のなさが裏目になっている。俺曰く「ちょっと残念なお姫様」。

白金燐子（しろかねりんこ）、花咲川学園の高等部に通う3年。Rose liliaのキーボード担当。花咲川学園の生徒会長。恥ずかしがり屋な性格で大勢の人の前では緊張する。普段は口数が少ないがスマホやチャットでは饒舌。俺曰く「バンド界の白雪姫」。】

藍沢「外から見た限りはドラムに何も悪いところはないが……これがせいだな」

あこ「これは……ペダル？」

藍沢「ペダルのバネがちょっと錆びて出が悪くなってる。これが錆びてるとテンポがずれて音楽自体にも障害が出るからこれをちよつと直すから時間をもらうぞ」

燐子「お願ひ……します……」

【十数分後】

藍沢「ふう……こんなものか。ちょっと踏んでみてくれ」

（ドオーン・・・）

あこ「すつごーい！音が戻つてる！」

藍沢「一応俺も楽器をよくメンテしていたからな、これくらいなら寝ぼけてもできる」

友希那「さすがに寝ぼけてやるのはダメでしょう……」

藍沢「そういえばバンドやつて言つてたけど？」

友希那「ええ、昔聞いていた曲があつて、その人は私の憧れだつたの。突然音楽界からいなくなつて私は悲しんだわ……でもそれくらいで諦めることはできなかつた。」

紗夜「そんな時、湊さんからバンドを組んでみないかつて誘われたのよ。」

リサ「そうそう！去年の頭だつたつけ？あの時はビックリしたなあー。友希那の方から誘つてくれるなんて」

あこ「あこもバンドやりたかつたからちよー嬉しかつたよ！」

燐子「はい……私もキーボードをやめるかもしけなかつたので……良かつたです」

友希那「それよりも藍沢さん、楽器に詳しいのね。それも私たちよりも……」

藍沢「別に最初からできてなくとも大丈夫だろ。そのうち覚えていけばいいんだからな。」

紗夜「それはそうですが……昔楽器を弄つてたからつて今は弄つてるわけではないんですね？」

藍沢「たしかにその通りだが……それがどうかしたか？」

紗夜「ここまで覚えているものなのですか？一体どれくらいの期間弄つてなかつたんですか？」

藍沢「たしか……5年前くらいだつたか。」

リサ「ねえ友希那……確か5年前つて……」

友希那「ええ、そうねリサ。」

あこ「友希那さんもりサ姉もどうしたんですかー？」

燐子「心当たりあるんですか……？」

友希那「ええ、虹原彩音（にじはらあやね）という人が音楽界から姿を消したのも5年前なのよ。消えた後を誰も知ることはなく、世界の音楽家から”音楽界の閃光”と呼ばれることになつても戻つてくことはなかつたわ。もしかして藍沢くん……あなたは」

紗夜「虹原彩音さん……本人なのですね？」

藍沢「……やめてくれ、思い出したくない過去なのに」

燐子「あの・・・無理に思い出さなくても・・・」

藍沢「ほら、メンテナンスは終わつただろ。俺はもう行くぞ?」

友希那「ねえあなた：R o s e l i aのサポートーになつてくれないかしら?」

藍沢「どうしてだ、俺にそんな義理はないし俺はもう音楽なんてやりたくないんだ、放つておいてくれ」

あこ「友希那さん、藍沢さんもこう言つてるし・・・」

友希那「でも私たちはメンテナンスに疎い少し樂器に詳しい人がいてくれると私たちはもつと上へ進めると思うのだけれど」

紗夜「そうです。彼の音樂を聴いたでしよう?あの名曲は全て他人で作られたものなのよ。」

リサ「でもさー、藍沢くんもこう言つてるしあまり突つかかつてもダメでしょ?」

藍沢「話は終わつたか?俺はもう行くぞ」

友希那「待ちなさい、話はまだ」

(バタン!!)

リサ「もう、紗夜と友希那がしつこいから藍沢くん出て行つちやつたよ」

あこ「あこはもう少し楽しくお話したかつたのに・・・」

友希那「でも本当の事よ。」

燐子「でも・・・あれは少し言いすぎです・・・」

紗夜「でも湊さんは諦めるつもりはないのでしよう?」

友希那「ええ。諦めるつもりはないわ」

リサ「それが彼の心を傷めることになつても?」

友希那「・・・ええ。」

あこ「・・・ごめんなさい友希那さん。」

(バタン!)

そう言つてあこは練習室を出て行つた・・・

リサ「あーあ・・・友希那、さすがにちょっと言いすぎだよ。」

友希那「・・・」

紗夜「・・・」

【c i r c l e：ロビー】

まりな「あれ、もうメンテナンス終わつたの？」

藍沢「・・・ありがとうございました」

そういうつて俺は野口を一枚置いてc i r c l eを出て行つた・・・
まりな「あれ、どうしたんだろう？何かあつたのかな・・・？」

（バタン！）

あこ「まりなさん・・・つちに藍沢さん来ませんでしたか・・・？」
まりな「藍沢くん？さつき出て行つちやつたけど・・・まだその辺
にいるんじやないかな？」

あこ「そうですか・・・ありがとうございます！代金は友希那さん
に預けてるので後で受け取つてください！」

まりな「あ、あこちゃん!?何処に」

あこもそう言つてc i r c l eから出て行つた。

【帰り道】

藍沢「・・・どこもまだ俺の話ばかりだな。もう俺は虹原彩音じゃない、ただの学生の翠川藍沢なんだ・・・」

あこ「（ハア・・・ハア・・・藍沢さんはどこに行つたんだろう・・・？
まりなさんの話だとこの近くに・・・あつ！）藍沢さん！」

藍沢「お前はさつきの・・・あこ、だつたか。俺を追いかけてくる
なんて何の用だ？まさかお前まで俺をR o s e l i aに勧誘しに来

たのか？」

あこ「違います！藍沢さんとお話したいんです！」

藍沢「・・・俺と話したいって随分と変わったやつだな。だけど俺が話すことなんてないぞ。話したい奴なんて俺以外にたくさんいるだろ、そいつらと話したらどうだ？」

あこ「嫌です！あことお話してくれるまであこは諦めません！」

藍沢「・・・何度も聞かないって顔してるな。さすがにこんな道端で話すものじやない。俺の家に来い、そこで話そう」

【翠川藍沢宅】

藍沢「お茶くらいしかないがいいか？」

あこ「いえ、大丈夫です！あこが押し入っちゃう感じになっちゃいましたから・・・」

藍沢「で、他のメンバーには連絡したのか？」

あこ「あ、はい！心配をかけちゃいましたけど・・・」

藍沢「そうか、俺との話が終わったらちゃんと謝つておけよ？」

あこ「はーい」

藍沢「で、話つて何だ？」

あこ「えっと・・・なんで藍沢さんって楽器を始めたんですか？」

藍沢「・・・そう来たか。確かに俺は現役時代の話はお断りだが新人時代は話しても大丈夫だから鋭いところを突いてきたな。いいだろう話してやる」

あこ「ホント？やつたー！」

藍沢「俺が楽器を始めることになつた理由、だつたか。俺が楽器を始めたのは子供のころだったな・・・あの時はよく親の連れて行くライブに連れていかれてたつけか。」

あこ「へー、小さい頃からライブを見に、ですか？」

藍沢「俺も嫌々言つてたけど親が半強制的に連れていかれたもんだからな・・・ま、最初は聞いててもなんとも思つてなかつたんだが何度も行くうちに次第に惹かれていつた、つて感じだ。・・・なんでいきなりこんなことを聞いてきたんだ？」

あこ「あこも実は藍沢さんと似たような感じなんです。違う点はライブを見に行つてない、ということですね。あこはCDを借りて音楽を聴く、という感じだつたんです。それで、藍沢さんが作つた曲を聴いて・・・あこも楽器をやりたいつて思つたんです！」

藍沢「・・・ちなみにあこが感じた俺の音楽はどうなんだ？」

あこ「あこが藍沢さんの曲を聴いてどんな感じだつたか、ですか？うーん・・・カツコいいつていうのはありふれていますし・・・なんというか・・・気持ちがこもつてると、つて言つた方がいいですか？」

藍沢「気持ちが・・・こもつてる？」

あこ「はい！何だか、自分の気持ちを曲に込めた、そんな感じがしたんですね！あこもあこの言葉の一つ一つに心を込めてますし、みんなにあこの言葉を伝えるのがとても楽しいんです！」

藍沢「気持ち・・・か。一人一人が俺の曲を聴いて意見がそれぞれ違つていたように俺の曲一つ一つにも違う気持ちが込められていた・・・そういうことか。・・・はは、何を勘違いしていたんだろうな、俺は。俺は聞いている奴らからの声を俺が勝手に違う風に捉えていただけなのか・・・」

あこ「・・・藍沢さん」

藍沢「・・・ありがとな、あこ。お前のおかげで大事なことを思い出させてくれた。」

あこ「本当に？あこのおかげ・・・？」

藍沢「・・・ああ。」

あこ「そつかー・・・良かつた・・・あこ、ずっと誰かの力になりたくて・・・こんなあこでも藍沢さんの力になれたんだ・・・！」

藍沢「・・・あこ、R o s e l i aのメンバーに伝えてくれないか？」

あこ「何をですか？」

藍沢 「『俺をR
o
s
e
l
i
aのサポーテメンバーに加えてくれ』

【商店街・藍沢宅】

5月7日

藍沢「ふわあああ……もう朝なのか……たしか昨日は……」

そうだ……俺は昨日散歩の休憩がてらcircleっていうライブハウスに行つたんだつたな。それで俺はRoseliaってバンドと出会つて……それで友希那と口論になつて……circleを飛び出したんだ。それで俺を追いかけてきたあこに俺の曲に気持ちがこもつてたつて言つて……結局俺は曲を聞いてたみんなの感想を俺が勝手に勘違いしてるとつて気が付いて……あこに『Roseliaのメンバーに入れてもらえないか』つてメッセージを頼んだんだつたな……で。

藍沢「あの後、あこを家に帰したかったけどあこが駄々をこねて帰らなかつたんだつたな……仕方ないから俺の家に泊めて明日の朝一旦帰つたほうがいいつて言つてたな……」

起きてから昨日あつたことをつぶやいてから俺はベッドに寝てるあこを起こす。ちなみに俺は床に布団を敷いて寝た。

藍沢「おいあこ起きろ、朝だぞ」

あこ「むにやむにや……あと1時間……」

藍沢「つたく……人の布団で寝るときつてここまで幸せそうに寝るのか?……仕方ないな。少々手荒になるが」

そう言つて俺はリビングにあるものを取りに行つて戻つてきた

藍沢「(カーンカーンカーン!!)」

あこ「!!」

藍沢「よう、やつと起きたかあこ。もう朝の9時だぞ」

あこ「あれ?藍にい?何でここに?」

藍沢「昨日あこが帰らないつて駄々こねてただろ、ここは俺の家だ」

あこ「そりいえば……あ、おはよう藍にい?」

藍沢「ああ、おはよう。とりあえず朝食作つてあるから食べたら一旦家に帰れよ。家の人も心配してるだろうし、今日は練習ないつてリサさんから連絡あつたから今日はゆっくりしていいってな。リサさんの気遣い、無駄にするなよ」

あこ「はーい・・・（目ゴシゴン）」

少年少女食事中・・・

藍沢「（ご）ちそくさん」

あこ「（ご）ちそくさまー！」

藍沢「そうだ、これ。」

あこ「これ何ー？」

藍沢「スポーツドリンクと俺が作つた中でも最高の曲。昨日迷惑かけたせめてものお詫びだ。」

あこ「え？ いいの？」

藍沢「いいんだよ、今度メンバーと一緒に見ておいた方がいい。別に俺のスマホに保存してるからコピーはいくらでもきく。ちなみに俺のスマホは厳重にロックをかけてあるし無断に曲のダウンロードはさせないようにもしてある」

あこ「ありがとう藍にい！」

ちなみにあこが俺のことを「藍にい」って呼んではるのは、あこ曰く「カツコいいがら！」というすぐどうでもいい理由である。

藍沢「ほらあこ、早く帰つたほうがいい」

あこ「はーい。」

藍沢「…さて、今日は休みだしいつものところに行くとするか。」

【羽沢珈琲店】

(カラランカララン)

?? 「いらっしゃいませー・・・あ、翠川さん。」

藍沢 「よ、つぐみ。いつものやつ頼む。」

つぐみ 「わかりました、少しお待ちください。」

【プチ自己紹介・羽沢（はざわ）つぐみ、羽丘学園の高等部に通う2年。去年から週4で行くようになつた「羽沢珈琲店」の一人娘。俺曰く「どこにでもいる頑張り屋な高校生」。現在は羽丘学園の副会長。Afterglowのキーボード担当。】

藍沢 「モ力たちはまだ来てないのな。この時間帯なら休日はよく来てるだろうから来てみたんだが」

?? 「もう来てるよみどりーん」

藍沢 「なんだ、来てるなら声をかけてくれればいいのに」

モ力 「モ力ちゃんはいつもマイペースなのでーす」

【プチ自己紹介・青葉（あおば）モ力、羽丘学園の高等部に通う2年。つぐみとは幼馴染で、掴みどころがない性格。俺曰く「スポーツ選手10人分の胃袋を持つブラックホール」。Afterglowのギター担当。】

?? 「あたしらもいるんだけど」

?? 「昨日はあこが世話になりました、翠川さん」

藍沢 「蘭と巴か。昨日はあこが駄々をこねてたからしようがねえよ」

【まとめてプチ自己紹介・美竹蘭（みたけらん）、羽丘学園の高等部に通う2年。つぐみやモ力と幼馴染。ツンツンしていることが多いがデレると可愛い。赤メッシュが特徴。俺曰く「Afterglowの一番の苦労人」。Afterglowのギター担当。】

もう一人は宇田川巴（うだがわともえ）、羽丘学園の高等部に通う2年。つぐみ達とは幼馴染。サバサバとした性格で、たまに男と間違われる。あこの実の姉。俺曰く「お祭りバカ」。Afterglowのドラム担当。】

??「ごめん！コンビニのデザート買ってたら遅くなっちゃつてー

…あ、翠川さん！」

藍沢「そんなに甘いもの食べてたら太るぞひまり」

ひまり「(グサツ)」

【プチ自己紹介・上原（うえはら）ひまり、羽丘学園の高等部に通う2年。つぐみ達とは幼馴染。甘いものに目がなく、たくさん食べては体重が増えるお氣毒体质。俺曰く「スイーツハンター」。Afterglowのリーダー兼ベース担当。最初は誰もが「蘭がリーダーがいい！」って言つていたらしいが蘭が頑なに断つていたので流れでひまりがリーダーになつたという。】

つぐみ「お待たせしましたー！ブラツクコーヒーです！」

藍沢「サンキュー。(ゴクゴク……)この苦さがうまいんだよな。つぐみはまだ飲めないか？」

つぐみ「はい：やつぱり苦いのはまだ…」

藍沢「そのうち飲めるようになるから大丈夫だ」

ひまり「つぐー！わたしたちもいつものー！」

つぐみ「はーい！ちょっと待つてね！」

藍沢「お前たち、いつものやつ好きだな。」

蘭「あたしらはいつも通りに過ごすだけですから。」

モカ「やりすぎはよくないですからー」

巴「それ、モカが言つても全く説得力ないぞ……」

ひまり「女の子は甘いものが大好きですかー！」

蘭「いや、あたしは甘いものはあんまり好きじゃないから。」

藍沢「そういうえば蘭はそうだったな。まあ誰しも甘いものが好きつてわけじゃないし」

ひまり「そういうれば翠川さんつてどういう味付けが好みなんですか？」

藍沢「俺か？俺は食べればつて感じだな。強いていうなら辛いのが好きだ。カレーとかもいつも辛口頼んでるし。」

巴「アタシも辛い物は結構好きだけどな。多分今この中で辛いのが嫌いなのはひまりだけだぞ」

藍沢「だそだからひまりはもう少し辛いのに慣れような。」

ひまり「ううー、なんでそんなにみんな辛いもの食べれるのー···?
?」

藍沢「俺は昔から好きだつたからな。」

蘭「あたしは元々苦手だつたけど食べてたらそのうち慣れてきたか
ら」

モカ「モカちゃんはおいしいものなら何でもーつて感じー」

巴「アタシは藍沢さんと同じ理由だな」

ひまり「ううー···辛いのなんてこの世からなくなればいいの
にー···」

藍沢「おつと、そろそろ昼か。俺は家に帰るぞ。」

蘭「あれ、もう帰つちやうんですか?」

藍沢「まだ読み終わつてない課題があるからな。単位は取れてるつ
ていつても予習くらいはしつかないと」

巴「翠川さんつて意外と真面目なんですよね。モカも翠川さんの事
見習えよ?」

モカ「モカちゃんはマイペースなのでー」

藍沢「じゃあ俺は行くぞ。お代は置いていくから誰か払つといてくれ
れ」

ひまり「それじゃあまた今度ですね!」

藍沢「じゃあな」

そういつて俺は羽沢珈琲店を出た。

【藍沢宅】

藍沢「つつても課題は全部終わつてるしな···適当に理由付けて
出てきたはいいがやることないから昼寝するか···」

zzz······

?? 「・・・起きてください、藍沢さん。」

藍沢 「（・・・誰だ？家のカギは開けてたが誰か俺に用事がある奴なんっていたか・・・？）」

?? 「・・・起きなさい。起きないと寝てる顔に水をかけるわよ」

藍沢 「わかつたよ・・・今起きるからリビングで待つてろ・・・」

藍沢 「こんな昼間に誰だ・・・つて友希那と紗夜か。どうしたんだ？」

友希那 「・・・昨日のことで謝りに来たのよ。昨日は何も知らなかつたとはいえあんなことを言つて・・・ごめんなさい。それに無理やりR o s e l i aのサポートとして勧誘しようとして・・・」

藍沢 「もう別に気にしてないからいいぞ。」

紗夜 「いえ、いつまで経つても謝らなかつたら一生後悔していたと思ひますし、これは私たちが原因だつたので・・・私からも謝ります。」
藍沢 「もういいって言つてるだろ。それに謝るつていうのなら俺も同じだ・・・実はあの後、あこが俺の後を追いかけてきて俺に音楽が好きになつた理由を話してくれたんだ。」

友希那 「あこが？私たちにはまだ話していなかつたのに」

藍沢 「あこが好きになつた理由は、俺の作つた曲がかっこよかつたらしくてな。それで当時は教科書とかでドラマのように叩いていたらしい。」

紗夜 「宇田川さんがそんなことを・・・」

藍沢 「それに、あこは俺の曲を聴いて自分がどのように感じたのか話してくれた。それを聞いて確信したんだ。」

友希那 「確信？何を確信したというの？」

藍沢 「俺の曲に感想を書いてくれたやつの感想を俺が勝手に頭の中

で違う風に考えていたってな。年下に慰められるつてダメな先輩だよな・・・まつたく。自分自身が情けなく感じるよ」

友希那「・・・そんな過去があつたのね。だからあの時あなたは・・・」

藍沢「もう過ぎた話だ。それで二人は何か用があつてここまで来たんだろう?」

紗夜「そうでした。湊さん。」

友希那「ええ、そうだつたわね。藍沢さん、私たちに曲の作り方を教えてもらえないかしら?」

藍沢「お前たちに?あれから俺はR o s e l i aについて調べてみたんだが、プロも一日置くガールズバンドつて聞いたんだがどうして今更?」

友希那「私たちに足りないもの、それは作曲よ。これまで私たちは自分たちの力だけで曲を作り上げてきた。だけどこの前のライブではお客様たちに満足させるまでに至らなかつたの。その時感じたわ。まだ私たちには足りないものがあるって・・・」

藍沢「だからあの時俺を勧誘しに来たのか。」

紗夜「はい。だから過去に何百曲も作つていたあなたにお力を添えていただくてお願ひしたのです。どうか私たちに曲の作り方を教えていただけませんか?」

藍沢「俺は作曲をやめてからもう何年も経つんだぞ?今から作曲の作業に戻つたとしても大きなブランクがある。それでもいいのか?」

紗夜「はい、私たちの方も経験でいえばまだ未熟です。悔しいですが・・・じぶんたちの実力を痛感しましたから。私たちが世界に咲き誇るにはあなたの力が必要なんです」

藍沢「断る。」

紗夜「どうして?」

藍沢「もう俺はR o s e l i aのサポートーだ。力を貸すんじゃなくて同じ志を目指す仲間として俺はみんなと接したい。これじゃダメか?」

友希那「何か違う形だとは思うけど・・・改めてこれからよろしくお願ひするわ、藍沢さん。」

藍沢「ああ、改めてよろしくな。友希那、紗夜。」

そういうつて俺たち3人は手を重ねて俺は誓う、このバンドを世界に咲き誇らせる。

そして俺は思う。このバンドなら昔の俺の情熱を取り戻してくれる…と。

5月22日

【商店街・藍沢宅】

藍沢 「もうちよつと寝てたかったけど・・・今日はあいつらと約束してたからな、俺が遅れちや何か悪いしもう出とくか。」

あこ 「おはよう藍にい！」

藍沢 「・・・なんでここにいるんだあこ。俺はキツチリと現地集合って言つたはずなんだが？それにいつも一緒にいる燐子はどうした？」
あこ 「りんりんはねー、徹夜でNFOしちゃつたから寝坊しちゃつたんだつて。だから今リサ姉と紗夜さんが迎えに行つてるつて！」

藍沢 「友希那はどうした？」

あこ 「友希那さんは途中猫を見つけて固まつてるつてリサ姉から連絡あつたよ」

藍沢 「なんというか・・・ある意味自由だな、お前たち。ちなみにあこは昨日の夜何してた？」

あこ 「あこはりんりんと一緒にNFOやってたんだけど、お出かけするのを思い出して早めに切つたんだけど・・・」

藍沢 「あこはそこのところはしつかりしてるのな。後はその性格とか直せばまだいいんだが・・・」

あこ 「え？なんですか？」

藍沢 「何でもない、早くしないと置いて行くぞ」

あこ 「藍にい、待つてよー！」

【ショッピングモール前】

藍沢 「少し早く来すぎたか？まだ誰も来てないな・・・」

あこ「藍にい・・・走るの・・・早いよー・・・（ゼエゼエ）」

藍沢「運動量が足りないぞあこ。体育の授業ちゃんと受けてるのか？」

あこ「ちゃんとやつてるよー・・・あこはダンス部にも入つてるのに・・・体力はついてるはずなのに…」

藍沢「まあ俺はトレーニングを欠かさないからな。ランニング、ウオーキング、運動系部活への助つ人・・運動になりそうなのは片つ端からやつてる。俺は高校3年生で他の同級生は部活を引退してるけど部活への助つ人は特に禁止はされてなくてな、暇があつたら新部長に呼ばれたりしてる。昨日も一昨日も助つ人に呼ばれてたんだが、体力が有り余つてたから疲労とかは特に何もない」

あこ「羨ましいなあー・・・」

【5分後】

リサ「あ、藍沢くんとあこー！もう来てたんだ！」

紗夜「おはようございます。宇田川さん、翠川さん。」

燐子「おはよう…・・・」

藍沢「おはよう。燐子が寝坊したつてあこから聞いたからもう少し遅れるつて思つてたんだけど・・・で、リサと紗夜で背負つてきたのはなんだ？」

リサ「あ、これ？友希那だよ友希那。ほら、猫を見て固まっちゃつてたつて言つたじやん？あれからずつと動かなくつてさー・・捨て猫を抱いたまま背負つて来ちやつた♪」

藍沢「はあ・友希那の猫好きにも困つたものだな。捨て猫だし誰かが飼うべきなんだろうけど他のメンバーはどうなんだ？」

リサ「アタシの家は無理かなー・・動物を飼いたいのは山々なんだけど親が許してくれなくつて…」

紗夜「私の家も無理ですね、日菜にもみくしゃにされる未来しか見えないので」

燐子「私の家も・・・無理・・・です・・・ピアノの演奏を止めら

れちやうと困るので・・・」

藍沢「友希那は・・・無理だな。練習が厳かになりそうだし。」

あこ「あこの家も無理だよー…お姉ちゃんが猫嫌いで・・・」

藍沢「となると…俺の家しかなきそそうだな。俺の家はただの一軒家だから猫一匹くらい増えても問題ないぞ。」

リサ「え? いつ猫一匹つて言つた?」

藍沢「は?」

リサ「あはは・・・実は友希那の頭に乗つてるのは一匹だけだけど」
紗夜「途中から1匹増えてしまつて今ここにいるのは2匹なんです。だから私たちは困つてるんです・・・」

藍沢「・・・しようがないな。俺が二匹とも貰うからとりあえず猫を連れてきてくれ。」

そういうつてリサと紗夜は猫を一匹友希那の頭から降ろし、紗夜の肩に乗つた猫を降ろす。一匹の毛の色は真っ白で、目の色は赤。俺はとりあえず「ルビー」と名付けた。もう一匹は茶色と灰色の縞模様で、目の色は藍色。こつちは「マリン」と名前を付けた。意外にもリサと俺、あこにあつさりと懐いた。紗夜は猫に触るのが苦手・・・らしい。燐子は猫自体は好きらしいが「触るのはちよつと・・・」と本人が言うの仕方なかつた。友希那? 触らせたら埒が明かないから触れさせなかつたぞ。

ちなみに、マリンは雄でルビーは雌だ

藍沢「途中から増えたけど早く入るか。今日は何の目的でここまで来たのか忘れるなよ?」

友希那「わかっているわ」

そう、俺たちは曲を作り始めたはいいがアイデアが思いつかなかつたりしたらしく、たまには気晴らしもいいだろう、と俺が提案したのだつた。途中でアイデアが浮かんだら手帳にアイデアを書き込んで今後作る曲のイメージとして使うのもいいだろう、というのがこのお出かけの主な理由だ。偶然にもこのショッピングモールはペツト同伴可、ということなのでマリンを俺の肩に乗せ、ルビーはあこの肩に

乗せてそれぞれショッピングモールを回ることにした。一人で回るのは危険だと思ったので二人一組で3組に分けることにした。そのくじの結果はというと：

俺ーあこ、紗夜ー燐子、友希那ーリサの組み合わせになつた。

藍沢「それじゃあ行くか。」

【ショッピングモール】

あこ「えへへ・・・藍にいとショッピングだー！」

藍沢「それが目的じゃないだろ、このお出かけの意味はあくまで次に作る曲のイメージを考えることだ。店に寄ることは問題ないけど、金の無駄な浪費は避けておけよ？ライブハウスでの練習ができないとバンドも何もないからな」

あこ「はーい・・・」

藍沢「お、ここはいいんじゃないかな？」

あこ「えーっと・・・花屋さん？」

藍沢「えっと・・・あつたあつた。青い薔薇だ」

あこ「青い薔薇が何なの藍にい？」

藍沢「ほら、R o s e l i a の衣装つて「青い薔薇」のイメージが濃いだろ？だからイメージとしてはピッタリなんだよ。」

あこ「へえー・・・いいかも！それにかつこいいし！あ、あれもいいくかも！」

藍沢「一体何を・・・これは」

あこ「えへへー、いいと思わない？」

そう言つてあこが見つけたのは・・・

藍沢「・・・これつて絵の具セットだよな？」

あこ「ほら、十人十色つていうでしょ？あこたちはみんな違う考えを持つてるし、みんなの個性みたいに綺麗だつて思わない？」

藍沢「なるほどな・・・まあこれはこれでいいだろうし手帳に書いておくか。」

リサ「あこー、いいの見つかった?」

あこ「色々見つかったよー!リサ姉たちは?」

友希那「なかなかいいのが見つかったわ。」

藍沢「……これ、お前たちが買いたかつただけなんじやないのか?どう見ても服とかヘアアクセを買ったようにしか見えないんだが」

リサ「あはは、ごめんねー?アタシつておしゃれ好きだからつい買つちやつて♪あ、あこの分もあるよ?」

あこ「本当!?やつたー!」

藍沢「……あこ、ちゃんと後で代金払つとけよ?で、曲のイメージはちゃんと手帳に書いてきたんだろうな?」

リサ「もちろんそれも忘れてないって!ほらこれ。」

藍沢「なになに……?『作曲の基本』?……なんだこれ」
友希那「何つて、作曲の基本を書いているのよ。翠川さんが来れないときは私たちで作らなきやいけない時だつてあるし、書いておいても損はないでしよう?」

藍沢「いやそうじやない、俺が手帳に書いてほしかつたのは『曲のイメージ』なんだが?」

リサ「いや、これも一応アタシ達なりの曲のイメージだよ?アタシ達は本格派バンドだけど、偶には始めたばかりの人たちのために聞かせる曲っていうのもいいじゃん?」

藍沢「あー、なるほど。そういう意味ではある意味イメージとしてはあつてるな。」

リサ「でしょー?」

藍沢「で、他には?」

リサ「あはは……他は?つて言われても友希那がペツトショップに一直線に行つて猫のケージに張り付いちやつてなかなか離れてく
れなくて……」

藍沢「……友希那?」

友希那「……ごめんなさい」

藍沢「はあ……一つだけでもイメージがあつたのならいいか……おつ
と話してるうちにもう一組も帰つてきたな」

紗夜「ただいま戻りました。皆さん、思いのほか早かつたですね」

燐子「探すの……大変……でした……」

藍沢「おかえり。じゃあ見せてくれ、紗夜たちが掘んだ曲のイメージを」

紗夜「これです。」

なになに…？さらなる高みを目指すバンドの結成秘話、世界で彩る
バンドの曲のイメージ集、名前から診断するイメージ……？

藍沢「二つはわかるとして、最後のは何だ？」

燐子「それは……皆さんのお名前を入力して、どんなイメージがあるのかという……それはその結果……です」

なになに…？翠川藍沢……みんなからの頼られ役。湊友希那……
頼もしいリーダー。白金燐子……優しいみんなのまとめ役。氷川紗
夜……時に厳しく時に優しい先導者。今井リサ……縁の下の力持
ち。宇田川あこ……肝心な時に駆け付ける援軍

藍沢「いくつか合わなさそうなのがあるが……気にしたら負けだ
ろうな、うん」

紗夜「どうでしようか？このイメージを曲にしてみては？」

藍沢「つまりあれか。それぞれの持つイメージを曲にしてみよう、
ということだな？」

燐子「そういう……こと……です……」

藍沢「なるほどな……でも全員のイメージを曲にしたらとてつもなく長くなりそだからそれについてはそのイメージを持つ本人に書いてもらう。学校でいう宿題みたいなものだ。別に期限とかは設けないけどできるだけ早く仕上げてくれると助かる。」

あこ「えー！宿題ー！？あこ宿題なんて嫌だー！」

藍沢「別にやらなくていいんだぞ？せっかく俺がみんなの分まで
今日の夜ご飯を作ろうとしたのにな。」

リサ「何を作るの？」

藍沢「んー、野菜炒めとか簡単なものばかりになるけど

あこ「宿題をしなかつたら…？」

藍沢「そうだな……メンバーの苦手なものを無理にでも食べさせ

る、とかか？」

あこ「やりますやります！」

リサ「（あこ）、逃げたね」

友希那「（逃げたわね）」

紗夜「（逃げましたね）」

燐子「（敵に背を向けちゃうんだあこちゃん・・・）」

藍沢「やる気になつたところで、とりあえず俺の家まで案内するからちやんとついてきてくれ。寄り道とかは絶対にするなよ？特に友希那はな」

友希那「どうして私なの？」

藍沢「お前はもう少し自分の今日の行動を見直した方がいい。ちなみに他のメンバーと途中で分かれたりしても捨て猫みたいに拾つてやらないからな？」

【藍沢宅：リビング】

藍沢「（）ちそうさま」

R o s e l i aメンバー「〔〔〔〔（）ちそうさま〕〕〕」

ルビー・マリン「ニヤー」

あこ「藍にいって猫まんま作れたんだ？」

藍沢「ショツピングモールで空いた時間に調べといったんだよ。これから猫の世話もしないといけないし、あの時は買う時間まではなかつたし」

リサ「でもすごいなー。アタシじや絶対に無理だもん」

藍沢「まあさすがにみんなが帰った後に買いに行くけどな。あまり作りすぎても俺の食費がやばい」

友希那「そろそろいい時間だし私たちはそろそろ帰りましょうか。」
紗夜「あまり長居しても翠川さんに迷惑でしようからね。お暇しま
しょう」

あこ「はーい！それじゃあ藍にい、またねー！」

藍沢「おう、気を付けて帰れよ。」

【藍沢の自室】

藍沢「(ああは言つたが、俺は猫飼つたことないんだよな・・・まあ
どうにかなるだろ)」

Chapter 3 : Help me I am Hesitating

6月6日

【藍沢宅】

藍沢「あれから二週間経つけど・・・みんなから連絡来ないな、結構迷走してるか?俺の方は昨日終わつたけど・・・暇だな、ちょっと出歩くか」

マリン・ルビー「ニャー」

藍沢「なんだ、お前たちも行きたいのか?でもあまり迷惑はかけるなよ?」

マリン・ルビー「フニャー」

【商店街】

藍沢「・・・何もないな。結構歩いたしそろそろかえり・・・」

??「ふえええー・・・ここどこ・・・?」

藍沢「ん・・・こんなところで何してるんだ?周りを確認して・・・あれ完全に道に迷ってるな。放っていくわけにもいかないし・・・ちよつとそこの。」

??「ふえっ!?

藍沢「こんなところに一人でどうしたんだ?」

??「恥ずかしい話・・・道に迷っちゃつたんです・・・私、方向音痴で地図があつても迷っちゃうんですね・・・」

藍沢「・・・(呆れた、まさか地図があつても迷うのか)・・・ちなみにどこに行こうとしてるんだ?この辺は土地勘あるから案内するぞ。」

?? 「あ、ありがとうございます……あ、私の名前は松原花音（まつばらかのん）っていいます……あなたは……？」

藍沢 「藍沢。翠川藍沢だ。」

【「チ自己紹介・松原花音（まつばらかのん）、「ハロー、ハッピーワーランド！」というバンドのドラム担当。少し恥ずかしがり屋でよく道に迷う。俺曰く「歩くランドマーク」。】

藍沢 「何処まで行こうとしてたんだ？」

花音 「ちよつとこころちやんのところに……」

藍沢 「あいつのところに？」

花音 「うん、今日は迷わないで一人で行つてみようと思つてたんだけど……案の定迷っちゃつて……」

藍沢 「まあ、チャレンジするのは悪いことじゃないと思うけど……迷うのはどうしようもないな」

花音 「ふええー……」

藍沢 「ここだな、着いたぞ。」

花音 「あ、ありがとうございます……あれ？ そこにあるのって……」

⋮

?? 「よかつた、花音さん。今から迎えに行こうと思つてたので……ちなみに隣の人は誰ですか？」

藍沢 「俺は翠川藍沢。商店街をふらついてたら偶然見つけたからここまで責任もつてお届けした」

?? 「あたしは奥沢美咲（おくさわみさき）つていいます。翠川さん、花音さんをここまで連れてきてくれてありがとうございます。」

【「チ自己紹介・奥沢美咲（おくさわみさき）、「ハロー、ハッピーワーランド！」というバンドのDJ担当……なのだが実際に演奏しているのは彼女が着ている着ぐるみ、ミツシエルなのである。しつかり者で面倒見がいい。俺曰く「おせつかいな苦労人」。】

花音 「ごめんね美咲ちゃん……やっぱり美咲ちゃんと一緒に行けばよかつた……」

美咲 「別に花音さんは悪くないですよ。あたしたちに気を使つてたんですよ？ 自分で道を覚えようとするなんていいことじやないで

すか

藍沢 「そこまで方向音痴が厄介なのか・・・」

花音 「あ、そうだ翠川くん。」

藍沢 「ん?なんだ?」

花音 「せっかくだから私たちのバンドの話し合い、見て行かないかな?」

美咲 「花音さん?珍しいですね、今日初めて会つたばかりの人を誘うなんて」

花音 「だつて、初対面なのに私のことを助けてくれて…恩返しつていうほどのものじゃないかもしけないけど…」

藍沢 「俺がハロハピの話し合いに参加?冗談…じやなさそうだな」

美咲 「あたしからもお願ひします。ちよつと今回の話し合いは苦労しそうなので…一人でも多くまともな人がいてくれると助かります」

藍沢 「美咲がここまでいうからには相当なんだな、俺でよければ参考させてくれ。ちょうど暇を持て余していたし」

美咲 「じゃああたしはちよつと行くところがあるので花音さんと一緒に先に行つてください。中に入れば部屋まで案内してくれる人がいるので」

藍沢 「了解。それじゃあ行こうか花音」

花音 「は、はい!」

【弦巻邸】

(ギィー・・・)

藍沢 「外見は伊達じやないってか。中もそうとう広そうだ」

花音 「私も最初は迷っちゃつて…でも今もたまに迷っちゃいます…」

??? 「失礼いたします、どちら様でしようか?」

藍沢 「(花音、この人たちは誰だ?)」

花音 「(この黒服の人たちはこころちゃんのお世話をしてくれる人たちだよ。いつも急に現れてきたりして私たちのこともサポートしてくれるんだ)」

藍沢 「(やっぱりただものじやなさそうだな、そのこころかいうやは)」

??? 「失礼ながら、お名前を」

花音 「あ、この人は翠川藍沢さん。私が道に迷つてたところを助けてくれて…」

黒服 「なるほど、藍沢様ですか。この度はこころ様のご友人、松原様を助けていただきありがとうございました。ところで今日はどのような案件で?」

花音 「あの、今日のハロハピの話し合いなんだけど、翠川さんにも参加できますか・・・?」

黒服 「その程度なら何も問題はないでしょう。ではこちらへ・・・」
藍沢 「そういえば美咲は?少し行くところがあるつて言つてたよくな・・・それにしては遅くないか?」

花音 「たぶん、もう部屋についてるこころだよ。」

藍沢 「行くところつて部屋の事じやなさそうだしな・・・」

花音 「そこは部屋についてのお楽しみつてことに・・・」

藍沢 「・・・そうか、そういうことにしておく」

【弦巻邸：こころの部屋の前】

藍沢 「で、着いたはいいけどどうすればいいんだ?引いても押してもドアが開かないんだけど」

花音 「私に任せて。よいしょ・・・つと」

そう言つて花音は扉の前に立つと…

扉を下から上に上げた。

藍沢「・・・」

なるほど、この取つ手はただの飾りか。それでこの扉は絵…よく描かれてるものだ

花音「翠川くん？そこで何してるのでやく入ろう？」

藍沢「あ、ああ…」

【弦巻邸・こころの部屋】

??「あら、見ない顔ね！誰でも大歓迎よ！」

??「もしかして、新しいメンバー!?やつたねこころん、メンバーが増えるよ！」

いやめろ

??「今日は麗しき子猫ちゃんだけでなく気高き子犬にも出会えるなんて…ああ、儂い

??「はいはーい、とりあえず椅子に座ろうねー？」

花音「こころちゃん、この人は今日の話し合いに参加してくれるだけバンドに誘うわけじゃないから…」

こころ「あら、そうなの？残念ね」

【チチ自己紹介：弦巻（つるまき）こころ。「ハロー、ハッピーワールド！」というバンドのリーダーでボーカル担当。弦巻家のご令嬢。天真爛漫で何事にも積極的な性格。俺曰く「常識知らずのお転婆娘」。】

?? 「なーんだ。新しいメンバージやないんだー・・・」

花音 「う、うん・・・何か期待させちゃつたのならごめんねはぐみちゃん・・・」

はぐみ 「大丈夫だよかのちゃん先輩！」

【「チ自己紹介・北沢（きたざわ）はぐみ。「ハロー、ハッピーワールド！」のベース担当。商店街にある「北沢精肉店」で働く元気っ子。スポートが得意だが勉強が苦手だという。俺曰く「元気溢れるトラブルメーカー」】

?? 「それにしても珍しいじやないか、花音が王子様を連れてくるなんて」

花音 「私はただ助けてもらつただけだから・・・それに王子さまって・・・薰さんはやつぱり変わってるなあ・・・」

薰 「ふふ、可憐な子猫ちゃんにそう言つてもらえてうれしいよ」「チ自己紹介・瀬田薰（せたかおる）。「ハロー、ハッピーワールド！」のギター担当。よく「シェイクスピア」の言葉を口にするが、大体の人は理解できない。口癖は「夢い・・・」俺曰く「偉人好きな変人」。?? 「花音さん、お疲れさまー。」

花音 「うん、美咲ちゃんもお疲れ様」

藍沢 「待て、今美咲つて言わなかつたか？」

花音 「うん、言つたけど・・・」

藍沢 「その本人はどこにいるんだ？」

花音 「え？ ここだけど・・・」

そう言つて花音が指さしたのは・・・

藍沢 「・・・ピンクのクマ？ もしかして着ぐるみかこれ？」

美咲 「・・・はい、そうですよ翠川さん。ミツシエルこと奥沢美咲です・・・」

藍沢 「何でこんなことになつてるのかは聞かないが・・・苦労してるんだな、お前」

美咲 「本当ですよ・・・」

【「チ自己紹介・ミツシエル。「ハロー、ハッピーワールド！」のDJ担当。中に入つてるのは奥沢美咲・・・なのだが美咲曰く、ここと

はぐみ、薰は正体に気づいていないらしい。ところ達曰く「美咲は6人目のハロハピ」。俺曰く「謎に包まれたピンクのクマ」。】

花音「ところでこちらちゃん、話し合いつて何かな？」

ところ「花音、みんな！今日、商店街でライブをするわよ！」

藍沢「は？」

・・・今なんて言つた？「今日商店街でライブ」？・・・そんなの聞いてないんだが

藍沢「ちょっと待て、俺はそんなこと聞いてないぞ」

ところ「そうよ？だつてさつき思ついたんだもの！」

おいおい本気か？ちゃんと商店街のみんなに連絡入れたんだろうな・・・？」

藍沢「（美咲、ハロハピつていつもこんな感じなのか？）」

美咲「（はい・いつも心は突拍子でとんでもないことを言い出すの）で今日はストップバーとして手伝つてもらいたかつたんです・・・」

藍沢「（俺にどうにかしてほしい・・・つてわけか。）」

美咲「（なんかすみません…うちのこころがご迷惑をおかけします・・・）」

藍沢「はあ・・・とりあえずこころ、だつたか。商店街のみんなには連絡を入れたのか？」

ところ「いいえ、入れてないわ！でも大丈夫よ！」

藍沢「いやいや、いきなり押しかけられて『はいそうですか』つてなるわけがないだろ。俺も商店街に住んでる一人の人間として今日のライブは止めさめてもらう」

ミツシエル（美咲）「わたしも今日はやめておいた方がいいんじゃないかなー？いきなりやるつて言われても急には無理だと思うよー？」

花音「やるなら前もつて連絡を入れてからの方がいいかも・・・」

ところ「そう？ミツシエルや花音が言うのならそうしようかしら。それじゃあ藍沢！」

藍沢「なんだ？」

ところ「商店街でいつが開いているか調べてちようだい！」

藍沢「なんで俺なんだ？商店街にいる他の大人に聞けばいいだ

ろ・・・それこそはぐみとかに」

はぐみ「はぐみはお手伝いが忙しくて聞くのは難しいから・・・」

藍沢「・・・俺ならどうせ暇だらうしつて思つてるのか。俺もこう見えて忙しいんだが」

花音「じ、じやあ暇な時でいいから聞いておいてほしい・・・なんてダメかなあ?」

藍沢「・・・ダメって言つても聞かなそうだし・・・しようがないな、こつちで調べておくからとりあえず連絡先の交換な。」

少年少女連絡先交換中・・・

藍沢「よし、これでいいな。それじゃあ日程がわかり次第連絡するからそれまで待つてろ」

5人「[「[「はーい(わかった)」「」]」」

藍沢「もう用事は終わつたか?なら俺は帰らせてもらうぞ」

こころ「とつても楽しい時間だつたわ!また会いましょう!」

藍沢「気が向いたらな。」

【藍沢宅】

藍沢「ある意味大変だつたな・・・今日はもう休むか・・・」

(デデドン「LUNAの着信音」)

藍沢「ん?美咲から?」

美咲『今日はこころの無茶ぶりに付き合つてくれてありがとう』がいます。なんかすみません・・・花音さんを連れてきたのに話し合いに参加してくれて・・・あたしのほうでも商店街の皆さんに掛け合つてみるので一人で背負わないでください。』

藍沢『いや、乗り掛かった船だつたから別に大丈夫だ。』

美咲『そうですか、ならあまり気にしないでおきますけど・・・無理をしないでください。』

藍沢『ありがとな。また困ったことがあれば呼んでくれ、時間がある時にそつちに向かう。』

美咲『ありがとうございます、また今度時間があつたらその時は一緒にお出かけなんてどうです?』

藍沢『考え方』

美咲『わかりました。それではお疲れ様です』

藍沢『お疲れ』

藍沢「・・・なんか眠気が来たな、夕方まで寝るか・・・」

そう呟いて今日は眠りについた・・・のはよかつたのだが今日は起きることなく15時間も爆睡していた

6月13日

【藍沢宅】

藍沢「朝……ね……やつぱり朝は苦手だな。」

(デデドン「LUNAの着信音」)

藍沢「ん? 誰から……紗夜? こんな時間に何の用なんだ?」

紗夜『これから時間ありますか? ちょっと付き合つてほしい場所があるんですけど……』

藍沢『別に大丈夫ですけど……どこに行くんですか?』

紗夜『ちょっと妹が弁当を忘れて行つてしまつたみたいで……私ひとりじゃ入るのに抵抗があるんです。私の方は作曲は終わつたんですけど、他の人たちはまだ迷つてるみたいですからこんなことを頼めるのは翠川さんしかいなんですね』

藍沢『紗夜はもう終わつたのか、てつきり1ヶ月丸々使うのかと思つたけど』

紗夜『余計なお世話です。では1時間後に楽器店前集合でいいですね?』

藍沢『オッケー、余裕持つて出とくから』

紗夜『ではまた後で』

【1時間後：江戸川楽器店前】

藍沢 「早かつたな紗夜。」

紗夜「いえ、学校では風紀委員を務めていますのでこれくらいは当然です。少しの遅刻は許しません。翠川さんはちょうどに来るあたりしつかりしているようですね」

藍沢「これでも結構急いできた方なんだよ。家から歩いてくるのは時間かかる方なんだ」

紗夜「そうですか、ですが時間は余裕を持った方がいいですよ。」

藍沢「善処はする」

【30分後：事務所前】

藍沢 「ここは？」

紗夜「妹が所属する事務所です。普段は元気で余裕があるように見えますが・・・実は会う時間があまりないんです」

藍沢「事務所に所属・・・つまりアイドルってことか？高校生でアイドルやつてるとか・・・」

紗夜「私も最初は止めようとしたんですが、妹曰く『やってみれば何でもできちゃう』だそうなので」

藍沢「なんつー天才少女だそれ・・・つまりあれか、『オーデイションを受けてみたらなんとなく受かっちゃった』とかか？」

紗夜「そういうことです。さあ入りますよ、妹に連絡は入れているので普通に入れます。ですが粗相のないようにお願いします」

藍沢「別にそこまでやらかさねえよ。」

紗夜「ああ、それと」

藍沢「ん？」

紗夜「妹には少しだけ注意しておいてください。」

【事務所】

藍沢 「お邪魔しますよ・・・つと」

紗夜 「ちょっとドアから離れてください」

そう紗夜が言つた時にはもう遅く：気が付けば

?? 「おねーちゃん！」

?? 「サヨさーん！」

俺に抱き着こうとして来てる二人の女性が目の前にいた

藍沢 「(そういうことか・・・)」

チヨン

?? 「いたつ」

藍沢 「アイドルがそんないきなり抱き着きに来るものじやないだろ

普通・・・」

紗夜 「日菜、初対面の人にいきなり抱き着きにかかるのは姉として感心しないわ」

日菜 「うー・・・おねーちゃんに怒られちゃった・・・」

【チ自己紹介：氷川日菜（ひかわひな）、「P a s t e l * P a l e t t e s」というアイドルバンドのギター担当。「やつてみたらできちやつた」というすごい才能の持ち主。本人は自覚なし。俺曰く「努力を知らない天才】

?? 「ヒナさん、ドツキリ失敗ですね・・・ドツキリって思つたより難しいです・・・」

日菜 「でも今度はうまくいくよイヴちゃん！ブシドー！ってね♪」
イヴ 「はい！ブシドーです！」

【チ自己紹介：若宮（わかみや）イヴ。「P a s t e l * P a l e t t e s」というアイドルバンドのキーボード担当。フインランド人と日本人のハーフ。日本に興味津々で「ブシドー」を極めようとしている。当の本人は「ブシドー」が何かよくわかつてない模様。俺曰く「鎧を着せたら敵なし】

?? 「日菜ちゃん、いきなり抱き着きにかかるのはアイドルとしての

自覚はあるのかしら?」

日菜「だつてー、おねーちゃんが連れてくるつて人がどんな人か知りたかつたんだもーん。千聖ちゃんも気になつてたくせにー♪」

千聖「たしかに気になつていたけれど、それとこれは話が別よ?」

【「チ自己紹介・白鷺千聖（しらさぎちさと）。「Pastel*Palettes」というアイドルバンドのベース担当。子供のころからさまざまなドラマに出演していた子役。みんなの知らないところで努力をしている。俺曰く「生真面目な努力家」】

??「あはは・・・日菜さんもイヴさんも楽しいことには目がありませんからね・・・少しくらいは目を瞑つてあげましよう千聖さん」

千聖「麻弥ちゃんも麻弥ちゃんよ。しつかりとみんなをサポートしてあげないと」

【「チ自己紹介・大和麻弥（やまとまや）。「Pastel*Palettes」というアイドルバンドのドラム担当。元はスタジオミュージシャンだったがある出来事をきっかけにメンバーに。機材に目がなく、機材の話になつたら落ち着くまで話が続く。狭いところと動物が好き。俺曰く「歩く機材図鑑」。】

??「ここにちは、まん丸お山に彩りを♪丸山彩で一つす、えへっ♪」

藍沢「・・・」

彩「あ、あれ? もしかして・・・引いてる?」

藍沢「(コクリ)」

彩「ううー・・・わかる人はわかってくれるのに・・・」

【「チ自己紹介・丸山彩（まるやまあや）。「Pastel*Palettes」というアイドルバンドのリーダーでボーカル担当。さつきの「彩ポーズ」はジブンで考えた仕草らしい・・・が一部の人には人気がないとかどうとか。たまに大事なところでセリフを噛むある種のドジつ子。俺曰く「絶えない笑顔」。】

彩「そういうえば、紗夜ちゃんの隣にいるのは?」

藍沢「初めてまして、だな。俺は翠川藍沢、商店街に住んでいるただの高校3年生だ。今日は紗夜の付き添いつてことで来た。」

日菜「おねーちゃんの付き添い? もしかしてデート!?」

藍沢「ちげーよ、こらそこのリーダー、反応するな」

紗夜「そんなのではありません。日菜の弁当を届けについてくれただけです。」

日菜「ちえー」

藍沢「『ちえー』じゃない。紗夜が一人で入るのは気が引けるって言つてたからついてきただけだ。」

紗夜「では私は帰ります。」

藍沢「もう帰るのか？もうちよつといてもいいと思うんだが」

紗夜「私にはまだやることが残っていますので。それでは失礼します。」

日菜「じゃあね、おねーちゃん！」

藍沢「じゃあ俺もそろs・・・」

麻弥「藍沢さんももう帰っちゃうんですか？」

藍沢「まあ紗夜からのお願いも終わつたことだしな、別にここにいる意味はもうなさそうだし、今は休憩時間つていつてもそんないつまでもいられるわけじゃないし」

日菜「えー？みどりんももう帰っちゃうのー？もうちよつとお話しようよー！」

藍沢「・・・みどりん？」

日菜「うん、『みどりかわそうが』だからみどりん！いいでしょー？」

藍沢「別に呼びたい名前で呼んでもらつていい。ただ抱き着くのはやめてくれ」

日菜「やだー！みどりんとお話するまで離さないー！」

千聖「勘弁したらどうかしら？日菜ちゃん、一度言い出すとなかなか離してくれないのでよ。」

藍沢「・・・しようがないな、休憩時間が終わるまでだからな？そ

れ以上長居はしない

日菜 「やつたー！」

藍沢 「ただし、今後いきなり抱き着きにこないという条件付きな」

日菜 「はーい・・・・」

藍沢 「で、何を話すんだ？」

麻弥 「そうですねー・・・藍沢さんの夢とかどんな音楽や楽器が好きなのか、でしようか」

彩 「やつぱり定番の夢とか好きな音楽だよね！それで翠川くんの夢とかって何があるんですか？」

藍沢 「夢・・・なあ。昔はプロの音楽家になるつてあつたつけな。まあ今は適当に楽器とかメンテナンスしたりのバイトをしてるから今はこれといって夢とかはないな。」

イヴ 「楽器のメンテナンスですか？どんな楽器を？」

藍沢 「ドラムからギター、キーボードやベース・・・まあ所謂バンドメンバーの楽器のメンテだな。」

麻弥 「おお！それはすごいです！ぜひ翠川くんとはいつか機材について深く語り合いです！」

藍沢 「気が向いたらな」

千聖 「それで、音楽はどんなジャンルが好きなのかしら？」

藍沢 「音楽つていつも多種多様だからな。P.O.P、アニソン、ロック、オリジナルトラックサウンドとかいろんなの聞くから…これといつて好きな音楽はない。」

日菜 「オールジャンルで聞くってこと？」
藍沢 「簡単に言えばそんなものだ。ただ外国の曲とかはあまり聞かないな。」

千聖 「それはどうして？」

藍沢 「別に深い意味はない。」

千聖 「そう？ならあまり聞かないでおこうかしら。人の過去に土足で踏み込むような真似はしたくないもの」

藍沢 「そうしてくれると助かる。」

日菜 「色んな楽器のメンテナンスをしてるつて言つたけどもしかし

てみどりん、昔は曲を作つてたとか!」

藍沢「・・・鋭いな。ああそうだよ。俺は昔曲を作つてたんだ。」

麻弥「昔は、ですか?」

藍沢「まあ今もちよくちよく作つたりしてるけどな。今はR o s e l i aの新しい曲のイメージをそれぞれ歌詞として作つてもらつてるところだ。」

彩「作つてたつて…もしかして翠川くん」

藍沢「そうだ、これまでに何百曲も作つて”音楽界の虹”とか言われた虹原彩音（にじはらあやね）だよ。」

千聖「それがどうして名前まで変えたの?」

藍沢「報道陣がしつこく追つて来てたんでな、報道が及ばない市役所に向かっていろんな理由をつけて名前を変えてもらつた。俺の名前で世界に轟くと周りからいろんな目をして迫られるのが容易に考えられた」

千聖「待つてちようだい、失踪したのつて確か10年くらい前よね?その時はまだ小学生だったはずなのに・・・そこまで頭が回るものなのかしら?」

藍沢「否が応でも俺はその1年前からテレビに出始めて新聞にも大きく取り上げられてたからな。大体のことはわかつてた」

イヴ「すごいです!まさしく武蔵坊弁慶ですね!」

【豆知識：武蔵坊弁慶（むさしほうべんけい）。鎌倉時代、道行く人と闘い武器を奪つていた人物。ある日源義経と闘い、決闘に敗北。それ以来弁慶は義経についていく。最後は源義経を庇い無数の矢を受け、仁王立ちで死亡（あくまで主の知識の範囲です）】

藍沢「武蔵坊弁慶つてな・・・あれは全部の武器を扱つていたわけじゃないからまったく違うぞ」

千聖「そうよイヴちゃん、翠川くんはどちらかというと阿修羅よ」

藍沢「それも違うからな?」

(ピンポンパンポーン)

麻弥「あ、休憩時間が終わる5分前ですね・・・そろそろ次の仕事の準備をしましようか」

藍沢 「じゃあ俺は帰るぞ」

千聖 「引き留めてしまつてごめんなさいね。今度、空いた時間にお茶でもどうかしら?」

藍沢 「気が向いたらな。」

日菜 「まつたねー♪」

『帰り際にバスパレメンバーとLUNAで連絡先を交換した』

【藍沢宅・自室】

藍沢 「・・・今日もある意味大変だつたな、明日は自室でおとなしくしてゐるか・・・久しぶりにログインもしておきたい」

そうつぶやいて俺は軽く夜食を作り、風呂に入つた後早く寝た・・・

Chapter 5 : Neo Fantasy Online line

6月14日

【藍沢宅・自室】

藍沢「さて……と。今日はゆっくりしたいしちよつと息抜きにログインするか」

そう言つて俺はパソコンを起動させ、あるオンラインゲームを起動する。

藍沢「『Neo Fantasy Online』……起動。」

『Neo Fantasy Online』、俺が2年前から始めたオンラインゲームだ。ジャンルは3人称視点のアクションRPG。始めたころはいまいちパツトしなかつたが、やり始めてから1ヶ月経つた後は毎日のようにログインしていた。パーティーを組んで一緒にクエストに行くこともできるし完全ソロで廃人レベルになるくらいにやりこむ人もいる。俺はどっちかって? 基本ソロプレイヤーだがたまにパーティを組んで他の人を手伝つたりして。今日は久しぶりにログインして適当に時間を潰す予定だ。ちなみにログインネームは『Ray』。去年あたりだつたか、超高難易度のイベントクエストが来たことがあつて、当時は誰もクリアすることができなかつたという。それを俺はソロプレイで苦闘の末クリアしたことがあつた。それからだろうか、ゲーム内で人気者になつたのは。そのイベントクエストが終わつてから一部のユーザーからは『レイさん』で名前が通るようになつた。ゲーム内でジョブ・・つまり職業を選ぶことができるが、俺のジョブは下級職の「剣士」からランクアップした「ブレードナイト」。剣しか扱えないが、立ち回りやすく大抵の初心者はこれを選ぶことが多い。下級では片手でしか剣を扱えないが、上級になる

と両手でそれぞれ片手剣を扱う（双剣）ことができるようになり、両手剣を装備できるようにもなる。俺の場合はクエストによつて片手剣や両手剣で対応する。使用率が高いのは双剣。手数が多くダメージソースは全ジョブの中でもトップを誇る。ちなみに魔法は使いないが特技の数は全ジョブの中でも一番多い。さて……簡単な紹介はここまでにしてそろそろロードが終わるな。

（なおこの回ではガルパで判明してNFのログインネームを使います）

【Neo Fantasy Online：はじまりの村 クリエイト】

Ray 「1ヶ月ぶりか……ここにログインしたのつて。最近は忙しかつたから手を出せなかつたけどユーザーも結構増えてるみたいだし、掲示板でも見て情報収集してみるか。」

Ray 「ん？この『RinRin』ってプレイヤーと『聖墮天使あこ姫』が最近は人気なのか。なになに…？『デュオプレイヤーで完璧な連携を取るプレイヤーたち』へえ……結構人気みたいだな。そういえばフレンドになつてたか……今どこにいるか」

Ray フレンドリストチェック中……

Ray 「現在ログイン中か。今は……ここにいる？ひよつとしてあのウイザードとプリーストの二人組か？おーいそこの二人組。」

あこ姫 「はい、何でしようか……あれ？もしかしてレイさん!?ね

えRinRin!レイさんだよ!あの伝説の!」

みんな仲間だから・・・」

Ray 「あれ、というかその名前って……あこと燐子か？」

か知らないのに…」

Ray - ヒントをやるか 1 - 備たせは外の世界で会うてる

Ray「2つ、リアルで知り合ったのは1

あこ姫 「リアルで知り合ったのは1か月前…？」

「これが最後で力ビント 僕はお前たちのサホー外一

Ray 「正解」

あこ姫「えー!? 藍にいが噂の『Ray』さん!?

伝説のプレイヤリさん……本当にいたんですね……

Ray 「あの時はたまたま運がよかつただけだ。」

あこ姫「みんなクリアした時はそう言いますけど、あこはそうは思

Rin Rin 「そういえば Ralyさんはどうして、」に・

月ぶりのログイン・・・ですよね：」

Ray「今田は息抜きにログインしてユーリサー層かどうなってるか
気になつたんだよ。そういうお前たちもこんなことしてていいのか
? 何か忘れてないか?」

んの方は · · · ?』

「…………本当に大丈夫か。来週は哥謡を教へ始めてから、
ケ用にもなるんだぞ? 急ぎ足で考案なハビこれほど羨美はなしだ

と思つていいな。」

あこ姫 「頑張ります、頑張ります！あれ？でも前は『褒美云々は

言つてなかつたような・・・りんりんは何か聞いてない？」

RinRin「私も・・・初耳・・・何があるんですか・・・？」

Ray「んー、俺の手料理を振る舞つてパーティーでもしようつて考へてるんだがこの調子だとダメ・・・」

あこ姫「よーし！頑張るぞー！りんりん、あと1回クエスト終わつたらあこはログアウトするね！」

RinRin「あこちゃん・・・頑張つて・・・」

Ray「そういうえば、どのクエストに行くか決めたのか？」

あこ姫「あこたち、このクエストがなかなかクリアできなくて・・・難しいから最近は装備を整えてたんだー」

RinRin「あのボス・・・強いから私たちだけじゃまだ・・・」

Ray「もしかしてこれが？『極ベ〇一モス掃討作戦』

あこ姫「それです！あこたち、最終フェイズまではいけるんですけど、あの『エクリプスマテオ』がどうしても避けれなくて・・・」

Ray「あー、なるほどな。あれ、一人でもクリアできたぞ。一応NFOはオフライン・・・つまりソロでもやれるからソロで狩つたりしてた。だからオンラインに潜るのは1ヶ月ぶりつてことだ」

RinRin「あのクエストを一人で・・・？すごいです・・・」
Ray「ならそのクエスト、3人で行つてみるか？2人より3人だ。」

あこ姫「本当ですか!?やつたー！」

RinRin「よかつたねあこちゃん・・・」

Ray「じやあ受注してくるから参加待機してくれ」
あこ姫「はーい！」

Ray「よし、受注も終わつたしやるか。ちなみにこのクエストで頑張つたらご褒美を上げるから頑張れよ。まあクリアしないとあげ

ないけどな

あこ姫「本当ですか!」

Ray「これくらいの対価は払つておかないとやる気でないだろ
?」

RinRin「あこちゃん・・・頑張ろうね・・・」

【クエストの道中】

Ray「しかし、極ベヒは何日かサボつてたが大丈夫か?パターン
は覚えてるんだが」

あこ姫「あこたちなら大丈夫です!頑張りましょう!」

RinRin「うん・・・頑張ろう・・・」

【目標モンスター発見】

Ray「1週間ぶりだな、こいつを狩るの。二人とも、サポートを
頼んだ」

あこ姫「はい!」

RinRin「はい・・・頑張ります・・・」

ちなみに俺の装備は双剣だ。剣は片手には獣特攻の「Eternality hunt」、もう片方は龍特攻の「Eclipse Dragon」。両方とも特攻武器の中では最高クラスの武器で、イベント限定クエストの報酬で作成可能な超激レアな武器だ。極ベヒは「神獣龍種」に分類されており、特攻武器は「獣特攻」と「龍特攻」の二つのみだがこの2種の特攻武器はそう多くなく、手に入る素材も最高級クラスのものばかりだからこれを入手するには相当運がよくないと作れない。

Ray「よつと・・・そこだ!『閃光剣・ライトニングスライサー』

!

ズバズバツ！

あこ姫「エターナル○オースブリザード！相手は死ぬ！」

Rin Rin 「シャドウアタック・・・分身で体力を・・・削りま

す
・
・
・
】

『ベヒーモスのエクリプスマテオ』

Ray「これがアイツの最後の攻撃だ、安全地帯は作つておいたから2人はそこに隠れててくれ！」

あこ姫「藍にいは!」

Ray 「この位置からじやそこまで間に合わない

RiinRiin「あこやん……翠川さんなう太

あこ姫「やだ！藍にいも一緒に逃げよう！」

Ray 「だから大丈夫だ、俺を信じろ」

ドオオオオオオオオオオオ

あこ姫「藍にい———！」

Rin Rin 「クエストクリア・・・だけど・・・マップに翠川さ

んのアバタリの反応は

(ガラツ)

R a y 「ふう…間に合わないかもしけなかつたけどギリギリだつたな・・・」

あこ姫 「藍にい・? 無事・・・なんだよね・?」

R a y 「ああ、大丈夫だ。このモーション中は俺への当たり判定を3秒程度だけど失くしてくれるからな。」

R i n R i n 「私たちは持つてないので・・・いいな・・・それ、欲しいな・・・」

R a y 「武器を構えるとこのモーションは使えないからな・・・結構タイミングもシビアなんだよな。何はともあれやられなくてよかつたな。」

R i n R i n 「無事でよかつた・・・です・・・」

R a y 「報酬は・・・つと。お、『神獣龍の皇玉』が落ちたな。これ、体感0・1%だから滅多に落ちないんだよ。他の二人は?」

あこ姫 「あこの方も落ちました!でももう一つ気になつた報酬があるんですけど・・・」

R i n R i n 「私の方も気になる報酬が・・・」

R a y 「どの報酬だ?」

あこ 「えっと・・・この『神獣龍の帝玉』っていうんだけど・・・」

R a y 「あれ、それって確か・・・レア度1-1の超絶激レアの報酬じやないか?超高難易度のクエストをクリアした時に手に入るやつだ。これ一つでレア度1-1の装備が一式貰えるんだよ。たしか確率的には:0.01%だったな。俺は今回手に入らなかつたけど、あと10個も余つてるんだよな・・・もう一通り一式は揃えたからあとはアップデート待ちだ」

あこ姫 「いいなー!あこたちも頑張つてこれ集めようねりんりん!

!」

R i n R i n 「うん・・・頑張ろうあこちゃん・・・」

R a y 「で、頑張つたご褒美だけど何がいい?無理じやない範囲で頼む」

あこ姫「りんりんはどうするー？」

R i n R i n 「私はいい……かな……あこちゃんは私より頑張つてたし、私はできる限りの事しかやつてないから……」

R a y 「いいのか？」

R i n R i n 「大丈夫です……私は楽しかったので……」

あこ姫「じゃああこだけだけど……いいの？」

R i n R i n 「うん、大丈夫だよあこちゃん。」

R a y 「そこまで言うなら仕方ないな、強制はしないし自由だからな。で、あこは何がいい？」

あこ姫「うーん……そうだ！ 今度のおやすみにあことお出かけしよう！」

R a y 「そんなことでいいのか？ 別に他のお願いでも……」

あこ姫「あこはこれでいいんです！」

R a y 「そつか、なら時間が空いた時にでもお出かけするか。」

あこ姫「やつたー！」

R a y 「た だ し。まずは目の前の課題を終わらせてからな？ ま ずは自分のイメージに合う歌詞を作ることが先決だ」

あこ姫「はーい・・・」

R i n R i n 「あこちゃん……頑張つて・・・」

R a y 「何はともあれお疲れさん。俺はこれでログアウトするけど二人はどうする？」

あこ姫「あこもログアウトしようかなー。早く終わらせたいし」

R i n R i n 「私も……そろそろログアウトします……もうちょっとで何か掴めそうなので……」

R a y 「了解、じゃあまた今度な。」

【藍沢宅・自室】

藍沢「んー……少ししかやつてないはずなのにちょっと疲れたな、本

腰入れすぎたか？今日はもう休むか

Chapter 6 : Stars that control
inuetoshine

【藍沢宅】

6月15日

藍沢 「んー…また昼に起きてしまったな。学校もないし暇だな…:(
（デデドン） ん?リサから連絡?」

リサ『これから時間あるー?ちょっと友達のところに行くんだけど、キミの事話したらぜひ会いたいって言われちゃってさー…あ、無理なら大丈夫だよ。アタシ一人で行くか』

藍沢『別に今起きたばっかりだし暇を持って余してたから付き合うぞ。で、どこかに待ち合わせしておくか?』

リサ『今11:30だし…12:30に花咲川学園の校門前集合でいい?』

藍沢『12:30に花咲川学園の校門前集合だな、了解。』

【花咲川学園校門前】

藍沢「やばいな、途中信号に捕まつて結構ギリギリになつてしまつた…・・・リサを待たせたか?」

リサ「あ、来た来た♪藍沢くんおつそーい!」

藍沢「悪い悪い、結構時間に余裕を持って來たつもりだったんだが運悪く信号機に捕まつてな。」

リサ「正直でよろしい…・・・なーんてね☆アタシもちよつとお弁当作つたら遅れちやつて。」

藍沢「弁当？にしては量が多いような・・・これ、8人分くらいあるぞ？これから友達のところに行くにしては・・・」

リサ「あー、ごめんね？ちょっとこれから行くところだけど、バンド練習中らしいからその差し入れ。」

藍沢「ふーん……なるほどな。」

リサ「それじゃあいこつか。ここからはそんなに距離ないからすぐ着くよ♪」

藍沢「そんな近いのか？もしかしてあそこに見える蔵のところとかか？」

リサ「あれ、ここから蔵見えちゃうの？藍沢くんって目がいいんだね？アタシは見えはするんだけど少しだけ目が悪くって・・・」

藍沢「昔時間を忘れて楽器を弄つてた時に夜明けまで弄つてたときとかあつたりしたからだろうな。あの時は本当に楽しかったぞ。その時に自然となれたからか目が悪くならなかつたな・・・昔から今まで全く目が悪くならなかつた」

リサ「いいなー・・・アタシはあんまり遅くまで目を使つてると目が悪くなっちゃうから・・・なんか負けた気分・・・というわけで藍沢くん、今日一日アタシと手を繋ぐこと♪」

藍沢「・・・どうしてそうなるのかわからぬがそれくらいなら別に構わないぞ。どうせそこまでだろうし、女の子に重い荷物を持たせるのは悪いし」

リサ「オッケー、商談成立♪それじゃあいこつか。」

少年少女移動中・・・

リサ 「ちよつとここで待つてて、呼んでくるから」

藍沢 「了解つと、弁当は持つておくからできるだけ早めにな。」

リサ 「女の子を急かすと嫌われるぞー？ それじゃ、行つてくるね」

藍沢 「ここが流星堂か・・・思ったより広くて驚いたな。庭に盆栽が置いてあるし・・・ざつと20くらい置いてあるか？ それにしても随分と手入れが行き届いてるような・・・俺がメンテナンスしてきた楽器より手入れされてるみたいだし」

リサ 「もしもーし、藍沢くん？」

藍沢 「あ、ああ悪い。ちよつと待ち時間を使って少し散策してた・・・で、隣にいるのは誰だ？」

?? 「初めまして・・・だな、私は市ヶ谷有咲、この流星堂に住んでるんだ。で、あんたは誰だ？」

藍沢 「これは『丁寧にどうも。俺は翠川藍沢、呼びたいように呼んでくれて構わない。俺も有咲と呼ばせてもらう。あと俺は高校3年だがフレンドリーに話してくれて構わないぞ』

有咲 「じゃあ藍沢さんで。よろしく」

【チ自己紹介・市ヶ谷有咲（いちがやありさ）。花咲川学園の2年生で「Poppi n, Party」のキーボード担当。普段はおとなしさうな雰囲気だが、実は猫を被つており怒ると怖い。ポピパのメンバーの中で一番の苦労人。俺曰く「ツンデレ系幼馴染」。】

藍沢 「で、リサ。これからどこに行くんだ？」

リサ 「どこって、この蔵の中だけど？」

藍沢 「蔵の中つて・・・いろんなものが置かれてるようにしか見えないんだが？」

有咲 「ここにはちよつとした隠し部屋みたいなのがあるんだよ。床のところにある取っ手を上に上げると・・・」

（ゴゴゴゴゴゴゴ・・・・）

藍沢 「なるほどな・・・そういう仕組みか。面白い仕掛けじゃない

か。」

有咲「暇なときはこの中で練習してるんだよ。他のメンバーが忙しい時はここで寝てるし」

藍沢「しかし蔵の中つていつても五月蠅くないのか？」

有咲「ここ、実は防音なんだよ。外からの音が中に聞こえないのはもちろん中からの音も外には聞こえないんだよ。」

藍沢「へえ・・・」

有咲「感心しないで入るぞー。」

〔流星堂：蔵〕

藍沢「蔵つていうくらいだから物が結構置かれてると思つてけど案外あまり置かれてないんだな」

有咲「入つて第一声がそれかよ！」

？？「有咲、おかえりー。お風呂にする？ご飯にする？それとも…練習？」

有咲「おたえも帰つてきていきなり練習はねーだろー！さつきまで練習してただろーが！」

たえ「あれ？ そだつけ？」

〔チ自己紹介・花園（はなぞの）たえ。花咲川学園の2年生で「P〇p pi n, Party」のギター担当。誰がどう見ても天然でつかみどころがない性格。ウサギが大好きで家に20羽も飼つてるとか。俺曰く「第2のモカ」。〕

？？「おたえちゃん、リサさんたちが来たらご飯にしようつておたえちゃんが一番に言つてたよね…？」

たえ「あれ、そだつたつけ？ よく覚えてるねりみりん。」

りみ「だつて、10分前に言つてたから…」

〔チ自己紹介・牛込（うしごめ）りみ。花咲川学園の2年生で「P〇p pi n, Party」のベース担当。引っ込み思案で知らない人に

声をかけるのが苦手。Afterglowの蘭とは友達。チョココロネが大好きで食べるときはウサギのような食べ方になる……らしい（たえ談）俺曰く「チョココロネの妖精」。

??「リサさん、忙しい中ありがとうございます。これ、お返しのメ

ロンパンです」

リサ「あはは、大丈夫だつて☆沙綾もお返しありがとね。いつかやまぶきベーカリーで働いてみたいなー……なんてね」

沙綾「リサさんだつたら大歓迎ですよ。臨時のバイトはいつでも募集してますから時間が空いた時はぜひお越しください」

【**チ自己紹介・山吹沙綾**（やまぶきさあや）。花咲川学園の2年生で「Poppin' Party」のドラム担当。商店街にある「やまぶきベーカリー」の看板娘で時間がある時は病弱の母に代わつて働いている。俺も昼ご飯を買いに世話になる事が多い。弟と妹がいて、買いに来た時によく遊んでいる。俺曰く「家族思いの頑張り屋」。】

??「有咲——寂しかったよ——！」

有咲「うるせー香澄！10分くらいしか離れてねーだろーがーー！大体いつもお前は私に抱き着きにかかりすぎだ！」

香澄「だつてー、有咲成分が足りないんだもんー……」

有咲「有咲成分つて何だよ！私にはそんな成分はねーー！」

【**チ自己紹介・戸山香澄**（とやまかすみ）。花咲川学園の2年生で「Poppin' Party」のギター担当でリーダー。キラキラとドキドキが大好きなごく普通の高校生……なのだがたまに周りが見えなくなるという少し残念なところがある。めんどくさいことは嫌いでいつも有咲に押し付けている。俺曰く「煌めく流れ星」。】

藍沢「（リサ、こいつらつていつもこんな調子なのか？）

リサ「（うーん……いつもよりはおとなしいほうかも？でもキミが着

てるからこれから騒がしくなるんじゃないかな……）

藍沢「（それってどういう……）

リミ「それより、リサさんとお話してる人は……誰なんですか？」

有咲「ほら藍沢さん、みんな藍沢さんのこと気にしてるから早く自己紹介お願いします。」

藍沢「それもそうだな、俺の名前は翠川藍沢。私立季瀧（きりゆう）学園つてどこに通つてる、高校3年生だ。もう単位は取れてるし推薦もいくつかもらつてるから今は学校に通つてないけどな。」

有咲「季瀧学園つていつたら……」

沙綾「うん、東京で1、2を争う超有名校……だよね」

香澄「そんなところに通つてるんですか!?」

藍沢「俺は勉強も部活もそつなくこなしてたし、推薦ももらつてたから通うようになつただけだ。大したことはしてない」

有咲「いやそれでもスゲーから……私も勉強はできる方だつたけどあまり有名なところに行つてもインドア派の私にとつては退屈だろーしな……」

たえ「そんなにすごいの？その……交流学園？」

有咲「季瀧学園な。あそこは海外からも注目を浴びるほどに有名なんだよ。でも学園のテストの平均点は90点越えがほとんどで未来は学者なり薬剤師なりたくさんの方があるつてわけだ。で、藍沢さんはそこに通つてるつてわけ。」

りみ「そんなにすごいんだ……」

藍沢「有名、つていつても授業内容はそんなに厳しくないし先生たちもスバルタなんてしない。外から見たら厳しい学校とか思われるかもしれないけど学校自体は結構自由だぞ。」

りみ「そうなんですか？有名校だから授業の内容も結構厳しいって思つてたんですけど……」

藍沢「それがそうでもないんだよな。有名校つてみたから結構厳しいつて思つてたんだけど実際は緩かつたし」

リサ「アタシも実は受けたんだけど、結構合格ラインが高くて……あと平均点数が5点足りてたら受かつてたんだー……」

藍沢「そういうやういう噂が流れてたな。一回しか聞かなかつたけど、ギリギリ入れなかつた生徒が一人だけいたつて……」

リサ「うん、それアタシ。あれだけ頑張つたんだけどなあ……」

藍沢「あそこは結構ラインが厳しいしな……俺は推薦で入つたけど実際はものすごい量を勉強したけどな……」

リサ 「ちょっと話しつぶすぎたかなー……そろそろお弁当たべよつ
か。」

香澄 「やつたー！私もうお腹ペコペコー！」

りみ 「私もお腹すいたなあ……リサさん、ありがとうございます……」

リサ 「いいつていいつて！ほら藍沢くんも食べてつちやつてよ。」

藍沢 「いいのか？俺はただの付き添いなだけなんだが」

リサ 「藍沢くんが来るつて言つたからちよつと多めに作りすぎ
ちやつたつていうか……あはは」

藍沢 「料理はできるのにどれくらいが人数分なのか管理できてなく
ないか？」

リサ 「あはは……そこは何も言い返せないから悔しいなあ」

有咲 「そんなことより、早く食べようぜ。私も突っ込みすぎてお腹
が空いてな……」

少年少女食事中……

藍沢 「ふー……食つた食つた。ごちそうさま」

リサ 「本当に他の人が食べれなかつた分を食べきるなんて……藍沢く
んの胃袋つてどうなつてるの？」

藍沢 「別に、普通だよ。俺は昔から結構食べてたし今は一人暮らし
で食事も毎日作つてるから今でもよく食べるだけだ」

有咲 「モカちゃんと藍沢さん、どつちが大食いなんだろーな……」

香澄 「それなら今度大食い勝負を開催しようよ！」

有咲 「それ、他の参加者の胃袋も壊れるから却下だ!!」

りみ 「お腹も膨れたことだし……もう少し練習しないかな？もう
少しで音が合いそうだから……」

リサ 「あれ、もう練習始めちやうの？もうちよつと落ち着いてから
でもいいんじゃない？」

藍沢 「バンドのメンバーが自分たちの判断で決めてるんだ、俺たち

がとやかく言うことじゃないだろ」

リサ「それもそつかー。じゃあアタシは見学するけど藍沢くんはどうする？」

藍沢「俺もちよつと見学していくかな。」

香澄「それじゃあ行くよー！ 1、2、3！」

少女達演奏中・・・

リサ「久しぶりに聞いたけどいい音楽してるねー☆アタシたちも負けてられないなー」

藍沢「俺も久しぶりにR o s e l i a以外の演奏も聞けたし新しい歌詞のイメージがつかめそうだな」

リサ「だねー♪それじゃアタシたちはそろそろお暇するよ」

有咲「あれ、もう帰っちゃうんですか？ もう少しいてもいいんですけど」

藍沢「ほら、もう3時だ。今から帰りはじめないと夜ご飯の買い物もしてたら夕方になるだろうし」

リサ「アタシも夜ご飯の準備しなくちゃ…だからごめんね有咲」
有咲「いや、リサさんが謝ることじゃないですか。こんな時間まで演奏してた私たちも私たちなので」

藍沢「じゃありサを家まで送つてから俺は買い物に行くか。」

リサ「それならアタシも買い物に付き合うよ。来るときも弁当持つてもらっちゃつたし」

藍沢「んー…まあいいか。でも買い物が終わつてからリサの家まで送つていくからな。夜道を女の子一人で返すわけにはいかないからな」

リサ「じゃ、いこつか。エスコートよろしく♪」

藍沢「はいはい。んじやポピパのメンバーのみんなはまたな。」
ポピパメンバー「「「「さ」ようなら（！）」「」」

藍沢「ずいぶん買い込んだな・・・つてもこれだけあれば2週間は持つから大丈夫か」

リサ「本当に買い込んでるねー・・・それ全部2週間で全部使い切るの?」

藍沢「いや、さすがに全部は使い込まないぞ? そうしたら俺の食費とかが浮く」

リサ「それもそつかー。あ、ここがアタシの家だから。ありがと♪」

藍沢「ああ、じゃあなリサ。」

リサ「あ、そうだ。お礼忘れてたよ」

藍沢「お礼? 別にお礼なん♪」

そう俺が言い終わる前に頬に暖かい感触がした

藍沢「っ!?」

リサ「あはは、アタシたちは藍沢くんにいつもお世話になってるから、これはそのお礼☆じやあまたね♪」

【藍沢宅】

藍沢「(一体何だつたんだ、あの時のリサの行動・・・それに俺の鼓

動も少しばかり早くなつてる・・・なんなんだ?・・・なんかどつと
疲れた氣がするな・・・今日はもう寝るか)「

Chapter 7 : Stray and Prom
ise

6月21日

【午前10時・・・今井家・リビング】

今、俺はリサの家にいる。何でいるのかっていうと、みんながそれぞれ考えていた歌詞ができたという報告を受けたからリサの家に集合することになった。え? なんで俺の家じゃないのかって? ...俺の家にはルビーとマリンがいるんだ。そんな中に友希那を入れてみろ。感想とかの話じゃなくなるだろ? ...で、その話し合いだけど藍沢「みんなよくできるけど...なんか評価しがたい内容だな...みんなの個性がよく出てるけど」

友希那「どこか悪いところでもあるのかしら?」

藍沢「いや、悪いところはないんだが...」

紗夜「歌詞が長すぎる、というわけでもなさそうですし...」

リサ「うーん...藍沢くん、どこがいけないの?」

藍沢「いや、よく出来すぎてるのはいいことなんだが」

燐子「どこが...翠川くんの悩みなんですか...?」

藍沢「これを歌うとなるとリズムを取るのが難しいんだ...でも誰かのを外すのはあまりしたくないし...」

あこ「うーん...あこたちはみんなで一つの歌詞を書くことが多いからみんなの歌詞に甲乙つけるのはできないし...」

藍沢「みんなで一つの歌詞...? そうだ、この手があつた」

あこ「何かいいアイデアがあるんですか?」

藍沢「みんなの歌詞を一つの歌詞にまとめるんだよ。で、それぞれ考えた歌詞のところはそれぞれが別々に歌う。これでどうだ?」

友希那「それは、私が作った歌詞のところは私が、紗夜が作つたと

ころは紗夜が、あこの作ったところはあこが……という事かしら？」

藍沢「そういうことだ。曲は完全にオリジナルだからみんなで音楽は作らないといけないし、みんなが満足いくまで音楽は考えればいい。」

リサ「なるほど……ところで藍沢くん、どういう感じに作ればいいの？アタシたちは歌詞を合わせることは初めてだし……」

藍沢「したことはなかつたのか……ならちよつと考え方だな……とりあえず、みんなの書いてきた歌詞を見せてくれ。それを参考に歌詞を組み立てる。」

友希那「肝心な時に頼ることになつてしまつてごめんなさい。」

藍沢「構わない、俺も何度も通つた道だしこれくらいなら大丈夫だ」

燐子「ありがとうございます……」

藍沢「ちよつと歌詞を見比べるから時間をくれ。友希那たちはゆつくりしてて大丈夫だ」

リサ「え、いいの？」

藍沢「いいんだよ、できたら一回見せるからみんなでどんな感じか感想とか意見とかを言つてくれて構わない。」

あこ「はーい！」

少年作詞中……

【3時間後】

藍沢「ふう……結構難しいな……いつもは一人で書いてたからこれはちょっと……」

リサ「随分と唸つてると、大丈夫？もう3時間も歌詞を睨んでるし、少しだけ休憩しない？もうお昼に近いんだしさ」

藍沢「そんなに時間経つてたのか？昔は歌詞にそんな時間をかけな

かつたけど今回は5人分の歌詞を一つにまとめるっていう大仕事だ
しな……なら少し休憩するか。」

あこ「お疲れ様藍にい！歌詞の調子はどうですか？」

藍沢「まだ迷走中だ、完成には結構な時間かかりそうだな……」

紗夜「翠川さんでもそこまでかかるものなんですね……かといつて今の私たちには何もすることがないので……」

藍沢「気楽に待つておいてくれ、今日には完成できなくても完成したらみんなに見せるから」

燐子「あまり難しい顔を……しないでください……私たちは急いでるわけじゃない……ので……」

友希那「ええ、私たちはいくらでも待つわ。焦れば焦るだけ完成は遠のくのよ。」

藍沢「そう言つてもらえるのはありがたいけど多分俺が作る最後の歌詞になるかも知れないんだ……だから俺は早く仕上げたい。」

あこ「え？ それってどういう……？」

藍沢「……隠しておいて悪かつた。俺は季瀧学園を卒業したら海外の大学に行くかもしれないんだ。もう推薦ももらってるけど、就職するのも手だし今は今後の人生に悩んでる……つてところだけど」

友希那「……どうしてそんな大事なことを隠していたの。」

藍沢「別に好きで隠していたわけじやなかつたんだが……その通りが来たのは1ヶ月前だつたんだ。」

紗夜「そうだとしても……私たちに相談してください。私たちは同じバンドの仲間です。」

あこ「そうですよー！ あこたちをもつと頼つてください！」

燐子「私たちも……翠川くんに助けられてばかりなので……次は私たちが助ける番……です……」

リサ「そうだよ☆アタシたちは仲間なんだからもつと頼つていいんだからね？」

藍沢「本当に迷つたときは頼りにする、だからお前たちも迷つたら俺を頼れ。・・・仲間としてな」

あこ「うん！もつとあこたちを頼つてよ！」

藍沢「昼ご飯も食べたことだし、俺はまた作業に移る。お前たちは・・・どうする？」

リサ「ここはアタシの家だしアタシは家にいるけど・・・友希那たちはどうする？」

友希那「別に何もすることがないから私はここで待つわ」

あこ「あこも待ちまーす！」

紗夜「私は少しテスト勉強をしています」

燐子「私も・・・少しだけ・・・」

藍沢「わかつた、あまりお前たちに構えないからわからないところはお前たちで何とかしてくれ」

あこ「はーい！」

藍沢作詞再開・・・

【さらに4時間後】

藍沢「・・・終わらないな、まだ半分も行つてない・・・」

リサ「ねえ、そろそろ夕方になるしここでいつたん解散しない？」

友希那「そうね、私はそろそろ門限が近いから帰るわ。」

紗夜「私も日菜に夕ご飯を食べさせないといけないから帰ります」

燐子「私も・・・今日は帰ります・・・」

リサ「あこはどうするー？」

あこ「あこも帰ります、NFOで作りたい装備があるので！」

藍沢「みんなが帰るなら俺も帰るか。ただ誰か一人は送つていった

方がいいから……あこを送るか。この中で最年少だし一人じや何が起くるかわからないからな」

あこ「じゃあ頼んじやつていい藍にい？」

リサ「藍沢くん、あのこと何だと思ってるんだ。俺はごく普通の学生だ、

襲つたりしたら一発で刑務所行きになるからそんなことはしない」

リサ「あはは、ごめんね。あのことお願い。あこはあれでも寂しがり屋だからさー…同じバンドメンバーとして気になつちやうから」

藍沢「わかつた、任せてくれ」

あこ「それじゃアリサ姉、またねー！」

【リサの家からの帰路】

あこ「あ、そういうえば藍にい、7月の下旬つて空いてる?」

藍沢「別に大丈夫だけど……何かあるのか?」

あこ「商店街でお祭りやるんだって!」

藍沢「それ、初耳なんだが。」

あこ「あこもさつき連絡来たんだもん……」

藍沢「そうなのか。で、お祭りと俺に何の関係がある?」

あこ「ほら、この前一緒にN.F.Oやつたじやないですか?その時のご褒美をあことお祭りと一緒に回るのに使いたいなあ……つて……ダメ、ですか?」

藍沢「……なるほどな。別に夏祭りくらいなら一緒に回つても大丈夫だぞ。ただ、歌詞が完成してなかつたら……」

あこ「えー?それでも一緒に回ろうよー!そうじやなきやあこが藍にいを誘つた意味ないじやん!」

藍沢「……そもそもそうだな、歌詞が完成してなくても気分転換になるし一緒に行くか。ただ他のメンバーはどうする?」

あこ「友希那さんたちには祭りのことは伝えるけど、それとこれは話が別だよー！あこは藍にいと一緒に回りたいもん！」

藍沢「・・・そんなに俺と一緒に回りたいのか。あこは変わったやつだな・・・いいぞ、お祭りの時は一緒に回るか。」

あこ「本当?!やったー！」

藍沢「一言はない。ただあまりはしゃぎすぎるなよ？途中で逸れて一緒に回れなくなつたら困る」

あこ「ううー…お祭りではしやぐなつて言われる方が無理だし…」

藍沢「節度をもつてはしゃげつてことだ。」

あこ「あこに節度をもつてはしゃぐことつてできるのかな…？」

藍沢「誰にでもできるだろ、あこが普段からはしゃいでるだけで」

あこ「藍にいの意地悪ー！」

藍沢「俺は意地悪だからな（キリツ）まあ、当日を楽しみにしてるか。それまでに歌詞が完成できればいいんだけど…」

あこ「藍にいのペースでゆつくりやつてもいいんだよ？『急がば回れ』っていうし、あまり詰めすぎてお祭りに一緒に行けなかつたら、あこは一人で回ることになるし…」

藍沢「ま、俺は体調を第一に自分のペースで歌詞を仕上げるつもりだから気長に待つてくれていい。」

あこ「えへへー…今からでも楽しみだなあ…藍にいと一緒に戻るお祭り！」

藍沢「そんなに早く楽しみにしてたら当日はしゃげるときにはしゃげなくなるぞ？」

あこ「わかってるよー！藍にいつて実は心配性？」

藍沢「あこだから心配なんだよ。俺のことを初対面の初日に心配してくれてたし、俺の一番樂しんでいたことを思い出させてくれた。それに俺と一緒にショッピングモールを回つて曲のイメージを思い出させてくれたのもあこだ。ここまでしてくれたあこのことを心配するるのは当然のことだろ？」

あこ「それはそうだけど…」

藍沢「これ以上の詮索は禁止な。そろそろ家に着くぞ」

宇田川家前

藍汎
——ほら、着いたぞあこ。」

卷之二

藍汎 「はあ…今までそうしてるんだ？」

あれからあこは俺の腕にしがみつき、振り払おうとしても力を入れて全く離さなかつた。俺のことが心配だつたのか、今日は俺と一緒にいたいという思いだつたのか・・・俺には全く分からなかつた。

（ピンポーン）
「はーい・・・ つて藍沢さん？ どうしたんですかこんなところまで」

藍沢「巴か。両親はどうしたんだ？」

「今日は残業で一日帰れないって連絡があつてですね……それで
あこ? 藍沢さんの腕に抱き着いて……あこに何があつたんですか?」
藍沢「俺にもよくわからん。気が付いたらあこが俺の腕にしがみつ
いてきて離そうとしても離してくれないんだ。ほらあこ、着いたから
そろそろ離してくれ。俺も家に帰らなきやいけないからな」

あこ「・・・」

藍沢 はあ……どうするか……

「俺が?」の家に?――

「だつてそうでもしないと離さないって感じですし・・・」

藍沢「はあ、そうなるのか・・・あこ。ちよつとだけ離れて家の中に入つてくれ。ちよつと家から着替え持つてくる。」

藍沢「俺から見てもあこはそんな感じに見えるからな・・・なんかあこのお願いに耐性がなくなってきたんだよ」

巴「……なんかすみません」

藍沢「別に俺は一人暮らしだし一日くらい家を空けてても問題ない
しな。ほらあこ、一回家に戻つて着替え持つてくるから離れてくれ」

あこ「……（そつと離れる）」

藍沢「やつと離れたな、すぐ戻るから家で待つてくれ」

あこ「……」

【藍沢宅】

藍沢「着替えとタオルと明日の昼食までの食料と歯磨きセット
と……これだけ持つて行けば十分か。さて、あこも寂しがつてゐだ
ろうしそろそろ行くか」

【宇田川家：玄関】

藍沢「よう、來たぞ。で、あこの調子は？」

巴「それが……ちょっと部屋まで来てください」

藍沢「ん？どうかしたのか？」

【あこの自室】

巴「あこ、入るぞ」

しかしあこの返事はなかつた……

（ギイー……）

藍沢「あこ？どうかしたのか？」

巴「それが、あの後熱出してしまつて……ベッドに寝つきりなん

です。」

藍沢「……そうだつたのか、あこが途中から喋らなかつた違和感は……」

巴「藍沢さんの責任じやないですよ。アタシも気がつかなつたので……」

藍沢「巴、あこの看病は俺に任せて巴は休んでていいぞ」

巴「そんな、悪いですよ！」

藍沢「ちよつとあことさつき約束してな。今度の商店街のお祭り、あこと一緒に回ることになつたんだ。だからあこを看病して万全の状態で一緒に回りたいんだ」

巴「あこがそんなことを……じゃあ任せちゃつてもいいですか？」

藍沢「ああ、食材とかが足りなくなつたら言つてくれ。買いに行く」

巴「何から何まですみません……それじやああこのこと、お願ひします」

藍沢「ああ、任せろ。とりあえず冷えたタオルを用意してもらえるか？」

巴「わかりました。」

藍沢「(さて……これから忙しくなるかもしねいな。俺も風邪をうつされないように気を付けないと)」

6月22日

【午前10時：宇田川家リビング】

藍沢「なんか悪いな巴。あこの容態がよくなるまで泊めてもらうなんて」

巴「別に一人くらい増える分には問題ないですから。むしろ最近は藍沢さんの話ばかりしてたので藍沢さんくらいしか頼れる人がいないので・・・」

藍沢「何か変なこと喋つたりしてないよな？」

巴「やつと歌詞が出来上がったとか、NFOで手伝つてもらつたとかいろいろなことを話してましたよ」

藍沢「そつか、ならいいんだが・・・変な噂が広まると困るし・・・」

巴「さて、と・・・ちょっと出てくるのであこのことお願ひします。」

藍沢「どこか行くのか？」

巴「蘭たちとちよつと近くの楽器店に集合つて言われてたんです、アタシつて待ち合わせ時間前に行つておかないとひまりたちが困っちゃいますから・・・」

藍沢「いつてらつしやい、あこは俺が面倒みるからこつちは心配しなくていい」

巴「わざわざすみません、それじゃあ行つてきます」

藍沢「さて、と・・・こつちもこつちでやることはいっぱいだな、お

粥を作つたり濡れタオルを新しく用意したり…」

【同時刻・宇田川家・・・あこの部屋】

藍沢「あこ、入るぞ」

あこ「藍にい・・・おはよう・・・おねーちゃんは・・・？」

藍沢「巴は蘭たちとお出かけだつてよ。俺はここに残つてあこの看病に専念することにした」

あこ「それ・・・ダメだよ・・・ゴホツ・・・藍にいに風邪移つちやう・・・から・・・」

藍沢「それで俺があこの看病をやめてから夏祭りに一緒に行けなくともいいのか？」

あこ「それは・・・嫌・・・」

藍沢「だから風邪が治るまでじつとしてろ。俺もあこの病気が治るまで泊まり込みするつて巴]にも言つてあるから」

あこ「ありがと・・・」

藍沢「ほら、起き上がるか？」

あこ「うんしょ・・・あれ・・・起きれない・・・」

藍沢「ほら、起こしてやるから頑張つて起きてくれ。お粥作つてあるから」

あこ「体が思つたように動かないから・・・藍にい食べさせて・・・」

藍沢「わかつた。ほら、口を開けてくれ」

あこ「う、うん・・・あーん・・・」

藍沢「ほい、と」

(パクッ)

藍沢「どうだ? 食べれるか?」

あこ「うん・・・おいしい・・・藍にい、味付け・・・うまいね・・・」

藍沢「俺も一応自分で食べれる分には作るからな。たまに食べたくなるから作つてるんだよ。ほら、病人は食べたら寝てろ。風邪がひどくなるから」

あこ「うん…」

藍沢「ほら、濡れタオルだ。頭にあてておくからじつとしてろよ。
くれぐれも起きてリビングまで来ようなんてことはしないようにな
？」

あこ「うん…じつとしてる…」

(ピンポーン)

藍沢「あこ、ちょっとリビングまで出てくるぞ。すぐ戻ってくるか
ら」

あこ「行つてらっしゃい…ゴホツ」

【宇田川家：玄関】

紗夜「翠川さん、来ましたよ」

藍沢「ん？ 紗夜と友希那だけか。他のみんなはどうした？」

友希那「大人數で押し掛けるのは気が引けるから二組に分かれて
別々の日に訪問するようにしたのよ。全員が病気になつたら元も子
もないでしよう？」

藍沢「それもそうか。あこは部屋にいるからあこの着替えを持つて
行くぞ」

紗夜「そいいえばさつき部屋から出てきましたけど、何をなさつて
いたんですか？」

藍沢「別に、お粥と濡れタオルを持って行つてお粥を食べさせただ
けだよ。一人で食べれないからつてな」

友希那「そう。ならいいわ」

藍沢「お前たちは本当に俺のことを何だと思つてるんだ」

紗夜「冗談です、ほら行きますよ」

【宇田川家：あこの部屋】

藍沢「あこ、入るからな。紗夜と友希那がお見舞いに来ててくれたぞ」

あこ「紗夜さんと友希那さん……？どうしてここに……？」

藍沢「俺が連絡したんだよ、みんなあこのことを心配していたからな。」

友希那「私たちは同じバンドのメンバーよ。誰か一人が欠けたら何もできないわ」

紗夜「それに、宇田川さんは私たちにとつてムードメーカーでもあるから宇田川さんがいないと私たちも何を話せばいいのかわからなくなってしまうことがあるから……」

あこ「友希那さん……紗夜さん……ありがとうございます……ゴホツゴホツ」

藍沢「ほら、着替えを持つて来たから着替えるぞ。というわけで友希那と紗夜、着替えは頼んだ。男の俺がやると……な」

紗夜「元よりそのつもりです。着替えが終わつたら少し宇田川さんとお話するので終わつたら呼びます」

藍沢「なら頼む。夜の分のお粥とかの準備とかしてたから終わつたら呼んでくれ」

友希那「わかつたわ。後でこっちの進捗とかを教えるわね。」

藍沢「じゃあちよつとリビングに行つてくる」

『10数分後』

【リビング】

紗夜「翠川さん、終わりました」

藍沢「思つたより早かつたな、もう少し話してくると思つてたんだが」

友希那「あまりしやべりすぎてあこの容態が悪化したら困るから途中で切つてきたわ。風邪が治つたらいくらでも話せるでしよう？」

藍沢「それもそうか。ところであこはどうだつた？」

紗夜「ほんの少しだけですが顔色がよくなつたみたいです。ですが悪化したらいけないので寝かせてきました。夜ご飯までは安静にさせてあげてください。」

藍沢「わかつた。友希那たちはもう帰るのか?」

友希那「ええ、私たちはこれから行くところがあるのよ。後でまたあこの容態を報告してもらえると助かるのだけど」

藍沢「了解、夜にでも送つておく。」

紗夜「それではまた」

藍沢「気を付けて帰れよ」

『午後6時』

【あこの部屋】

藍沢「あこ?俺だ、入るぞ。」

あこ「・・・」

藍沢「あこ・・・?」

(ガチャ)

あこ「・・・」

藍沢「・・・つたく、返事がないから何かあつたのかと思つたけど焦つたじやないか。静かに寝てるならいいか・・・(クイクイツ)・・・ん?」

あこ「藍にい・・・今日は同じ部屋で・・・寝ろ・・・?」

藍沢「あのなあこ・・・あこは病人で俺は健康なんだぞ?もしあこの病気が俺に移つたらな・・・」

あこ「大丈夫:藍にいには移さないから・・・お願ひ・・・」

藍沢「・・・ちょっと待つてろ、巴が帰ってきた。すぐ戻る」

【リビング】

藍沢 「おかえり。どうだつた？」

巴 「こつちは楽しかつたよ。あこの容態は？」

藍沢 「少しだけど顔色はよくなつたみたいだけど……あこが今日は一緒の部屋で寝たいつて聞かなくてな……巴も帰ってきたから一応言つておこうと思つてな」

巴 「あこが？ まつたく……あこはよく甘えてくるんだけどアタシはあこに弱いからな……」

藍沢 「やつぱり兄弟姉妹だとあるあるな悩みだよな。あこは俺にとつて妹みたいなものだから甘えられるとな……」

巴 「あれ、藍沢さんつてご兄弟とかいないんですか？」

藍沢 「巴たちには言つてなかつたか、俺には姉さんがいるんだよ。俺は末っ子だから妹とか弟がいるところが羨ましいんだよ」

巴 「あー……なるほど……何かわかるような気がします」

藍沢 「だろ？ で……今日はあこの部屋に布団を敷いて寝ることにするけどいいか？」

巴 「大丈夫ですよ、ただ移されないように気を付けてください。」

藍沢 「最低限のことはするから大丈夫だ」

巴 「じやあおやすみなさいですね。また明日」

藍沢 「ああ、また明日な。」

6月23日

【午前11時・リビング】

藍沢 「昨日は玉子でお粥作つたし今日はカニカマでお粥を作るか……」

(ポンピーン……)

藍沢 「結構来るの早かつたな、昼くらいに来ると思つてたんだが（ポンピーンポンポンポン）

藍沢「はいはい、今出るから待つてろー」

ちなみに今日も巴は出かけている。今日はハロハビの美咲と花音と一緒にいる。何というか……ある意味異色な組み合わせだよな……

【玄関】

藍沢「よ、燐子とリサ。もう少し遅く来るかと思つてたけど」

リサ「出迎えに来ていきなりそれー？帰っちゃうよ？」

藍沢「悪い悪い。燐子がまた寝坊して遅れるんじやないかつて思つてたんだよ」

燐子「今日は……寝坊してません……」

藍沢「そうか、まあこんなところで立ち話もあればだから早く入つたらどうだ？」

リサ「それじゃあお邪魔しまーす☆」

燐子「お邪魔……します……」

【リビング】

藍沢「ちようどよかつた、お粥を作りすぎたから二人も食べて行つたらどうだ？」

燐子「いいん……ですか……？」

藍沢「あこが昨日のお粥を残しちゃつてな、折角だし力二カマと玉子のお粥を混ぜてみた。ちなみにあこの分は残してるから大丈夫だぞ」

リサ「それじゃあいただきまーす☆」

藍沢「それ食べたらあこのところに行くぞ。」

燐子「わかり……ました……あこちゃん、大丈夫かな……？」

【あこの部屋】

藍沢「あこ、リサと燐子がお見舞いに来てくれたぞ。」

あこ「りんりん・・・?リサ姉・・・?」

リサ「ヤツホーあこ。お見舞いに来たよー☆あれ、もう起きてても大丈夫?」

あこ「うん・・・まだ喉が痛いけど少しはよくなつたかも・・・」
燐子「無理しちゃ・・・ダメだよあこちゃん・・・またみんなで演奏したいから・・・」

あこ「えへへ・ありがとうございますりんりん・・・」

藍沢「ほらリサ、あこの着替え。俺はリビングにいるから出るときは声かけてくれ。ただ話すにしても長話はできるだけ控えてくれ」

リサ「了解♪」

藍沢「それじゃあ俺は出るぞ」

『1時間後・・・』

リサ「ただいまー♪」

藍沢「おう、お帰り。割と長かつたな」

燐子「今井さんともつとお話したいってあこちゃんが・・・」

藍沢「よく堪えたな、俺なら無理だ」

リサ「昨日は友希那たち、どれくらいお話ししてたの?」

藍沢「大体5分くらいだったか、風邪がうつるからって早く帰ったぞ」

リサ「紗夜も一緒だつたからねー。」

藍沢「ま、1時間も一緒に部屋にいたんだし気を付けろよ。」

リサ「わかつてるよー・・・今思つたんだけど藍沢くんつてアタシたちのなんだろうね?ほら、従弟と例える人つているじやん?燐子は藍沢くんのこと、どう思う?」

燐子「どう…ですか?そうですね…お兄さん…でしようか。面倒見がいいですし、よくしてもらつてるので…」

藍沢「よし妹よ、こつちにおいて(クイクイ)」

リサ 「へー、燐子にとつては藍沢くんはお兄ちゃんかー···」

藍沢 「じゃあ聞くが、リサは俺のことをどう捉える?」

リサ 「そうだねー···弟かな?なんか面倒見たくなるつていうか」

藍沢 「なるほどな。」

リサ 「じゃあそろそろお暇するね。二人つきりの時間を邪魔しちゃ悪いし」

藍沢 「別に俺とあこはそんな仲じやないが」

リサ 「えー?でもお似合いだよ?燐子はどう思う?」

燐子 「私から見たら···ですか?お似合いだと···思います···」

藍沢 「燐子まで···揶揄つてる···わけじやなさそうだな。」

リサ 「アタシはいつでも大真面目だよ?じゃあ今度こそ本当に帰るね。あー、お大事にー♪」

燐子 「あこちゃん···早く良くなつて一緒にNFOやろうね···」

藍沢 「はいはい、伝えておくから帰つた帰つた」

【午後9時：あこの部屋】

藍沢 「あれから結構時間経つたけど···あこ、大丈夫か?」

あこ 「藍にい··?」

藍沢 「入るぞー」

(ガチャヤ···)

あこ 「藍にい···ごめんなさい、迷惑かけちゃつて···」

藍沢 「思つたより元気そうだな。でも今日まで安静にしておけよ?いつ悪化するかわかつたものじやないからな」

あこ 「うん···でもありがとう藍にい···あこのこと、せいいつぱい看病してくれて··藍にいも歌詞作りで忙しいのに··」

藍沢 「歌詞作りなんて空いた時間ならいつでも大丈夫だからな。今回はあこの看病に全部つき込んだがら進捗はなしだけど、あこの容態がよくならないとお祭りに行けないとからな。」

あこ 「えへへ···ありがと、藍にい。あの···今日も一緒に寝

たいんだけど…いい?」

藍沢「別に大丈夫だ、それくらい良くなつて出てこれるようになつたのなら大丈夫だろうし」

あこ「えへへ・・・ありがとう、藍にい。」

藍沢「遅くまで起きてると悪化するから今日はもう早く寝るぞ。」

あこ「うん…おやすみ藍にい・・・」

6月24日

【午後12時：宇田川家リビング】

あこの容態が少し良くなつてから二日経つた。それから俺も宇田川姉妹の家に泊まり、あこの容態が完全に良くなるまで看病し続けた。そんな時・・・

あこ「藍にい！おはよー！」

元気な声がリビングに響き渡つた。

藍沢「もう起きても大丈夫なのか？ま、元気に挨拶できるならもういいみたいだしよかつた」

あこ「えへへ、藍にいがずっと看病してくれてたから・・・ありがと、藍にい！」

藍沢「別に、俺はできることをやつただけだ。紗夜たちも差し入れとかしてくれたから今度会つた時にお礼言つておけよ。あと、燐子は『元気になつたらまた一緒にN.F.Oやりたい』つて言つてたな。とりあえず今日まで様子見で家でゆっくりすることだ。」

あこ「えー？今日まで休みー？」

藍沢「ぶり返してまた休むことになつたら困るだろ？」

あこ「むー、たしかにそうだけど・・・藍にいは何するの？」

藍沢「別にやることもないし今日の夕方までここにいるつもりだ。歌詞作りも今日までお休みだ」

あこ「本当!?やつたー！」

(ピンポーン)

藍沢「ん? 今日は誰にも連絡は入れてないはずなんだが……ちよつと出てくる。」

あこ「はーい」

(ガチャ・・・)

【宇田川家：玄関】

藍沢「どちら様・・・って珍しい組み合わせだな。」

家のドアを開けたらそこには・・・

沙綾「あこが倒れたつて巴から聞いて来たんだけど・・・どうですか? あこの調子は」

日菜「あこちゃん! 大丈夫! ?」

つぐみ「私は家の仕事が忙しくて…あこちゃんは大丈夫ですか?」

美咲「あたしは散歩してたら日菜さんに見つかって半ば強制的に連れてこられました…」

藍沢「日菜…お前な…まあこんなところで立ち話もあれだし上がれよ」

沙綾「お邪魔しまーす」

日菜「おつじやましまーっす♪」

つぐみ「お邪魔します」

美咲「・・・」

藍沢「どうしたんだ美咲? 上がつて大丈夫だぞ」

美咲「あ、すみません。お邪魔します」

【宇田川家：リビング】

あこ 「藍にい、来たの誰だつた？」

藍沢 「なんとも珍しい組み合わせだつた」

沙綾 「あこ、もう風邪は大丈夫そう？ はい、うちの焼き立てのクロワッサンどうぞ」

あこ 「さーや！ ありがとー！」

日菜 「その調子だと大丈夫そうかなー。はい、コーラ！」

あこ 「日菜ちゃんもありがとー！」

つぐみ 「あこちゃん、容態がよくなつてよかつたよ。はい、うちのコーヒーとケーキ。」

あこ 「つぐちんもありがとー！ 後で食べるね！」

美咲 「あ、これコンビニで買って来たけど・・・はい、クッキー」

あこ 「みさきんもありがとー！」

藍沢 「みんなしてよく来てくれたな。今日は休みだから家でゆつくりしてもよかつただろうに」

沙綾 「今日は家の手伝いが休みなので来ちゃいました。お見舞いも兼ねてですけど・・・」

つぐみ 「私も今日はお父さんたちが家の仕事をしてくれるつていうので来ちゃいました」

日菜 「あたしは暇だつたから散歩してたらつぐちやんたちを見つけたから着いてきちゃつた！」

美咲 「あたしは玄関で話した通り、散歩してたら日菜さんに見つかって半ば強制的に連れてこられました・・・これから家に帰ろうとしてたんですけど」

藍沢 「しかし・・・本当にあまり見ない組み合わせだな。沙綾とつぐみはともかく美咲と日菜はあまり見ないし」

日菜 「みどりん、それってどう意味ー？」

藍沢 「日菜はパスパレメンバーか紗夜と一緒にいるイメージが高いからな、だから美咲と一緒に来ることが予想外だつたんだよ」

日菜 「本当にー？」

藍沢 「本当だつて。俺の中でのイメージが高いんだよ」

日菜 「そつかー、じやそういうことにしておくね！」

美咲「じゃあ逆に、あたしのイメージって藍沢さんの中ではどうなってるんですか？」

藍沢「美咲のイメージ？うーん…いつもこころか花音と一緒にいて振り回されてるイメージがある…かな。」

美咲「あー…概ね当たつてるので何も反論できませんね…」

藍沢「だろ？」

美咲「それにしてもすごいですね藍沢さん。何度もかしか会つてないのにみんなのイメージをこうも簡単に掴んでるし…」

藍沢「俺は観察力とかはある方なんだよ。だから『次はこうした方がいい』とかよくアドバイスしてたからな。」

沙綾「へえー…翠川さんって検察官とかスポーツ選手とかの監督とか向いてそう」

藍沢「よく義姉さんとかに言われてたよ。『将来は監督とか向いてるんじゃない？』とかね」

つぐみ「翠川さんは何と答えたんですか？」

藍沢「『監督とかの適任者は俺の他に何十、何百といいるだろ。それにまだ俺は高校生だ、これからのこと俺が決める。』こう言つたな」

日菜「えー!? もつたいなーい！」

藍沢「それになるなら自分で決めるさ。誰かに自分の人生を決められるのはまっぴらごめん被る」

美咲「あー…確かに。なんかその気持ちわかります。あたしはバイト中にこころに強制的にメンバーにされた感じだったの…」

藍沢「お互い苦労してるな、美咲」

美咲「はい…本当にあの3バカには引っ搔き回されますしちゃ」

花音さんだけがうちのメンバーの中でも癒しです」

藍沢「まあな…どこか助けたくなる気持ちはよくわかる。道に迷つてた時も何処か放つておけないんだよな」

美咲「なんか藍沢さんは気が合いそうですね、今度一緒にお出かけでもどうですか？」

藍沢「気が向いたらな」

美咲「それは残念です」

沙綾「ちなみにですが、どれくらいあこは寝てたんですか？」

藍沢「んー、ざつと3日くらいってところか。お粥にあこの好きなものとか混ぜたりしてた。」

沙綾「それでよく3日で治りましたね・・・」

藍沢「病気に強いものは好物ってよく言うだろ？」

沙綾「それ、翠川さんだけの持論じゃ・・・」

藍沢「よく言われる」

つぐみ「それで、あこちゃんが倒れてる間藍沢さんはどうしてたんですか？」

藍沢「どうしてたって・・・そりやあこの面倒を見るためにずつと泊まり込みだつたが？」

つぐみ「家の方は空けてて大丈夫だったんですけど？」

藍沢「俺は一人暮らししかしな、それに俺の家は普通に鍵で開け閉めじやなくて指紋と網膜認証が必要だから俺や義姉さんとかがいないと入れない」

つぐみ「もし、扉を無理やりこじ開けて入ろうとしたら・・・？」

藍沢「その時は・・・こう、あれだ」

つぐみ「あれ・・・？」

藍沢「本棚が上から落ちてきて脳天直撃・・・つてな。死にはしないだけ安心してくれ」

つぐみ「いやいや、それって一大事ですよね!? 窓ガラスから入られることは・・・？」

藍沢「強化ガラスだから簡単に入れん。象の足で蹴られても割れないからな」

つぐみ「な、なんだかすごいですね藍沢さん・・・」

藍沢「義姉さんが俺のことを守るためにやつてくれたんだと。」

つぐみ「いつか会つてみたいですねその義姉さんに」

藍沢「極度のブラシスコンだけだ。俺の友達だつて紹介したら速攻で抱き着かれるぞ?」

つぐみ「それならやめておきます・・・」

藍沢「素直でいいな、つぐみは。」

日菜「あつ、おねーちゃんにおつかい頼まれて帰る途中だつた！みどりん、またねー！」

美咲「あたしも散歩の途中だつたのでこれで帰ります」

沙綾「私も弟と妹にご飯作つてあげなきやだからそろそろ帰りますね」

つぐみ「私も、蘭ちゃんたちからお誘いを受けたので今日はお暇しますね」

あこ「みんなありがとう！あこが元気になつたらみんなで遊ぼー！」

藍沢「気を付けて帰れよ」

日菜・沙綾・つぐみ・美咲・「「「お邪魔しました」」」

【午後2時：リビング】

藍沢「いい仲間を持つてるなあこは」

あこ「でしょー？あこも嬉しいよ！」

(ピンポーン)

藍沢「ん？また誰だ？忘れ物をした・・・わけじやなさそうだし。ちよつと出てくる」

あこ「はーい」

【玄関】

(ガチャ・・・)

藍沢「今度は誰だ・・・つてこれまで珍しい組み合わせなものだ」

そこにいたのは・・・

有咲「あこちゃんいるかー？見舞いに来たんだけど」

花音「さつき美咲ちゃんが出てきたけど……あこちゃんが風邪で倒れてたって本当…？」

麻弥「あこさん、大丈夫ですか？見舞いの品、届けにきました！」

藍沢「とりあえず上がつたらどうだ？話はそれからな」

3人「「お邪魔しまーす」」

有咲「あこちゃん、大丈夫…か…？」

3人が目撃したのは…

あこ「あれ？ありしゃとかのちゃんと麻弥ちん？」

さつきもらつたお見舞いの品をひよいひよいと口に運びながらソファで寛いでるあこの姿だつた

藍沢「…あこ、俺がいない数分でよくここまで食べるな…病み上がりの人間が食べる量じゃないぞそれ」

有咲「あれ、さつきまで誰か来てたんですか？」

藍沢「沙綾とつぐみ、日菜と美咲が10分前くらいに帰つたからちょうど入れ違いだな」

花音「美咲ちゃんも来てたんですねか…？一緒に来ればよかつたかな…」

藍沢「美咲も散歩の途中に日菜に捕まつたって言つてたから多分一緒にはこれなかつただろうな…？というかここまでよく一人で来れたな？」

麻弥「あ、花音さんはジブンが拾つてきました。精肉店の周りでうろうろしてたので…」

藍沢「…やつぱりか」

花音「ふええええ…ごめんね麻弥ちゃん…」

麻弥「いいんです、花音さん。散歩してたら花音さんを見つけて、市ヶ谷さんを見つけて一緒にここまで来れたんですから」

藍沢「そういえば有咲は誰から聞いたんだ？」

有咲 「え、普通に蘭ちゃんからだけど……何かまずかったか？」

藍沢 「あー、情報源はそこからだつたか。巴のことだしメンバーに教えてそうだしそんな予感はしてた。」

有咲 「で、あこちやんはもう大丈夫なのか？」

藍沢 「本人は元気って言つてるけどとりあえず今日まで様子見つてことにして家でおとなしくさせてる。」

麻弥 「なるほどー…それで藍沢さんはあこさんが倒れてる間は何をしてたんですか？」

藍沢 「別に、あこに付きつきりで看病していただけだ。巴は蘭たちとお出かけしてたから俺が面倒みることになつた」

花音 「だ、大丈夫だつたんですか…？ 風邪とかうつされたりは…」

藍沢 「それがどうやら、小さい時に風邪をひいたつきり風邪になつたことがなくてな。大丈夫だろ」

有咲 「いやそれさらつと言えることかよ!? 逆にすげーよ！」

藍沢 「ある意味特異体質みたいだな、俺」

麻弥 「いや、特異体質すぎますつて…」

花音 「私は1年に1回は風邪ひいちゃうからその体質が羨ましいなあ・・・」

藍沢 「でも逆に困ることもあるけどな」

有咲 「何があるのか？」

藍沢 「いや、学校休めないし」

有咲 「それ有名校に通う奴が言うセリフじゃねーだろ!？」

藍沢 「勉強ばかりで退屈だつたんだよな、あそこ。部活にも入つてたけど空いた時間でこなしてただけだし」

麻弥 「それでよく他の大学から推薦もらいましたね…他の先生も困つてたんじゃないですか?」

藍沢 「それがそうでもなかつた」

有咲 「ええ…それでいいのかよ有名校・・・」

有咲「そろそろいい時間だな、私はもう帰る。盆栽の世話しねーと
⋮」

花音「私も美咲ちゃんに連絡して迎えに来てもらわないと…お母さんたちは今日早く帰るつて言つてたから…」

麻弥「ジブンも今日はお暇します。楽器店によつて機材も眺めたいので…フヘヘ」

藍沢「そうか、気を付けて帰れよ」

『午後6時』

【リビング】

藍沢「とりあえず、夜ご飯は作つておいた。夜ご飯までは食べて行くけど8時くらいになつたら帰るからな。いつまでも家を空けておくわけにはいかないし」

あこ「うー…藍にい、今日帰っちゃうんだ…また寂しくなつちやう…」

藍沢「別に、もう会えないつて決まつたわけじゃないだろ。俺はR o s e l i aのサポーターだしいつでも会えるだろ?」

あこ「それはそうだけど…あの、藍にい…」

藍沢「どうしたあこ?」

あこ「ちよつと…目、瞑つてほしい…なんて。」

藍沢「目を?別にいいが…(目を瞑る)」

そういうつて俺は目を瞑つた。そして…

あこが俺の頬にキスをした。

藍沢「つ!?」

あこ「えへへ…あこのことずっと看病してくれたお礼。今日帰つ
ちやうのは少し寂しいかもしないけど…藍にいがずっと側にい
てくれたから今日はそんなに寂しくない…かも」

藍沢「…そうか。ほらあこ、ご飯が冷めるから早く食べてしま
うぞ」

あこ「はーい！」

少年少女食事中…

『午後8時』

【玄関】

藍沢「さて、そろそろ時間だし俺は帰るぞ。」

あこ「またね、藍にい！」

藍沢「ああ、またな」

そういつて俺は宇田川家を出た。

巴「あれ、もう帰るんですか？」

藍沢「あこの容態もよくなつたみたいだし、家をいつまでも空けて
おくわけにはいかないからな。」

巴「そうですか、ありがとうございました。」

藍沢「巴も風邪に気を付けろよ」

【翠川宅・藍沢の自室】

藍沢 「（…なんなんだ、この間のリサといい今日のあこといい…：俺には何も心当たりはないんだが…この心に渦巻く感情は何なんだ？…よくわからないな、今日はもう寝ろう）」

Chapter 10 : Preparation period

6月26日

【翠川宅】

藍沢「暑いな・・・しかしこんな時期によくうちの生徒会長は思いつくんだな・・・付き合わされる身にもなってくれ・・・とりあえずRoseliaのメンバーに連絡を入れておかないとな・・・」

『LUNA』

藍沢「ちょっとといいかみんな」

あこ「どうしたの藍にい？」

藍沢「1週間後にうちの学校で体育祭をすることになつてな。1週間の間は歌詞が完成しそうにないかもしれない・・・」

紗夜「この時期に体育祭、ですか？こんなにも暑い時期なんですが・・・日菜も仕事がない時は家でグテーとしてますし・・・」

藍沢「ところがうちの学園の生徒会長は面白そうなことを考えたら即実行する人でな・・・」

リサ「あはは・・・それは災難だねー・・・」

藍沢「ほんとだよ。というわけだから1週間の間は悪いけど練習とかは自由にしてもらつて構わない。」

燐子「機材が不調だつたときは・・・どうするんですか・・・？」

藍沢「時間がある時に俺の友人に頼んでおく。ああ見えて根はよくて機材のことになつたら目が光るくらいに頼もしい奴だ」

友希那「ええ、こちらも頑張るから藍沢さんも頑張つてちょうどいい」

藍沢「ああ、それと……学園に通つてゐる生徒が体育祭に招待……まあ平たく言えば見にきてもらつてもいいんだそうだ。一応伝えておくからな、興味があつたら来てくれ」

あこ「はーい！」

藍沢「悪いな、こつちも頑張るからそつちも頑張つてくれ」

【季瀧学園：3—B教室】

藍沢「にしても……本当にこの時期にやるんだな体育祭。俺も体力に自信はあるけど」

??「だなー……あー……めんどくせえ」

藍沢「そんなこと言つても生徒会長の行動力の前じゃ無力だぞ囊馬（のうま）。」

【オリキヤラ紹介・奈津川囊馬（なつかわのうま）性別：男。季瀧学園に入つてからずつと同じクラス……所謂腐れ縁。めんどくさがり屋で運動部にも所属せずただの帰宅部。家がスポーツジムで学校から帰つたらよく鍛えてるらしい。俺曰く「ベッドから出たくない病発症者」。】

囊馬「ま、俺も体力ある方だしな？めんどくさいけどやらなきゃ進路にも影響出るしな。それにしても藍沢はいいよな、もう別の大学から推薦をいくつか貰つてんだけ？」

藍沢「貰いたくて貰つてるわけじゃないけどな、向こうから出して來てるだけだ」

??「そんなこと言つてると、仲いい子から愛想をつかされちゃうかもよ？」

藍沢「俺は別にそんなことに悩むような人間じやない。そんなこと

言つてる哀祢（あいね）こそ自分の心配をしたほうがいい」

哀祢「私は大丈夫だから藍沢くんのことを心配してるので！」

【オリキヤラ紹介：初瀬哀祢（はつせあいね）性別：女。家が隣で俺がこつちに引っ越して来てからよく暇なときに遊んでくれる友人。コミュ力は結構ある方で初めて会う人にも気さくに話しかけるほど。偶に俺の家までおかずとかを持ってきてくれて、料理も上手い。部活はバスケ部所属。俺曰く「頼れるお隣さん】

哀祢「もう、そんなこと言つてると今度からおかず持つてこないよ？」

藍沢「悪かつたつて。別にもらうのが嫌つてわけじゃないんだ。貰いすぎても悩みの種が増えるんだよ、それに俺は今は仲いい奴は昔に比べて結構増えたんだよ」

哀祢「ふーん？ 藍沢くんに仲がいい人が増えた・・・ね？ 今度紹介してよ」

藍沢「おかげ二日分で手を打とう」

哀祢「ご予約承りましたー・・・なんてね。」

？？「いいよね、そうくんは。すぐに他の子と仲良くなれるんだもん」

⋮

藍沢「琴奈（ことな）は料理がうまいからいいだろ。おかげで昼飯にも困らないしな」

琴奈「それとこれとは話が別だよ・・・」

【オリキヤラ紹介：華鍛琴奈（はるかわことな）。藍沢とは小さい頃から一緒に遊んでいた幼馴染。藍沢の名前が変わつても一番に気づき、小さいころと変わらず普通に接してくれた数少ない人間。家は少し遠いが、定食・弁当屋である「華鍛食堂（はるかわしょくどう）」の人娘。料理がうまく、たまに料理の腕前を評価してもらつたりしている。俺曰く「素直で優しい幼馴染」。部活は家庭科部】

藍沢「まあ、コミュ力が上がったのは琴奈のおかげだからな、ありがとうな琴奈。」

琴奈「そうくんは本当に飲み込み早いからいいなあ・・・ところで、最近仲良くなつたつて子はどんな子たち？」

藍沢「人と話すことが少し苦手なのに交友関係には目がないよなハルは」

琴奈「とにかく、どんな子たちなの？」

藍沢「んー、どんなやつらかっていつても俺からはなんとも言えないとからな・・・個性がよく出てるってくらいだな俺から言えるのは」

琴奈「じゃあ今度、哀祢ちゃんと一緒にその子たちを紹介して？」

藍沢「一応今度の体育祭に招待したからその時を楽しみにしておいてくれ」

琴奈「何人？」

藍沢「招待したのは5人。多分そこから何人か増えそうだけどな」
琴奈「ふーん・・・? そうくんが招待するつてことは結構仲がいいのかな?」

藍沢「まあな、話もLUNAでよくするし」

哀祢「どんな事話すの?」

藍沢「音楽関連のことばかりだけど」

哀祢「ふーん・? 藍沢くん、音楽好きなんだ?」

藍沢「好きっていうよりか熱を取り戻したつて言つた方が正しいだろうな・・・つと、先生が来るぞ。」

【午後4時】

藍沢「種目決めつてもうすこしガヤガヤして決めきれないかつて思つたけどそんなことはなかつたな。みんなはどれにした?」

襄馬「俺は150m走と100mハードル走だな」

哀祢「私は100m走と500m持久走。」

琴奈「私は100m走と150mハードル走だよ」

藍沢「俺は1500m持久走と借り物競争、500mハードル走に出ることになった。多分大体2050mくらいは走らされるだろうな・・・」

ちなみに、学年のクラスごとに代表者8人による二人三脚をやることになった。これは男女の組み合わせを4組なのでまずは男子が4人立候補する。それからそれぞれの男子が組みたい奴を指名して相方になつてもらうという流れだ。俺は琴奈と、囊馬は哀祢と組むことになった。

藍沢「ハル、一緒に頑張ろうな」

琴奈「うん、そうくんとなら多分負けないから・・・」

哀祢「めんどくさくなつて勝負から逃げようとしたら競技中でもあんたのことぶん投げるからね囊馬」

囊馬「ゼンリヨクデトリクマセティタダキマス」

藍沢「さてと・・・これから1週間体力アップのトレーニングでもするかな。」

琴奈「そろくん、まだ体力つけるつもりなの・・・？」

藍沢「つけておいた方がきつい仕事量があつても耐えれそうだしな。琴奈と哀祢はどうする？」

琴奈「うーん：倒れない範囲でお願いしちゃおうかな・・・」
哀祢「私も少しだけお願ひしようかな。室内でばかり動くから偶には外で運動したいから」

囊馬「俺はめんどくさいからバス」

藍沢「そういうと思つてた。んじゃ明日から1日おきに体操服で俺の家の前に集合な」

琴奈「はーい」

哀祢「うん、わかつたよ。」

囊馬「んじや俺は帰るわ。家がジムだし筋トレでもしとく」

藍沢「気を付けろよ。捻挫したらシャレにならない」

囊馬「しそつちゅうトレーニングしてる俺に言うかそのセリフ!?」

哀祢「ケガしたら相方代わつてもらうから」

囊馬「俺がさつき言つたこと忘れてね!？」

琴奈 「ケガしても看病してあげませんからね……？」

襄馬 「琴奈まで辛辣すぎね！」

藍沢 「普段のお前の性格から考えたら妥当な発言だろJK」

襄馬 「おい!？」

藍沢 「じゃあ今日から早速トレーニングするが、行くぞハル、哀祢。」

琴奈 「はーい、そうくん」

哀祢 「じゃあ後でね。私は一回家に帰つて体操着を着替えてくるから」

琴奈 「あ、じゃあ私もそうする。」

藍沢 「じゃあ俺は琴奈についていくことにするけど、哀祢はどうする？」

哀祢 「私はいつたん一人で帰つて準備しておこうかな。」

藍沢 「了解、じゃあ哀祢と琴音はこの後トレーニングつてことで俺の家の前に集合な」

【午後4時半：帰り道】

琴奈 「それにしてもそくん、変わったよね」

藍沢 「そうか？全然自覚はないんだが」

琴奈 「変わったよ。昔音楽をやめた時は『もう音楽なんてやらない』なんて言つてたのに、今じや音楽を聴いたりするのが楽しい感じがするし」

藍沢 「そう言われたらどうかもしないな。まあ、ある一人の子が俺を昔の俺に戻してくれたつて感じだな。多分あの時の言葉がなかつたら音楽とは一生向き合わなかつたんだろうし。」

琴奈 「その子、なんてそくんに言つたの？」

藍沢 「『自分の気持ちを曲に込めた、そんな感じがした』って言つてくれたな。あの時の言葉は今も俺の心の中に聞こえるよ」

琴奈 「優しいね、そん子。」

藍沢「まあな、ちょっと性格が残念だけど普通に話したらどうく普通の子だし」

琴奈「ちょっとその子に失礼じゃないかなそうくん?」

藍沢「ま・・・俺が仲良くなつたこの中で一番変わつてるつちゃ変わつてるけどな。」

琴奈「へえー・・・会うのが楽しみかも」

藍沢「多分、すぐ仲良くなれると思うぞ。」

【午後5時半】

藍沢「悪い悪い、遅れた。つい琴奈と話しながら帰つてたらこんな時間になつてた」

哀祢「じやあ今日のおかずはなしつてことで」

藍沢「全力で取り組むんではなしにしてください」

哀祢「はい、よろしい」

琴奈「本当に食べ物関連になるとそうくん弱いよね…」

藍沢「おいしいものには目がないからな（キリッ）」

哀祢「褒めてない褒めてない」

藍沢「んじゃ、トレーニングと行くか。最初だし少し軽めにする」

哀祢「わかつたよ、しつかりついていくから」

琴奈「私も頑張る・・・だつてみんなの足引つ張りたくないから」

藍沢「始めるぞー」

【1時間30分後】

藍沢「いい汗かいたな、折角だし俺んちで風呂入つていくか?」

琴奈「え、いいのそくん?」

藍沢「ここまで家に帰るまでに夜になるかもだし、途中で風邪でもひかれたら困るしな、それに着替えも持ってきてるんだろう?」

琴奈「うーん、バレちゃうかあ。」

藍沢「まあナップサックを持ってきてる時点でお察しだつたけどな。哀祢はどうする?」

哀祢「私は家の風呂に入るよ。おかげとかを作つて持つてこないとだし」

藍沢「悪いな、体力づくりの運動に付き合わせたのにおかずまで作つてもらうなんて」

哀祢「いいよ、私がやりたいからやつてることなんだから」

藍沢「じゃあおかずとかは哀祢に任せて俺たちは順番に風呂を済ませるか。」

琴奈「はーい。じゃあ哀祢ちゃん、また後でね」

哀祢「はいよ、おいしく作つてくるから首を長くして待つてて」

藍沢「あいよつと。じゃあいくぞ琴奈」

琴奈「はーい、そうくん」

【30分後：翠川宅】

哀祢「お待たせー」

藍沢「ちょっと今琴奈が入つてるからもう少し待つててくれ。」

哀祢「じゃあ漫画とか呼んで待つてるね」

藍沢「じゃあ俺はご飯とか温めておくぞ」

【さらに5分後】

琴奈「上がったよー」

藍沢「ちようどよかつたな、今ご飯が温まつたぞ」

琴奈「あ、そななんだ? ジヤあと飯にする?」

藍沢「そうするか。んじやいただきます。」

琴奈「いただきまーす」

哀祢「いただきます」

【10分後】

琴奈「ごちそうさまー」

藍沢「お粗末様でした」

哀祢「ごちそうさま。」

藍沢「久しぶりの食べだけどまた料理の腕が上がってるんじゃないのか?」

哀祢「そろかな? ありがと。」

琴奈「うん、うまくなつてきてると思うよ?」

哀祢「琴奈つて実家で料理してるからその意見はありがたいかな。少しでも自信になるから」

藍沢「で、明日も体育祭の準備だけどさすがに帰るよな?」

琴奈「うん、さすがに帰らないと…お父さんたちを心配させちゃ悪いから…」

哀祢「私もさすがに帰ろうかな。一人暮らしだけどやることは普通の生活と変わらないし」

藍沢「了解、じゃあまた明日な」

【午後9時：藍沢の自室】

(デデドン)

藍沢「こんな時間にLUNA？宛名は…あことリサ？それに…」

あこ『藍にい、体育祭におねーちゃん連れてくるね！ちょうどその日は練習も休みだしおねーちゃんも特に用事はないって！』

藍沢『了解。巴によろしく言つておいてくれ』

あこ『はーい！』

リサ『アタシも体育祭を見に行くことにしたよ☆有咲も一緒に来
るつて♪』

藍沢『有咲も？よく誘えたなあのインドア娘を』

リサ『日傘さしてくるつて。さすがに直射日光は嫌みたい』

藍沢『ま、普通にそうなるわな…んじゃ当日までのお楽しみだ
な』

リサ『了解☆期待してるよー♪』

藍沢『珍しいな、こんな時に。…美咲』

美咲『あれ、そんなに意外でした？』

藍沢『いや、美咲つてなんかインドアのイメージがあつたからな』

美咲『よく言われます…あ、体育祭ですけど燐子さんに聞いた
ら「行つてきたらどうですか？」なんて言われたんで見に行くことに
しました。花音さんも連れてくるので』

藍沢『さすがにあの3バカには…』

美咲『さすがに言つてませんよ、あの3バカを連れてくると口クな
ことないので…』

藍沢『いい判断だな、当日は花音のことをよろしく頼む。』
美咲『はいはい、言われなくてもやりますよーっと。』

藍沢「ふう…意外なのがちらほらと来るみたいだけど誰も来ないよ
りましか。じゃあ俺も明日に向けて寝るか。」

なんだかんだで体育祭の練習も練習が終わつた後のトレーニングも滞りなく進み……

7月3日

【季瀧学園・グラウンド】

藍沢「なんか早いな、もう体育祭当日か。」

襄馬「な。あーめんどくせえ……さつさと終わらせて帰つて布団に潜りてー……」

藍沢「こんな時でもめんどくさがる体制は変わんないのかよ襄馬……」

襄馬「だつて運動なんて筋トレしどきやどうにかかるし

哀祢「それ、あんただけだからね？途中で投げ出したら二人三脚の相方変わつてもらうよ？」

襄馬「ダカラソレカンベンシテクレマジデ」

哀祢「なら本気で取り組んでよね？」

襄馬「わーったよ……」

琴奈「ほら、早く準備しないと先生たちを待たせることになるから早く行こう？」

藍沢「琴奈はいつも通りで助かるな。やっぱ幼馴染は一人だけでもいてくれるのはありがたい」

ちなみに俺は体育祭の出発の号令係兼招待客の風紀を正す係になつた。哀祢は競技の実況係、琴奈は選手の体調をチェックする看護係。襄馬は……言うことはないな。だつてあいつだし。あと、選手

たちの他に招待した人たちのためにテントを立ててある。レジャー シートももちろん完備。

で・・・今日はもうすでに来てあるメンバーにあいさつしに来ている

る

藍沢「ずいぶんと早かつたな・・・で、またあれから増えてないか？」

リサ「あはは・・・なんかごめんね？」

そう・・・結局R o s e l i aのメンバー全員が来ることになつて いた。誘つたのはリサとあこである。

友希那「私は来るつもりはなかつたけど、リサがしつこいから來ることにしたわ・・・」

紗夜「私は湊さんについていくことにしたので来ただけです」

燐子「私はあこちゃんに誘われて・・・」

藍沢「そうか、まあせつかくだし見て行つてくれ。俺にとつては高校生活最後の体育祭だしな」

あこ「はーい！ところで藍にいつて何の種目に出るの？」

藍沢「俺は1500m持久走と借り物競争、500mハードル走、二人三脚に出ることになった」

リサ「そんなに出て大丈夫なの？」

藍沢「体力だけは人一倍ある方だしな。」

あこ「いいなー！あこも体力つけたーい！」

藍沢「なら今度、俺メニューの体力づくりトレーニングでもするか？」

？」

あこ「やりたいやりたーい！」

有咲「ところで、私たちのこと忘れてねーか？」

美咲「まあ盛り上がつてますしあたしらは先に席を確保しておきま しようか。」

花音「そうだね、幸いまだ一番前が空いてるし・・・」

巴「だな、アタシらは先に行つてようか。じゃあ藍沢さん、また昼休憩の時にでも」

藍沢「ああ。ちなみに二人俺の友人を連れてくるけどいいよな?」

美咲「翠川さんの友達ですか・・・どんな人なんでしょうね?」

藍沢「そいつは会つてからのお楽しみだ、じゃあ俺はちよつと行ってくるぞ」

巴「じやあアタシたちは競技が一番見やすい中央のテントに陣取つておきますね」

琴奈「そろくん、さつき話してた子たちがそろくんの友達?」

藍沢「そう、ちなみにあの9人の内5人は同じバンドのメンバーだ。といつても他の四人は別々のバンドメンバーだけど」

琴奈「ふーん?」

藍沢「琴奈が考えることまではいってないから大丈夫だ」

教師「えー、これから季瀧学園体育祭を開催します・・・ではみなさん、ご健闘を・・・」

藍沢「(この)教師・・・挨拶が短すぎだろ。ほら見てみろ、有咲たちも呆れてるぞ」

【種目・1500m走】

藍沢「さて・・・と、早速行つてくる。」

襄馬「おう、頑張つて来いよ」

哀祢「そいえば1500m走つて最初の方だつたね、いつてらつしやい」

琴奈「頑張つてきてねー」

藍沢「パパっと走つてくる」

【テント内】

リサ「あれ、あそこでスタンバイしてるのつてもしかして藍沢くん？」

あこ「ホントだー！」

燐子「こんな大人數で走るんですね・・・大丈夫でしょうか・・・？」

有咲「翠川さんなら大丈夫だろ。この間うちの前を走つていつたけど汗一つかかずに突っ走つてたし」

美咲「それ、もはや人間やめてないですか？」

巴「アタシも体力には自信あるけどさすがに藍沢さんのそれにはついていけないな・・・」

花音「私だつたら半分だけで倒れちゃいそう・・・」

【グラウンド】

藍沢「（あいつら、何話してんだ・・・？）と、そろそろ始まるな、さつさと走り切つて体力温存するか）」

スタート係「位置についてー・・・よーい！」

（ドガアン！）

藍沢「（おい待てなんだそのスタートの音・・・誰だこんなのにしたの・・・）」

藍沢グラウンド疾走中・・・

藍沢「さすがに他のクラスはサツカー部とか陸上部とか厄介なのが揃つてるな・・・でも・・・もうゴールなんだ、悪いな」

(スパアン!)

【テント内】

あこ「すつぎーい! 陸上部とかの人たちを相手にしてたのに1周差をつけてゴールしちゃったよ!」

友希那「ええ、すごい脚力と体力だわ。息一つ切らさずに汗一つ書いていないみたいだし本当に大したものね」

紗夜「私たちも少しは彼を見習つた方がいいですね・・・」

巴「いつかアタシも藍沢さんとタイマンで走りたいものだなあこ「あこも体力つけて一緒に走りたいー!」

有咲「やっぱ私もトレーニングに混ざりたいな・・・インドア派の私だけど体力つけないとこれから持たなさそうだし」

【競技が終わつた後の選手たちのテント】

琴奈「おつかれさま、そくん。」

藍沢「おう、サンキューな琴奈。俺よりもほかのやつらのところに行つてあげたらどうだ?俺は全く疲れてないんだし」

琴奈「そう?じゃあ行つてくるね。」

藍沢「いつてらー」

【その後】

何だかんだで半分近くの競技が終了し、昼ご飯の時間になつた。(ちなみに俺は500mハードル走に出たがぶつちぎりの1位だった)ある人は一旦家に帰つてご飯を食べたり、ある人はあらかじめ持つてきておいた弁当を学校の屋上で食べたりと多種多様である。ちなみに裏馬は弁当を持ってきており、一人で食べるといい屋上に一人で向かつていつた。で、俺はというと…

藍沢「よ、昼飯食べに来たぞ。あと連れてくるつて言つてた2人も

来てる」

琴奈「華鍛琴奈です、そろくんとは子供のころからよく遊んでた…
所謂幼馴染です」

哀祢「初瀬哀祢です、藍汎とは高校で知り合ってクラスが3年間一
緒でした。所謂腐れ縁つてやつです」

リサ「へー、琴奈ちゃんに哀祢ちゃんかー。アタシは今井リサ、よ
ろしくね。」

あこ「あこは宇田川あこつていいます！よろしくねコットンとはつ
ちやん！」

琴奈「コットン？あのふわふわモフモフしたあれですか？」

哀祢「はつちやん…？」

藍汎「あこはその人に合つた渾名を付けるんだよ。愛嬌だと思つて
受け入れてくれ」

琴奈「…そろくんがそういうなら」

燐子「私は白金燐子つていいます…よろしくお願ひしますね初
瀬さん、華鍛さん。」

有咲「私は市ヶ谷有咲つていいます。琴奈さん、哀祢さん、よろし
くお願ひします。物を探す時はぜひうちに来てください。大抵のも
のはあるので」

友希那「私は湊友希那。よろしくお願ひするわね、初瀬さん、華鍛
さん。」

紗夜「私は氷川紗夜です。花咲川学園では風紀委員を務めていま
す。よろしくお願ひします初瀬さん、華鍛さん。」

美咲「あたしは奥沢美咲です。まあ商店街で偶にミツシエルの着ぐ
るみ来てバイトやつてます…」

花音「私は松原花音つていいます…あの、よろしくね琴奈ちゃ
ん、哀祢ちゃん」

巴「アタシは宇田川巴つていいます。ちなみにあこはアタシの妹で
す」

琴奈「これからよろしくお願ひします皆さん。」

哀祢「私の方こそよろしく。ちなみに、藍汎が何かやらかしたりと

かはしてないですね？」

友希那「特にそんな感じはしないわね。」

藍沢「でもこの間あこの看病はしてたよな。短い間だつたけど」

琴奈「そななんだ？」

巴「あの時は本当に助かりました。アタシ一人じや手に負えなかつたかもしれないの」

藍沢「普段からあこたちの世話になつてる礼だ。」

琴奈「そいえば湊友希那さんつて…もしかしてR o s e l i aの？」

友希那「ええ、そうだけど…どうかしたのかしら？」

袁祢「R o s e l i aつていつたら有名ですよ。ガールズバンドの超新星だとか言われてますし」

あこ「そこまで言われてるんですか!? やつたー！」

藍沢「こらそこ、浮かれない。」

琴奈「というかそうくん、午後の中盤に借り物競争あつたよね？あれ大丈夫？」

藍沢「あー…確かに不安因子だなあは」

紗夜「何があるんですか？」

藍沢「いや、やることは普通の借り物競争なんだが…」

美咲「え、借り物競争つていつたら御題に書かれてるものとコース内から持つてゴールに走る奴ですよね？ あたしは去年やつたんですけど」

藍沢「それがうちの学園祭は少し特殊なんだよ。御題はコース内に用意されてる箱の中から一枚抜き取つて御題に合つたものを持つてくる。ここまで普通なんだ」

有咲「一体そのどこが特殊なんですか？」

藍沢「それはだな…そのお題はクラスの代表者1名が集まつてみんなで小さく切つた紙に書いてるんだ。」

燐子「それつて…」

藍沢「察しがいい人はわかつてるだろうけどこれは…『中身を全く知らないて時には異様なものまで借りてこなくてはいけない』とい

うことだ。ちなみに中身は何枚あるかは書いた本人しか知らない」

あこ「??つまりどういうことですか？」

紗夜「つまり・・・」

友希那『誰かのサイン色紙』と書かれているならその場にいる誰か有名な人に色紙を持っていってサインを書いてもらわなくちゃいけないのよ。」

琴奈「うん、そういうこと・・・ちなみに私たちのクラスの代表は囊馬くんだから・・・」

哀祢「あいつの書いた御題なんて全く分からぬものばかりだから毎年苦労してるんですけど・・・」

藍沢「他人事のように言つてたけど、場合によつては巻き込まれるからなお前たち？」

花音「えつ？それはどういう・・・」

藍沢「後でわかる」

教師「えー、そろそろ昼休憩は終わりです。選手の人たちは次の種目の準備を、競技に関連する選手はこちらのテントまでお越しください・・・」

藍沢「おつと、呼ばれたな。行くぞ琴奈」

琴奈「はーい、そうくん。それじゃあまた後でね。」

哀祢「私はもう少し話してから戻るよ」

藍沢「あまりしゃべりたくるなよ。お前も選手だからな」

【その後：グラウンド】

教師 「えー……次は季瀧学園体育祭名物、『何でも借りちゃえ競争』です……この競技に参加する皆さんはグラウンド東側まで来てください……」

藍沢 「はあ……どうどう来たか。3回目とはいえあまり気が進まないな……」

【テント内】

花音 「さつき言つてた借り物競争つてこれのことだよね？うーん……どこがどう違うんだろう？」

美咲 「あたしたちも巻き込むこともあるつて言つてましたね……一体どんな内容なんでしょうね……」

巴 「だな……アタシたちはただ待つしかないってことだ」

【グラウンド】

藍沢 「はあ……学園長に聞いたけど今年のクラス代表は厄介なメンバーらしいし……一体どんなお題が書かれてるんだ……」

スタート係 「位置についてー……はつけよーい……どっこいしょ！」

藍沢 「（色々混ざつてないか！？）」

実況 「さーてと合図で一気に選手が走り出したー！お題が書かれてる紙が入つてる箱から無造作に一枚とり、3分以内に持つてこなければ最下位が決定する『何でも借りちゃえ競争』！まず最初に取つたのはー……翠川藍沢選手ー！さて御題の内容はー！？」

藍沢「（さて、適当にお題箱から選んで……よし、こいつでどうだ）…………」

実況「おやおやー？こちらからはよく見えませんが翠川選手、お題の紙に書かれてる内容を見て固まっている様子――！ いつやいどんな借りものなのかー！」

【同時期：テント内】

友希那「みんな、藍沢さんがあそこで固まってるようだけど
紗夜「本当にですね、お題を見てからでしょうか？ ミリ単位も動いて
ません」

リサ「何か厄介なお題を取っちゃつたー…なんて？」

あこ「えー！？まさか藍にいに限つてそんなこと…？」

燐子「でも全く動いてません…」

有咲「いやどんなお題が書かれてるんだよ！？」

美咲「いやいやまさかそんなわけないじゃないですか…って本
当に固まっていますし」

花音「ふえええー…藍沢さん本当に大丈夫かなあ…？」

巴「…なんかわかった気がするけどな」

【同時期：グラウンド】

藍沢「（おいちよつと待てなんだこのお題は誰が考えたんだ本当に
何なんだまさかあいつなのかめんどくさいと言いつつこんなお題書
きやがつてあとで覚悟しどけよあいつコラ）…しようがない、ちよつ
と行くか」

【同時期：テント内】

リサ 「ねえ、誰かこつちに向かつて走つてくるけど…」

燐子 「本當ですね・・・でもあれつて…」

有咲 「翠川さんじやね？こつち来てるけどもしかしてお題・・・しかないよな」

巴 「でもこつちに来るつてことはあそこに置かれてるものじゃな
いってことですよね？」

花音 「ふええええ…」

美咲 「いや花音さんがびっくりしてどうするんですか…あ、こつ
ちに來ましたよ」

藍沢 「はあ…はあ…」

紗夜 「どうしたんですか？そんなに息を切らせて…」

藍沢 「息を切らしてるんじやなくてとあるやつへの殺意が強くて
な・・・つてそんなことはどうでもいい！ちょっと借りるぞ！」

巴 「え？ ちょっと『それ』は！」

【同時期：グラウンド】

実況「お一つと一番に戻ってきたのは翠川選手だー！ 一体どんなお
題の内容だったのか…その内容は!!」

あこ 「藍にい!? これは一体どういうこと…!？」

藍沢 「喋つてると舌噛むぞ！」

実況「まさかの最近注目を浴びているガールズバンド、Rose1
i a のドラマ担当、宇田川あこちゃんだー！ しかもお姫様抱っこ状態
！ お題に掛かっていたのは何なのか知るのは翠川選手だけ！ そして

今ゴールテープを切りましたー！」

藍沢「……なんか悪いな、あ）。お題の内容がとてもとは言えな
いけど……本当に悪かった」

あこ「……とりあえず藍にい、靴……」

藍沢「あ、悪い……とりあえずテントまで戻るから少しの辛抱な。」

【テント】

藍沢「悪い、戻った」

あこ「もー！いきなり連れていかれるから何事かと思つたよー！」

リサ「本当にねー？」

藍沢「本当に悪かつたって……だつてお題の内容がぶつ飛んでた
んでな……と、この話はあとでするから俺はいつたん戻るぞ」

紗夜「とりあえず頑張つてください」

【グラウンド】

教師「えー……以上を持ちまして季瀧学園体育祭は終了となりま
す……見に来ていただいた皆様、選手の皆様……今日はお疲れさ
ました。この後はそれぞれ自由におかれりいただいて結構ですの
で……では解散……」

藍沢「やーっと終わつたか……」

琴奈「そうくん、本当にお疲れさま。借り物競争のお題……なん
だつたの？」

藍沢「悪い、ちょっと人待たせてるから行かないといけなくてな。」

琴奈「じゃあ私は先に帰つてるね、また来週」

藍沢「ああ、琴奈もお疲れさま。今日はゆっくり休んでくれ」

藍沢「LUNAによると屋上・・・だつたか。宛名が不明なのがわからないが・・・とりあえずドアを開けてからだな」

(ギイー…)

藍沢「・・・お前だつたのか」

藍沢「あこ」

あこ「うん・・・あこだよ。どうしても気になつたことがあつて・・・」

藍沢「あー・・・あの借り物競争の時のお題の内容か。正直ずつと隠したかつたんだけど」

あこ「あこは当事者だから気になるのは当たり前だよ!!・・・それで、どんな内容だったの?」

藍沢「・・・どうしても言わなくちゃダメか?」

あこ「ダメ!」

藍沢「・・・はあ、観念して言うしかなさそうだな。ほら、これだよ」

そういうて俺はお題が書かれてる紙をあこに渡した

藍沢「・・・自分の目で確認してくれ、あまり自分でも見返したくないんでな・・・」

あこ「??どんな内容なんだろう?」

(ペラッ)

藍沢「・・・わかつたか?」

あこ「・・・うん、藍にい。」

そこに書かれていた内容は・・・

『あなたが世界で一番守りたいもの』・・・と書かれていた

藍沢 「あこが知ってる通り、俺は一度音楽をやめて普通の学生に戻った身だ。それで2ヶ月前、お前たちR o s e l i a に出会つて昔のことを思い出して喧嘩気味になつたけどあこは俺のことを追いかけてきて昔の俺を思い出させてくれた。・・・あれからずつと考えていたんだよ、あこのことを。あこが支えてくれたから俺は昔抱いていた音楽への熱を取り戻すことができた。・・・俺はあこのことを隣でずっと守りたいんだ。」

あこ 「・・・守られるだけじゃイヤ。あこも藍にいの隣で藍にいを守りたいもん・・・」

藍沢 「・・・あこ」

あこ 「・・・えへへ。藍にいのこと・・・大好き！」

藍沢 「ああ、そうだあこ・・・」

あこ 「何？ 藍にい？」

藍沢 「今はまだ安っぽいプレゼントかもしれないけど・・・誕生日おめでとう、あこ」

そういつて俺はあこを抱きしめた。

あこ 「えへへ・・・とても暖かい・・・」

あこはそう言うと抱きしめ返してくれた。以前は不意打ちで頬にキスをされたけど、あのときは違う。あこの温もりを長く感じることができた。あこのことは俺が守つてみせる。

音楽への熱を取り戻してくれた恩人・・・いや違う。

『一番近くで守りたい恋人』として。

Chapter 12 : Tanabata Festi val

7月7日：午前10時
俺があこと付き合い始めて数日経つたある日・・・俺とあこはとあるメンバーに呼ばれていた。

【今井家・リビング】

紗夜「・・・というわけですがご説明を願えますか？」

そう、俺とあこが付き合つてることはまだ誰にも伝えていなかつた。それで、今日の午前中はcircleでRoseliaメンバーフルで練習していた・・・のだが、あこが俺にべつたりとくつついでいるのだから何事かと問い合わせられている。ちなみになぜ巴がいるのかというと、偶然にもAfterglowと同じ時間帯で練習していたらしく、着いてきたという

友希那「私たちとしても気になつていてるのよ」

巴「あこ、藍沢さんに迷惑かけてないですよね？」

藍沢「俺は特に何もしてないぞ、付き合い始めてからまだ一週間も

経つてないし……とりあえずあこ、ちよつとの間離れてくれ……」

あこ「えー？ なんでー？」

藍沢「友希那たちからの視線が痛いんだ……そしてそこの二人、羨ましそうに見ない」

燐子「だつて……あこちゃんがとても嬉しそうなので……」

リサ「あはは、ごめんね☆見てるのも案外楽しいんだよ？」

藍沢「他人事だと思つて……」

紗夜「あこと翠川さんは私たちと同じR o s e l i aのメンバーです。仲間に隠し事をするはどうかと思ひますが？」

巴「アタシはあこの姉なのでアタシにも一言ほしかつたんですが……」

藍沢「それは悪い、あまりにもあこが楽しそうにしてるもので伝えるのを忘れてたんだ……といふか楽しそうにしてたつていつても俺のお出かけに付き合つてくれてるだけなんだが……」

あこ「あこは藍にいと一緒ならどこでも楽しいもん！」

巴「いや、それは別に大丈夫なんですけど……」

友希那「どうして隠していたのか』それがいま私たちが聞いているところよ。」

藍沢「……はあ、わかつたよ。どうして俺たちが付き合つてるのを隠していたのか……それはあこのお願ひだつたんだよ」

燐子「あこちゃんの……お願ひ……？」

藍沢「そ、あこのお願ひだ。みんなに気を使われるのが嫌だつたらしいんだよ。ほら、あこはR o s e l i aのメンバーの中でも一番年下だし、リサとか燐子はあこに気づかつたりしてるだろ？ 俺と付き合つてるつてみんなに教えてみろ。今よりもっと過保護になるかもしないぞ」

紗夜「それはそうかもしませんが……」

あこ「それに関してはごめんなさい！ でも……やつぱりR o s e l i aのみんなやおねーちゃんたちに迷惑はかけたくないんです！ 藍にいが言つた通り、R o s e l i aのみんなやおねーちゃんたちに氣をつかわれるかもしれないって思つて……」

巴「はあ・・・別にアタシたちは気を遣わないけどな、あこ?」

あこ「えつ?」

友希那「ええ、その通りよ宇田川さん。別に気をつかう、なんてことはないわよあこ。それどころか」

紗夜「ええ、私たちはむしろ祝福するわ。私たちの他にあこさんにとって大切な人ができたのなら」

燐子「うん・・・あこちゃんが幸せなら」

リサ「アタシたちには何もできないって☆おめでとう、あこ♪」

あこ「みんな、おねーちゃん⋮グスツ」

藍沢「どうやら俺たちの取り越し苦労だつたようだな、あこ・・・」

あこ「はい・・・藍にいもなんかごめんなさい・・・」

藍沢「まあ・・・とりあえず俺たちにはみんなに言うことがあるな。」

あこ「うん・・・」

藍沢・あこ「隠していくすまなかつた（隠しててすみませんでした！）」

紗夜「とりあえず今はこれで解決ですが・・・今日二人に集まつてもらつたのにも理由があります。」

藍沢「俺たち二人に？一体何のことだ？あこは何か心当たりはあこ「あこにも何のことかわからないよー・・・一体何なんですか紗夜さん？」

紗夜「詳しいことは私より知っている人がいるので他の方にも来てもらいました、では来てください」

そう紗夜が言つてからリサの家の玄関のドアが開いた・・・そして入ってきたのは・・・

琴奈「こんにちは・・・」

藍沢「あれ、琴奈じやないか。もしかして紗夜が言つていたこれか

らのことを話してくれる人って…」

琴奈「うん、私だよそくん。」

藍沢「で、琴奈が俺たちに話つて何なんだ? 厄介」となら俺は手を引きたい

あこ「えー! まだ何も聞いてないのに! とりあえずコットン、説明お願ひ!」

琴奈「えっと、まずはこれを見てほしいんだけど……」

藍沢「えっと、なになに…? 『七タイベント ペアで弾き語りコンテスト』…?」

あこ「これ何ー?」

琴奈「えっと、午前中に商店街のおばあさんたちが『商店街には楽器を演奏できる子がいるからきっと盛り上がるやんねー』って言って、『それなら今日は七夕だしいつその事2人組で弾き語りしてもらつてみたら?』って言つたら本気にしちゃつたみたいで……それでこのイベントの事を思いついたみたいで」

藍沢「で、それを俺たち二人にやつてほしいと?」

琴奈「うん。それで楽器のことなんだけど、商店街に『S P A C E』ってライブハウスがあるみたいでそこの楽器を借りれるんだつて。だからドラムからギター、ベースもあるんだつて。」

あこ「つまり、あこと藍にいで一緒に演奏してほしいってこと?」

琴奈「うん、そういうことだよあこちゃん。」

藍沢「それ、他のメンバージャダメなのか?」

琴奈「うーんつと、七夕つていえば織姫と彦星だよね?」

藍沢「そうだが」

琴奈「織姫と彦星つて男の人と女の人でしょ?」

あこ「うん! でもそれとこれに何の関係があるのコツトン?」

藍沢「ああ…なるほどな、これは男女ペア限定の弾き語りなのかなこれ」

琴奈「そういうこと、そくん」

あこ「え、つまりあこが織姫で藍にいが彦星つてこと?」

藍沢「その話が本当ならそういう事になるんだろうけど…拒否権は

?」

琴奈「ないよ?」

藍沢「『テスヨネ』。はあ…出るしかないみたいだな。で、選曲の内容は?」

琴奈「ジャンルは問わないって。子供からお年寄りも来るみたいだから」

あこ「ジャンルは自由なんだー?うーん…藍にい、今から曲選ぼうよ!」

藍沢「始まる時間帯によるけどな。琴奈、このイベントは何時から始まるんだ?」

琴奈「えっと…午後7時だつて。7月7日にちなんで」

藍沢「一応時間は結構あるわけか…まあ今から選曲するのもいいかもな。あこ、今から俺の家で選曲するか」

あこ「はーい!」

藍沢「そういうわけだ。悪い、今から俺の家で相談するから俺たちはちょっと帰らせてもらうぞ」

友希那「ええ、わかつたわ。それでは後で会いましょう」

あこ「はい!じゃあまた後で!」

【午後4時：翠川宅】

藍沢「んー…こんな感じでどうだ?」

あこ「すつごいいいよ藍にい!」

藍沢「そうか、ならよかつた。こんなことに巻き込まれたのは初めてだしどんなのがいいのかわからなかつたんだけど…」

あこ「そういえば藍にい、これつてコンテストだったんだよね?」

藍沢「そういえばそんこと言つてたな。それとこれに何の関係が

あるんだ？」

あこ「あこ、よくコンテストとかの番組見るんだけど、こういうと
きつて何か優勝賞品とかあるみたいで…もし商品が用意してあるな
らどんなのだろーって思ったから」

藍沢「そんなものまであるのか？俺はあまりバラエティとか見ない
からな…」

あこ「藍にいつて何の番組見るの？」

藍沢「俺か？俺は…ドラマとかアニメが多いかな。」

あこ「ドラマとか見るんだ？あこはアニメはよく見るけどドラマと
かは見ないから…」

藍沢「案外番組に関しては似た者同士なのかもな。」

あこ「はい！」

藍沢「つと、一応商店街のおばさんたちに一旦顔見せに行かないと
あこ「曲も決まつたし早く行こー！」

な」

【午後5時：江戸川公民館】

おばあさん「おやおや、藍沢くんにあこちゃん。今日はどうしたん
やねー？」

藍沢「どうも、元気そうで。実は俺たち、『七タイベント ペアで弾
き語りコンテスト』に応募しようと思って来たんです」

あこ「はい！あこたちも出場します！」

おばあさん「おやおや、ずいぶんと若いお二人さんが参加してくれ
るのかい？あたしや嬉しいよ」

藍沢「それで、俺たちはどうすればいいんですか？琴奈から事情は
うかがつてるんですけど詳しいことまでは聞いてなかつたので」

おばあさん「おやおや、琴奈ちゃんが…それじゃあ、段取りを
教えるやんねー」

おばあさん段取り説明中・・・

おばあさん「というわけやんねー」

藍沢「服装は自由、ドラムやスピーカーなどの機材を使う場合はSPACEへの申請、ギターや弦楽器とかは各自持参・・・ですか。」

あこ「じゃああこはSPACEに申請しなきやですね！」

おばあさん「藍沢くんは何を使うやんね？」

藍沢「俺は・・・その時に考えます。」

おばあさん「わかつたやんねー」

藍沢「それじゃあお邪魔しました。また後で」

あこ「バイバイ！おばあちゃんたち、お元気にな！」

藍沢「とりあえずさつきのはメモしておいたから注意するのは機材関連だけだな。さて、俺はどれを演奏するか・・・」

あこ「ギターとベースのどっちかがいいってあこは思います！」

藍沢「んー…ベースにするかな。ギターよりベースの方が扱いやすかつたからそつちにする。」

あこ「それで、ベースにしたのはいいけどベースはどうするの？誰から借りる？」

藍沢「その必要はない。ちょっと連絡入れるだけでいい」

あこ「誰？」

藍沢「ちょっと待つてろ、すぐ来る」

藍沢「たしか……あつた、あいつが俺のベースを管理してくれてるんだよな。『俺のベースを持つてきてくれ、頼む』と……」

??? 「『了解、今から向かうね。場所は?』」

藍沢「『公民館前』」

【5分後：公民館前】

あこ「まだー？」

藍沢「もうすぐだと思うんだが……お、来たな。」

琴奈「はい、これ。そうくんが以前大事にしてたベース、ちゃんと整備しておいたから……それで、今回はこれで演奏するの？」

藍沢「ああ、やっぱりこういうときに使つてやりたいのは一番慣れてる楽器がいい。それに……」

琴奈「それに？」

藍沢「こいつならどんな音楽だつて変えられる、そんな気がするんだ。」

琴奈「そう、じゃあ頑張つてねそうくん」

藍沢「琴奈もありがとうな。」

あこ「コツトン、まつたねー！」

琴奈「ああ、それと……」

藍沢・あこ「?」

琴奈「おめでとう、二人とも。あこちゃん、そうくんのことお願ひね」

あこ「うん！」

あこ「それにしてもコツトンだつたんだー、藍にいが楽器を預けてたのつて」

藍沢「まあな。あいつは料理だけじやなくて色んなことを勉強してたからな。幼馴染だけあつて助かつてたよ」

あこ「藍にい・・もしかして、コツトンと付き合わなかつたの、後悔してる?」

藍沢「後悔はしてた。きっと琴奈も俺のことが好きだつたんだろうな・・・でも俺はあこのことを選んだ。もう後悔なんてしない。あいつが背負つた思いを俺は心にとどめて生きていくんだ」

あこ「そのためにもこのコンサート・・・」

藍沢「ああ、琴奈だけじゃない。コンサートを見に来てくれるみんなに俺たちの音楽を届けるんだ。今俺たちにできることはそれしかない」

あこ「うん!あこも頑張つちやうよ!」

藍沢「それじゃあ行くか」

あこ「うん!あこたちの『デュエット、初披露だね!』

【午後7時：商店街の空きスペース】

おばあさん「えー、ただいまより『江戸川商店街恒例 ペアで弾き語りコンテスト』を開催するやんねー。それじゃあ、今回参加してくれるみんなの紹介やんねー。」

【数分後】

おばあさん「それじゃあ、順番に弾き語りをしてもらうやんねー。」

【数十分後】

おばあさん「それでは今回最後の参加してくれたペアの紹介やんねー。宇田川あこちゃんと翠川藍汎くんやんねー」

藍汎「今日はこのようなコンサートを開いていただいてありがとうございます。このコンサートに来てくれる皆様・・・」

あこ「そして、ここにはいなけれどこれまでに演奏してくれたみんなのおんがくをきいてるみんなのためにあこたちはトリとして最高の弾き語りをします！」

藍汎「それでは聞いてください・・・『出会い』」

――――――――

友希那「ここれはもしかして・・・」

紗夜「ええ、これは」

リサ「へえー・・・」

燐子「いい・・・曲です・・・」

そう、この曲は・・・俺とあこがこのコンサートに出るにあたつて考えた曲だ。楽譜なんてなく、ただ俺たちは歌詞を短い時間で完成させた。音は全てアドリブで奏でられ、一定のリズムなんてない。この曲を聴くみんなは目を閉じて聞き惚れていた。

――――――――

(パチパチパチパチ・・・)

演奏が終わると、会場にいた全員が惜しみない拍手で俺たちに感謝を送つて いるようだつた。感動した人もいれば涙を流した人もいた。中にはアンコールを願つた人もいた。

藍沢・あこ「ありがとうございました!!」

【数分後】

おばあさん「それではー、今回のコンテストの最優秀賞の発表やんねー。最優秀賞は・・・宇田川あこちゃんと翠川藍沢くんのペアやんねー」

(パチパチパチパチ・・・)

またもや拍手喝采だつた。他の参加者も俺たちの手を握り、たくさんの感想を言つてくれた。俺たちも他の参加者の弾き語りの感想を言い、賛辞を贈つた。みんなは涙を流しながらも、俺たちを祝つてくれた

おばあさん「それでは、宇田川あこちゃんと翠川藍沢くんは前に来るやんねー」

藍沢・あこ「はい」

おばあさん「それじゃあ二人にはこれを贈るやんねー」

そういうつておばあさんが出したのは・・・

『テーマパークのフリー・パス』だった。最近できたらしく、子供たちがワイワイ遊んでいるらしいので、予約はいつぱいいつぱいな時が多いらしい。今回はたまたま2人分だけとれたらしいが……それをこのコンサートの商品に使うとは……おばあさん、相当若者が楽しむ姿を見たいんだろうな……と思つた。

【その後】

藍沢 「さてと……これ、いつ使う？一応期限は8月の半ばらしいから時間があればいつでも行けそうだ」

あこ 「本当!?」

藍沢 「まあ……とりあえずは今月末の夏祭りが終わってからだな。後は宿題を……」

あこ 「藍にい……」

藍沢 「わかってる。『宿題を手伝つてほしい』だろ？しようがないな……練習がない時はみつちり教えてやるから」

あこ 「藍にいがいれば1000人力だよー！えへへ……今からでも楽しみみだね藍にい！」

藍沢 「ああ。」

家への帰り道、あこは俺の腕に抱き着き離そうとしなかつた。それは当然だろう、あこが心の底から好きな人と一緒にいるのだから。

あこ 「あ、そうだ藍にい。」

藍沢 「あこ？どうし t……」

あこ 「ん……」

あこは俺が言い終わる前に、俺の唇にキスをしてきた。いきなりの

ことで少しごつくりしたが、俺はあこにお返しをするようにあこを抱きしめた・・・

あこ「えへへ・・・あこのファーストキス・・・あげちゃった。」

藍沢「・・・ったく、あこに不意打ちでは敵いそうにもないかもな・・・
俺にとつての初めてのキスは甘く、いつまでも残るような感覚だった。いつまでもこんな時間が続けばいい、そう思った。」

7月25日

【午前10時翠川家・リビング】

俺は今リビングである人からの連絡を待っている。まあいつも元気を振りまいっているから大丈夫だろう。そうしていると・・・(デデドン)

藍沢「お、噂をすればなんとやらか」

『LUNA』

藍沢「今起きたか? あこ。」

あこ「うーん…今起きたよ藍にい…今何時…?」

藍沢「もう午前の10時だぞ」

あこ「えー!? もう10時!？」

藍沢「いつたいぜんたい何時まで起きてたんだあこ?」

あこ「えつと…昨日は藍にいと午前から夕方まで宿題三昧で…えつとそれからちよつと息抜きにNFO始めたらハマつてそのまま寝落ちしたのが…夜の2時くらい?」

藍沢「お前な…自分で言つてただろ、7月末のお祭りを俺と一緒に見て回りたいって。もう明日だぞお祭り」

あこ「だつて時間が過ぎるのは早いんだもん…」

藍沢「そうだとしても、今日お祭りに着ていく着物とかの準備を始めないと当日は間に合わないぞ?」

あこ「じゃあ今から買いに行こー!」

藍沢「だと思つた。じゃあ今から迎えに行くぞ」

あこ「はーい！」

『LUNA・終了』

【午前11時・宇田川家前】

(ポンピーン)

巴「はーい・・・あ、藍沢さん。どうも、今日はどうしたんですか？」

藍沢「ちよつとあことお出かけにな。浴衣を持つてないって聞いたし、俺もお出かけ用の服とか買いたいからあこと一緒にそこの大きいショッピングモールまでな。で、あこは？」

巴「今部屋で着替えてるのでちよつとリビングで待っててもらつていいですか？」

藍沢「ならお邪魔させてもらう」とにするか」

『30分後』

あこ「ごめんおねーちゃん！服選んでたら遅くなっちゃって…あ、藍にい！」

藍沢「あこが着替えてるっていうからちよつとお邪魔してた。それにしてもその恰好…」

あこ「えへへー、どう？」

藍沢「なんというか…とてもあこらしくて可愛いな…」

あこ「えへへ…ありがと藍にい！それじゃあ行こう！」

藍沢「いきなり手を引っ張らなくてちゃんと一緒に行くから大丈夫だ。」

巴「いつてらっしゃい、あこ」

あこ「うん！いつてくるねおねーちゃん！」

【正午・ショッピングモール前】

あれからあこは俺の手を放さず、満面の笑みでショッピングモールまでやつてきた。途中、喉が渴いたと言つて自動販売機からスパークリング水を買つてあげた。

あこ「ここが最近できたショッピングモールなんだ？大きいねー」

藍沢「ここは4階まであって、着物とかの衣服類は3階にあるらしいな。ゲームセンターとかの娯楽は4階、食料品は2階、インフォメーションや雑貨は1階らしい」

あこ「藍にいつてここに来たことあるの？」

藍沢「いや、来たことはない。初めて行くところは下調べする主義なんでな」

あこ「へー？藍にいつてあまり調べないって思つてたんだけど」

藍沢「そうでもないけどな。それじやあ入つて浴衣とかがある衣類フロアに向かうか」

あこ「うん！えへへ、どんなのがあるんだろうー？」

【ショッピングモール：衣類フロア】

藍沢「下から見てたけど、ここも2階に負けないくらいに広いな」

あこ「あこ、顔を上に上げてたから首痛ーい・・・」

藍沢「ずっと顔を上げてるからだ、ほら行くぞ」

あこ「待つてよ藍にい！」

少年少女フロア散策中・・・

藍沢「つと、ここみたいだな。着物は」

あこ「藍にいも一緒に選ばないのー？」

藍沢「俺と一緒に選んでも知ってるから楽しみが減るだろ?」ここは

あこ「一人で行つたらどうだ?」

あこ「それもそうだねー、じゃあまた後で!」

藍沢「俺は適当に洋服見てるから終わつたら呼んでくれ

あこ「はーい!」

少年少女再び散策・・・

『数時間後』

藍沢「お、この服はいいな。普段着にもお出かけにも使えそうだ。・・・いや、さすがに普段着には使わない方がいいなさすがに」

あこ「藍にい、まだ服見てるー?」

藍沢「おつと、あこの方は終わったようだな。じゃあ俺はこれこれを買って・・・よし、あこのところに戻ろう」

あこ「あ、やつと来た藍にい！」

藍沢「悪い悪い。ちょっと服選びに迷つてたものでな。そういうあこの方はどうだつたんだ？」

あこ「えへへー、あこにとつても似合う浴衣を選んだよ！」

藍沢「そうか、良かつたなあこ。それじゃあ今日は帰つて明日に備えるか」

あこ「はーい！」

藍沢「といつてもここで一人で帰らせたら道中に何が起ころるかわからなかから家までは送るぞ」

【午後8時：翠川宅】

藍沢「それにしても明日があこと初のお祭りデートか……やつぱり誰かと一緒に回るのは何倍も楽しいだろうな。……でも今回は特別だ、あこと一緒にお祭りを見て回るんだ、何倍……いや、何十倍も楽しいだろうし、あこも今楽しみで眠れないんだろうな……今日は早く寝るか。『徹夜して楽しめなかつた』じやつまらないし」

【同時刻：宇田川家】

あこ「えへへー、明日はいよいよ藍にいと初めてのお祭りだー♪あこはずつとおねーちゃんとお祭りを見て回つたけど、今回は藍にいと一緒だし……あー早く明日にならないかなー……でも考えすぎても仕方ないし今日はもう寝よつと!」

7月26日

【午前11時・翠川宅】

藍沢「あー・・・なんか早く起きちゃつたな。楽しみだとはいえ、こんなに早く起きるものなのかな?」

(ピンポーン)

藍沢「ん?こんな時間に・・・誰だ?とにかく出るか」

藍沢「はいはい、どちらさんですかーっと」
琴奈「こんにちは、そうくん」
藍沢「あれ、琴奈じやないか。どうしたんだこんな時間に」
琴奈「あ、ここじやなんだしあがつていい?」
藍沢「別に構わないが」
琴奈「それじゃあお邪魔しまーす」

【リビング】

藍沢「で、今日は何の用なんだ?」
琴奈「あ、そうだつた。今日はこれなんだけど・・・」
藍沢「ん?花火・・・だよな。これがどうかしたのか?」
琴奈「花火師さんが今日来て花火玉を上げる予定だつたんだけど、風邪ひいちやつたみたいで・・・家の方まで取りに行かないといダメだから・・・」
藍沢「で、俺にその手伝いを頼みたいと?」
琴奈「ダメ・・・かな?」
藍沢「悪いが俺は無理だ、でも1人アテがあるからその人と一緒に向かってくれ」
琴奈「そつかー・・・今日はあこちゃんとお祭りデートだもんね。ごめんね」

藍沢「じゃあちょっと連絡入れるぞ」

藍沢「もしもし俺です、ちょっと今手が離せないのでお手伝いをお願いできますか？はい、今日の祭りに使うもので…そうですか、わかりました。」

琴奈「それで…どうだったの？」

藍沢「今休憩してたから都合よく来てくれるって言つてた。もうすぐ来るらしい」

琴奈「そつか、ありがとそくん。じゃあまた後で」

藍沢「ん？ 琴奈もお祭りを見て回るのか？」

琴奈「私は今回屋台の露店担当だよ。こっちも人手が足りないから…」

藍沢「そうなのか。時間があつたら寄ることにするよ」

琴奈「首を長くして待つてるね。それじゃあ今度こそまたね」

藍沢「ああ、またな」

【午後5時：翠川宅】

藍沢「さて…そろそろ出た方がいいかもな。あこの家で巴が着付けしてるつて言つてたし、今から行けばいい時間になりそうだ」

〔午後5時30分：宇田川家前〕

(トンチンカーン)

巴「あ、藍沢さん。あこの着付けは終わってるので入つてもらつて大丈夫ですよ」

藍沢「もう終わったのか、早いな巴」

巴「何年もあこの着付けを手伝つてますからね。あこは部屋で待つてるので早く行つてあげてください。アタシは今から行くところがあるので」

藍沢「どこに行くんだ？」

巴「商店街の太鼓を叩くので少し早めに行つてメンバーと顔を合わせないといけないんです。それじゃあ藍沢さん、また後で！」

藍沢「おう、また後でな」

〔同時刻：あこの部屋前〕

藍沢「あこ、入るぞ？」

あこ「藍にい？入つていよいよー」

(ギイイ・・・)

あこ「えへへ・・・」

そういうてあこは俺に会うなり抱き着いてきた。もちろん、急に。

藍沢「おつと・・・もう驚かないぞ、もう慣れたからな」

あこ「ぶー・・・それより藍にい、この浴衣どう？」

(ヒラリ)

そういうてあこは一回転して浴衣を見せた。布地は紫でいろんなNFOのモンスターがプリントされており、所々に花柄もプリントされていた。頭にはいつものヘアゴムではなく、向日葵とカーネーションをモチーフにしたヘアゴムを付けていた。しかしこれは・・・

藍沢「・・・（思わず反射であこを抱きよせる）

あこ「あ、藍にい?!、いきなりされると…」

藍沢「あ、ああ悪い・・・あこがとても可愛かつたからつい反射で抱き寄せていた・・・」

あこ「ううー…あこに不意打ちなんて10年早いよー！」

藍沢「俺だつて偶には不意打ちしたくなるんだよ。気まぐれな猫みたいにな

あこ「もー…そんなことはいいから行こうよー！あこ、もう待ちきれない！」

藍沢「おつと…じゃあ行くか」

あこ「うん！」

そういつて俺はあこの手を握つて外へと足を踏み出した。いつもあこの方から握つてくるから今日はそれのお返しつてな。

【午後6時：商店街】

藍沢「まだ6時だつてのに結構にぎわつてるのな。」

あこ「そうだね、屋台とかにもたくさん的人が来てるしあこたちも早く行こうよ！」

藍沢「そんなに急がなくても屋台は逃げないから大丈夫だぞ、そこのおじさん、焼きそば二パックお願い」

おじさん「あいよー！おやあこちゃん、今日は巴ちゃんと一緒にやないんだね？」

あこ「はい！今日は藍にいと一緒に見て回ることになりました！」
おじさん「そうかそうか、藍くんとかいつたね、あこちゃんは可愛いし人気者だから支えてあげてくれよ」

藍沢「言われなくとも。あと俺の名前は翠川藍沢です。」

おじさん「おや、すまないね！よーし、これはおじさんからのおごりだ！もつてけカップル！」

あこ「いいんですか?！」

おじさん「あこちゃんが幸せそうにしてるからおじさんは満足だよ！」

藍沢「はあ…まあいただきます。」

おじさん「あ、そうだあこちゃん。これ。」

あこ「これなんですか？」

おじさん「今日の催しだ。ぜひ時間があるなら行つてみるといいよ！」

あこ「ありがとうございます！（どんな催しものなんだろう？後で見てみよーっと）」

藍沢「あれ？ あそこにいるのって…」

あこ「あ、日菜ちゃん！」

日菜「あれ？ みどりんとあこちゃん！ 今日はどうしたのー？」

あこ「今日は藍にいとお祭りデートなんだー！」

日菜「へえー・・・？ あこちゃん、おめでとう！ おねーちゃんは何も言つてなかつたけど、いつから付き合い始めたの？」

藍沢「今月の頭くらいだな、体育祭でちょっとハプニングがあつたけど」

あこ「あの時は驚いちやつたけど…あこはとつても嬉しかったもん！」

日菜「ねえねえ、何があつたの？」

藍沢「俺の口からは何とも言えない」

あこ「あこの方もお口チヤックで…」

日菜「ざんねーん…るんつてくるイベントには違いないんだけど教えてほしいなー・・・」

藍沢「ところがどつこい、俺たちには守秘義務つていうのがあるからな。それに知つてるのは俺とあこだけだし」

日菜「あーあ…・・・楽しい」と思ついたんだけどこれはるんっこないからパスかなー」

藍沢「走してくれた方が巻き込まれる側としては嬉しいけどな」

日菜「あ、おねーちゃんが呼んでる。それじゃあまたねー！」

あこ「じゃあね日菜ちゃん！（ちよつと今のうちにさつきもらつたチラシ見てみようつと、確かポケットに・・・あ、これ面白そう！藍にいも誘おう！）」

藍沢「あこ、さつきから楽しそうな表情をしてどうしたんだ？」

あこ「藍にい、こんな催しもあるんだけど一緒に参加しない？」

藍沢「一体何の催しものなんだ？」

あこ「えっとね・・・これ！」

藍沢「なになに？『一緒に盆踊りを踊ってくれる人募集』？つまりあれか、一緒に盆踊りを踊りたいってか？」

あこ「うん！」

藍沢「俺は盆踊りを踊ったことはないんだが・・・」

あこ「あこは何度か踊つたことがあるからあこでよければ教えるよ？」

藍沢「じゃあ頼んでいいか？」

あこ「うん！」

あこ盆踊り説明中・・・

藍沢「なるほどな、そんな感じか。わかりやすくてありがたい」

あこ「本当？やつたー！」

藍沢「というかもうそんな時間じやないか？ほら」

そういうて俺は腕時計をあこに見せる

あこ「ホントだ！早く行こう藍にい！」

藍沢「はいはいと。本当にお転婆なお姫様だこと」

藍沢 「何とか間に合つたけど・・・他にも見知った顔がいるな。組み合わせも珍しいし」

そこにいたのは・・・リサと沙綾の組み合わせ、有咲と日菜、りみとつぐみの3組だった。・・・二組目は大丈夫かこれ?

あこ 「うわあー・・・結構人がいるね藍にい」

藍沢 「こんなものじやないのか?」

あこ 「そうかな・・・?あ、そろそろ始まるよ藍にい!」

【数分後】

藍沢 「なんとか踊れたな、初めて踊れたにしてはできた方じやないか?」

あこ 「うん!藍にい、とてもうまかったよ!」

(ピンポンパンボーン)

つぐみ『これから商店街で花火を上げます、見たい方は見晴らしのいいところに移動したり家の方でゆっくり見たりしてください!』

藍沢 「らしいけど、どこで見る?穴場なんて知らないし・・・」

あこ 「それなら藍にいの家で見ようよ!」

藍沢 「俺の家に?別に構わないが・・・テラスもあるし、そうと決まつたら行くか」

あこ 「うん!」

【午後7時半・翠川宅テラス】

藍沢 「どうだ?」

あこ 「すつごい氣にいったよ!毎日ここに来たい!」

藍沢「毎日はさすがに飽きるだろうから週5とかにしてくれ。R.O
se1iaの練習もあるだろうし……あ」

あこ「どうしたの藍にい？」

藍沢「……いい歌詞を思いついた。みんなが書いてくれた歌詞……あれ、今週にでも完成しそうだ。」

あこ「本当!？」

藍沢「ああ、本当だ。他のみんなが教えてくれた。歌詞は一人で書くものじゃない、みんなで書いてこそその歌詞だつて」

あこ「えへへ……あこも力になれたのならうれしいよ！」

藍沢「……あこ」

あこ「何? 藍にい」

あこが目を丸くして俺を見つめた。そのきれいな瞳に吸い込まれるように：俺はあこにそつとキスをした。ほんの少しの間のキスだつたけど、あこはゆっくりと受け入れてくれた。

藍沢「やられっぱなしは性に合わないからな。いつものお返しだ」
あこ「……えへへ、やつぱり温かい。藍にいと一緒にいると……嫌なこと全部がなくなつて嬉しいことに変わるから……」

藍沢「……俺もだ。あこと一緒にいるどんなつらいことも忘れることができる。……本当にありがとう、あこ。」

あこ「えへへー……あこもとっても嬉しい。……藍にい」

そういつてあこは俺の肩に頭を乗せてきた。あこの髪からはふわつとしたいい香りがした。そして気が付いた時には俺とあこは巴と琴奈がソファに運んでくれていたみたいだ。どうやら花火が終わつてから少し時間が経つた後眠つていたらしい……

Chapter 14 : Enjoy it this
time... afterwards

8月16日

【午前8時：翠川宅】

藍沢「・・・やばい、完全に徹夜してた。昨晩は久しぶりにNFOにログインして5時間もやつてたからな・・・さすがに今から寝たら昼に起きることになるだろうし、ちょっと目覚ましにランニングでもするか。」

少年ランニング開始…

【午前9時：商店街】

藍沢「あれ、あそこにいるのって…やつぱり」

沙綾「あれ、藍沢さん。どうしたんですかこんなに朝早く」

藍沢「ちよつとネットゲームに昨晩は入り浸つててな、それで疲れなくなつて今日はこんな朝早くに起きてしまったわけだ」

沙綾「ほどほどにしたほうがいいですよ？無理に生活リズムを変えると帰つて体に負担がかかつてしましますから」

藍沢「それは否定できないから困る。それで沙綾もこんな朝早くにどうしたんだ？夏休みも終盤だし宿題を早めに終わらせたいけど気分転換に散歩でもしてた…そんなところか？」

沙綾「いえ、私はもう宿題は終わらせちゃいました。早く終わらせないとバンド練習ができるないので…」

藍沢「もう終わつてたのか、家の仕事もあるだろうに。」

沙綾「そういう藍沢さんは宿題は終わつたんですか？」

藍沢「俺はさつさと仕上げたくて1週間で片づけた」

沙綾「1週間ですか!?さすがに早すぎるよくな・・・」

藍沢「全然大したことなくてな、あっさりと終わらせることができた」

沙綾「それでも普通1週間はないですよ・・・」

藍沢「それで、これからどうするんだ?俺は家に戻つて適当にゆつくり過ごすつもりなんだけど」

沙綾「私も今から店の仕込みをしないといけないので家の方に戻るつもりです」

藍沢「なるほどな、まだ時間あるしちよつと手伝いに来てもいいか?」

沙綾「え、いいんですか?迷惑じゃ・・・」

藍沢「そんなことはない。それにバイトはしてるけどコンビニでのバイトだし、今後のことのための経験になるかもしれない」

沙綾「そうですが・・・それじゃあお願ひしてもいいですか?」

藍沢「そうと決まつたら行くか(あれ、今日は何か約束してたような・・・後で確認するか)」

【午前10時・やまぶきベーカリー】

沙綾「・・・というわけです。私の説明、どうでしたか?」

藍沢「実に分かりやすかつた。今後の参考にもなるだろうし」

沙綾「そういつてもらえると説明したかいがありますね。」

(カラーンカラーン・・・)

沙綾「あれ、こんな時間に誰だろう?まだ開店時間じゃないはずなんですけど・・・」

藍沢「ちよつと俺が出てくる、沙綾はそのまま仕込みを続けてくれてて構わない。俺はもう理解できだし、そろそろ帰る」

沙綾「そうですか？それじゃあまた今度ですね。またのご来店をお待ちしております……なーんてね」

藍沢「ありがとうございます、また今度来る」

【午前10時30分・やまぶきベーカリー前】

藍沢「そういえばLUNAが何回か鳴つてたけど……確認しておくか」

そこには……あこから送られてきたたくさんの通知だつた。「今どこにいるんですか？」「今日は何の日か忘れてませんか？」「もしかして……忘れたりしてないですよね？」など……最後には

あこ『藍沢さんの家の前で待つてるので早く来てください！』と送られていた。

【午前10時45分・翠川宅リビング】

藍沢「……」

あこ「藍にい？これからあこに言われること、わかるよね？」

藍沢「……わかってる、とりあえず言わせてくれ。すまなかつた」

その後俺は大急ぎで家の方に戻り、家の前にいたあこにずっとジト目で見られていた。それで今リビングの方であこにお説教をくらつていた。まさかあこに説教されるなんてな……で、その原因はといふと

あこ「今日はテーマパークに遊びに行くつて約束してたとね？それなのに藍にい、約束をほっぽいてさーやのところで仕事の説明を受け

てるんだもん・・・それはさすがにあこも怒るよ?」

藍沢 「その節は誠に申し訳ない・・・今日は徹夜してて8時に目が覚めたもので、途中で沙綾と出くわしたものだから流れで乗つてしまつてな・・・すまない」

あこ「じゃあ今日はあこと一緒にアトラクション制覇まで一緒にいること!いい!」

藍沢 「わかつたよ、それで手を打つ。」

あこ「ほんと!?やつたー!」

藍沢 「(言い出したら聞く耳持たないだろうしな)」

というわけで、あこは今日のための格好で来ていたので俺も部屋にいつてお出かけ用の服に着替えて『今すぐに』テーマパークへ向かった。

【正午：テーマパーク前】

藍沢 「やつぱりこの日で見ると大きすぎるな・・・調べはしたんだが、これだと夕方まで時間がかかりそうだ」

あこ「そうですね・・・でも制覇はしますよ?男に二言はないんですね?」

藍沢 「ま、やると決めたからには楽しむとするか。だけど途中休憩は挟むぞ?さすがに動きっぱなしだと体調をどこかで崩すだろ?し」

あこ「はーい!」

藍沢 「じゃあまずは・・・」

藍沢・あこ「『ジェットコースターからだろ(でしょー)』」

【午後3時：テーマパーク内休憩所】

藍沢「んー…これでようやく半分か。まあ3時間でこれだけ回れば余裕は結構あるな」

あこ「そうだね、まだまだこれからだよ！」

藍沢「お腹減ったな…昼は食べてきたけど、もう動くと…」

あこ「あこもお腹減ったー！」

藍沢「じゃあそこの売店で何か買うか。何がいい？」

あこ「あこもついていくー！だつて何があるとかわからないし…」

藍沢「じゃ、一緒に行くか。」

あこ「うん！」

彩「いらっしゃいませ…つて藍沢さん!?」

藍沢「あれ、彩じゃないか。どうしたんだこんなところで？」

彩「今日はこっちでバイトなんです、人手が足りないって言つていたので、花音ちゃんと交代でやつてるんですけど…」

あこ「かのちゃん、どうかしたんですか？」

彩「実は…アトラクションを案内する係なんだけど…花音ちゃんが『どうしてもやりたい！』っていうから花音ちゃんに任せちゃつたんだけど…」

藍沢「で、時間になつても戻つてこないと。」

彩「はい…あの、藍沢さんとあこちゃん…お願ひがあるんですけど」

あこ「かのちゃんを連れてくればいいんですね？わかりました！」

彩「ごめんね・・・」

藍沢「ま、乗り掛かつた船だしちゃんと責任をもつてお届けする。あと一応ある人に声をかけてみる。今日は暇だつて言つてたし花音の付き添いつつことで臨時のバイトを雇うつて支配人さんに伝えてもらえないか？」

彩「わかりました！」

あこ「一体誰を呼ぶんですか？」

藍沢「ま、来てからのお楽しみつてことで。多分5分くらいで着くだろ」

彩「早くないですか!?」

藍沢「あいつの運動りよならこれくらい軽いだろうし、何より足が速い。俺と大差ないんじゃないかな？それでも俺の方が速いけど。つと、もう来たみたいだな。おーい、こつちだ」

哀祢「本当に藍沢は扱いが雑なんだから・・・あれ、あこちゃん？体育祭ぶりー！」

あこ「あれ、はつちゃん！」

彩「あれ、二人とも知り合い？」

藍沢「体育祭の時にちょっとな」

彩「いいなー、私も行きたかった…」

藍沢「その日は仕事があるって千聖から事前に連絡入つてたからな、これを機に仲良くなればいいだろ」

彩「それもそうだね！あ、私は丸山彩つていうんだ。えっと・・・」

哀祢「初瀬哀祢です。よろしくお願ひします彩さん」

彩「そんなにかしこまらなくて大丈夫だよ！私たちは同じ年なんだし」

哀祢「そなんなんだ？じやあこれからよろしくね彩ちゃん」

彩「うん！こちらこそよろしくね哀祢ちゃん！」

藍沢「おーい二人とも、今は話してないで哀祢は花音のところまで連れて行くぞ。彩、今花音がいる場所はわかるか？」

彩「えっと・・・確かジェットコースターの前だったような・・・」

藍沢「それならさつき行つてきたところだな、行くか。ああそれ
と……」

彩「？」

藍沢「ここで会つたことは俺たちだけの内緒な。」

彩「わかりました！」

藍沢「あこも哀祢も軽々しく話すなよ？特にあこは」

哀祢「こういう時には口は堅いから大丈夫だから」

あこ「あこも大丈夫だよ！」

藍沢「じゃあ行くか。彩、料理上手かつたぞ。代金はここに置いと

く

彩「また来てねー！」

【その後】

藍沢「えっと……あ、いたいた。おーい」

花音「ふえつ？あ、翠川さん……どうしたんですか……？あ、あ

こちやんと哀祢ちゃんも」

藍沢「花音が迷つてるつて彩から聞いたからその付き人として哀祢
を呼んだわけだ」

花音「ふえええ……ごめんなさい……」

藍沢「謝るなつて、哀祢にはこの地図を暗記させてあるから一緒に
にいれば大丈夫だ」

哀祢「ほら花音さん、一緒に案内しましょうか」

花音「うん……ごめんね哀祢ちゃん……」

【その後】

藍沢 「大抵のところは見て回ったけど……最後にあそこを残して大丈夫だつたのかあこ？」

あこ「テーマパークの最後つて言つたらあそこしかないよね藍にい！」

：・そう、最後に残したアトラクションはテーマパーク定番の『お化け屋敷』である。実はあこは・・・極度のホラーが苦手なのである。普通のお化け屋敷ならまだいい方なのだが・・・どういうわけかスタッフが超絶力を入れすぎた結果、二階建てのお化け屋敷になつたといふ・・・ちなみに大きさは一戸建てレベルだが内容は普通のお化け屋敷とはスケールが何倍も違うらしい・・・で、お化け屋敷の名前はどうと：

藍沢 「『ホラーを超えてエクストリームなホラーハウス』・・・（色々ツッコんだら負けな気しかしないから何も言わないでおこう、うん）」
あこ 「すつごーい！ 建物も大きいしこれつて楽しそう！」

藍沢 「（怖がつて中に入りたがらないつて思つてたけど案外楽しそうだからこれはこれでいいか） 楽しそうにしてるな、じゃあ入るか。ここで最後だし」

あこ「うん！ 早く入つてアトラクション制覇しよう！」

【お化け屋敷内】

藍沢 「おー…これはまたリアルに作られたもんだな。大丈夫かあこ

?」

あこ「だ、だだだだだいじょうぶぶぶぶぶ……」

藍沢「声がめちゃくちゃ震てるぞあこ……はあ、仕方ないな。怖い時は俺の腕にしがみついていいから早く行こう」

あこ「う、うん……」

そしてあこはもう怖くなつたのか俺の腕にしがみついて離そうとしなかつた。

あこ「ギヤー————!!」

あこ「いやあああああああ————！」

・・・とまあこんな感じにあこの悲鳴が隣で聞こえるものだから怖いのなんてどこかに吹つ飛んであこが叫ぶたびに俺の腕にリアルダメージが発生してるんだけどな……あこ、本当に怖いのだめなのな……

【お化け屋敷外】

藍沢「おーいあこー？もうお化け屋敷は終わつたからなー？」

あこ「（ブルブルと震えている）

藍沢「これじやああこを正気に戻さないと俺もまともに動けないかもな・・・しようがない」

あこ「!?」

そういうつて俺は体育祭の時のようにあこをお姫様抱っこした。あこの顔はゆでだコレベルとまではいわないが真っ赤になつていた。あ

あこ「あ、藍にい・・・」

藍沢「こうでもしないとあこが正気に戻らないと思つてな・・・俺まで動けなくなるのは勘弁だしな。さて、そろそろ帰るか。空も暗くなつてきたし」

あこ「帰りたいけど、まずはあこを降ろして…？」

藍沢「おつと悪い」

【午後7時：帰り道】

藍沢「んー…結構堪能できたな。最後のあこの震えてる時の顔がかわいかつたし」

あこ「それはもう忘れてよー！（ポカポカ）」

藍沢「痛い痛い、これは俺たちだけの秘密だからな。誰にも言わな
い」

あこ「本当？」

藍沢「本当だ。あと、この間見せた歌詞はどうだった？」

あこ「あれ、すっごくよかつたよ！今度の主催ライブの時に歌うつ
て！」

藍沢「そうか、ならよかつた。」

(ブロロロロロロロロ・・・)

藍沢 「(ん? 車のエンジン音…それも近くに来ているような…つ

!?) あこ、危ない!」

(ドンッ!!)

あこ 「いたつ! 藍にい、いきなり何・・・を・・・?」

(キイイイイイイーーー!)

あこ 「ウソ・・・藍にい・・・?」

大きな音が響き、あこが暗闇の中で目撃したのは・・・

翠川藍沢が道路で横たわっている姿だった。

藍沢 「(ぐ・・・くそつ、暗かつたから車の音が聞こえただけで反応速度が遅れた・・・ダメだ・・・もう誰も失いたくないのにこのままじや俺が消えることになる・・・そうなつたら誰があこのことを支えるんだ・・・?ダメだ、意識が飛びそうだ・・・)」

あこ 「やだ・・・藍にい目を覚ましてよ・・・藍にい・・・お願ひ・・・」

Ch a p t e r 1 5 : O l d a n d p r e s e n
t

8月22日

???

あこ side

藍にいが車にはねられてから6日が経ちました。あの時車を運転していた人は飲酒+居眠り+無灯火運転だつたから免許停止、無期懲役となつたみたいです。あの事件からあこの心に深い傷が残りました…藍にいはあこを庇うためにあこを突き飛ばしてくてました。あこはパニクつててたんですけど、大きな音だつたから偶然近くに来ていたおねーちゃんが救急車を呼んでくれたから藍にいは緊急救命を受けて何とか命はとりとめたみたいです。でも意識は戻らず、藍にいはずつと眠ったまま…あこは1日おきに藍にいの病室に泊まることにしたので、今日は藍にいのベッドの側で藍にいの手を握つています。

【午前11時・藍沢の病室】

リサ「どう、あこ? 藍沢くんの容態…」

あこ「まだ目を覚ますどころか反応すらしてくれないよ…藍にい…」

紗夜「そうですか…そろそろ私たちの主催ライブなのでできることなら翠川さんには見に来てほしいんですが…」

友希那「藍沢さんを責めても仕方ないわさよ、あの時藍沢さんが近くにいなかつたらあこの方が車にはねられていたと思うから…でも」

燐子「翠川さんも同じR o s e l i aのメンバーですから……やっぱり心配です……」

リサ「……早く目を覚ましてよ藍沢くん。ここまでR o s e l i aが頑張つてこれたのは藍沢くんの力添えもあつたからだしさ……」

R o s e l i aメンバー「……」

友希那「そろそろ私たちは行くわ」

燐子「もう……行くんですか……？」

紗夜「私たちにできることは藍沢さんが作ってくれた歌詞を全力で歌うことです。彼が目を覚ました時に最初に聞かせてあげたいので」

リサ「それもそつかー……あこはどうする？」

あこ「あこは今日はここに泊まるので今日はここから離れられませんから……すみません」

友希那「そう、なら私たちは行きましょうか。あこもイメージトレーニングは忘れないようにしておいて」

あこ「はい……」

【午後12時】

あこ「……藍にい」

(コンコン)

あこ「あれ……？誰……？」

蘭「藍沢さんの容態……どう？」

あこ「まだ動きがないです……」

巴「そうか……あこ、つらいとは思うけど……あこにできることが藍沢さんの近くにいることが一番だからさ」

モカ「およよー……みどりん、早く起きてモカちゃんに毒舌はい

てよー」

つぐみ「うちも藍沢さんがよく来てくれるので他の常連さんも最近は心配してるんです・・・早く目を覚ましてください藍沢さん」

ひまり「私も初めて会った時から少ししか経つてないときによくお菓子の作り方を教えてもらつたりしてたので・・・早く戻つてきてまた教えてください・・・」

蘭「あたしも、コミュニケーションの幅が広がつたのは藍沢さんのおかげだから・・・早く起きてこないと怒るから」

巴「あこは藍沢さんことを楽しそうに話してくれるので・・・あの笑顔を早く見たいんですけど・・・」

あこ「おねーちゃん、つぐみ・・・みんな・・・」

A f t e r g l o w メンバー「・・・」

蘭「ごめん、なんか湿っぽくなつて・・・そろそろ行かないと。いつもでもここにいられるわけじゃないし」

あこ「じゃあまたねおねーちゃん、つぐみ」

つぐみ「・・・心の底からお待ちしていますね藍沢さん」

【午後2時】

(コンコン)

あこ「また?開いてるよー」

(ガチャ)

日菜「みどりんはまだ目を覚まさないのあこちゃん?」

千聖「もう日菜ちゃん、毎日来てるのは彩ちゃんから報告を受けてるから来てから毎回それを言うのは不謹慎よ。」

日菜「でもみどりんはあこちゃんを庇つて車にはねられたんだよね?やつぱりみどりんはかつこいいけど・・・」

彩「そんなしんみりな空気はダメだよ!翠川さんが戻つてきたとき、私たちは笑顔で出向えないと!」

麻弥「そうですね、ジブンたちはアイドルなので笑顔はできるだけ
絶やしてはいけませんから」

イヴ「でもヒナさんの気持ちもわかります、私がアコさんの立場で
も今と変わらないと思いますし・・・早く戻つてくださいソウガ
さん！」

日菜「あたしも、みどりんがたまに叱つてくれるから元気でいられ
るから早く戻つてきてあたしのことを叱つてほしいよ・・・だから早
く戻つてきて！」

千聖「藍沢さんの的確なアドバイスがあつたから私たちも頑張つて
いるんです。だから・・・早く戻つてきてください。」

千聖「そろそろ私たちは行きましょうか。これから仕事があつたの
を忘れてはいけないわ」

麻弥「そうでしたね、遅刻するかしないかの時間なので行きましょ
うか」

日菜「またねあこちゃん！」

あこ「うん、またねひなちん」

【午後2時30分】

沙綾「あこいるー？差し入れ持つて來たよ」

あこ「あ、さーや！」

有咲「私たちもいるぞー。そしてお前たち、入つて早々けが人に近
寄るんじやねー！」

たえ「え、ダメだつた？」

有咲「ダメに決まつてるだろ！」

香澄「そう言つて、ホントは有咲も近寄りたいくせにー♪」

有咲「うるせー！だからお前ら連れてくるのは拒否したかつたんだよ！」

りみ「有咲ちゃん、病室ではお静かに・・・」

有咲「はあはあ…ほんとうに香澄とおたえは変わらねーんだから…やつぱりりみと沙綾がいてくれるのはありがてー…おいお前たち！だからけが人に軽い気持ちで近づくな！」

沙綾「あはは…香澄もおたえもこういう時になつても変わらないんだね・・・」

りみ「でも、こういう時は香澄ちゃんたちが羨ましいっていうか…」

たえ「え、これって空元氣だよね？」

有咲「それ今言うか!? というか香澄マジで空元氣なのかよ!?!」

香澄「だつてー…やつぱり藍沢さんがいないといまいちパツトしないもん！キラキラドキドキしないから…」

有咲「まあな…もうすぐ一週間だろ、藍沢さんが倒れてから」
あこ「うん…あ、差し入れありがとうさーや。代金払わない」と
沙綾「いいよ別に。うちのパン、藍沢さんはよく買ってくれるし、あこも最近はあまり食べれてないつて巴から聞いたからさ。これはうちの奢りつてことにして」

あこ「じゃあそろするねさーやー！」

【午後3時】

こころ「ハッピー！ラッキー！スマイル」

美咲「はいはい、ここは病院だから静かにしようねー。」

はぐみ「そうだよこころん、今日はみんなで静かにしようつてみーくんが言つてたから今日ははぐみも静かにするよ！」

薰「ああ、僨い・・・」

美咲「何か言いましたかおちゃん？」

薰「だ、だれがかおちゃんかな美咲・・・？それよりその言葉、一
体誰に聞いたんだい？」

美咲「千聖さんからですけど」

薰「ふふふ・・・ちーちゃんにはあとで何か言つておかないといけ
ないようだね・・・」

美咲「とりあえず、今日は『僨い』は禁止でお願いしますね？」

薰「わ、わかつたよ・・・」

花音「ふえええ・・・大丈夫かな藍沢さん・・・」

あこ「はぐちん、みさきん！」

美咲「あこさん、藍沢さんの容態はどうですか？」

あこ「まだあこが手を握つても反応はないです・・・」

美咲「そうですか・・・藍沢さんはあたしたちのバンドのストッパー
なのでやつぱり心配ですね・・・そろそろ報告受けて1週間ですし」
花音「私も迷った時に助けてくれたのを今も覚えてるから・・・ま
たみんなで笑顔を届けに行きたいなあ・・・」

【数分後】

こころ「それじやあそろそろ帰るわよみんな！」

美咲「はいはーい、だから病院では静かにしようねー。」

『午後?時』

??

藍沢「・・・ここはどこだ？まわりに何もない、ひたすら暗闇が続
いているだけ・・・一体どこまで歩いて行けばいいんだ？」

??「藍沢くん、久しぶり・・・じやないか。あれから9年も経つて
るけど、私はこの世にいなかつたわけだし」

藍沢「なあ、ここはどこだ夏海（なつみ）」

夏海「ここは藍沢くんの精神世界。現実の藍沢くんは今生死の狭間を彷徨つてゐるところだよ」

【オリキヤラ紹介・倉科夏海（くらしななつみ）。9年前に事故で亡くなつた俺の幼馴染。誰にでも気さくに話しかける好奇心旺盛な女の子。子供の時だつたが、『未来の藍沢くんのお嫁さんになりたい（夏海ちゃんの旦那さんにになりたい）』というほどに両想いだつた。だが突然、藍沢の目の前で車が夏海に突つ込んできたところを見て藍沢は気を失い、その時の記憶を心の底に留め『もう誰も失いたくない』と心に誓つた。俺曰く「マスコット系幼馴染」。時々藍沢の中に現れ、温かい言葉をかけてくれている】

藍沢「そうか・・・確かに俺はある時あこを庇つて車にはねられて：あれからどうなつてゐるんだ？」

夏海「あれから6日、藍沢くんはずつと眠つたままであこちゃんは1日おきに病院に泊まりに來てるつて。さつきまでR o s e l i aのバンドメンバーはもちろん、ポピパとかA f t e r g l o wのメンバーも来てくれたつて」

藍沢「そうち・・・あこだけじゃなくて他のメンバーにも迷惑をかけるのか・・・はは、これじやあの時に誓つたあの言葉は嘘になりますだな。俺はもう誰も失いたくないのに」

夏海「それなら今回は藍沢くんが消えてあこちゃんの心に同じ言葉を刻ませるつもり？」

藍沢「それは・・・嫌だな。あんなことを心に刻むのは俺だけで十分だ。」

夏海「なら、早く起きてあこちゃんのことを安心させてあげないと。ちなみに私のこと他の人に話したりは？」

藍沢「してない。あんなことを人に軽々しく話すものじゃないだろ？」

夏海「そういうところ、昔から変わらなかつたよね。人の嫌なことは人から聞いても誰にも話さないし」

藍沢「あれからだつたか、口が固くなつたのは。それより：・ここか

ら出るにはどうしたらいい?」

夏海「耳を澄ましてみて? 声が聞こえるでしょ?」

藍沢「……確かに聞こえる。微かだけど」

夏海「そ……え……が……こえ……ほ……こ……い……て」

藍沢「……夏海?」

夏海「ごめん……もうここにいるのも限界かも……でもよかつた。」

藍沢「……ちなみに聞いてもいいか夏海?」

夏海「何?」

藍沢「……夏海の未練つて何だつたんだ? そうでもしなきやこうして幽霊として俺と話すことはないだろ」

夏海「……藍沢くんの幸せだよ。でも、もう心配なさうだし……ありがとう、藍沢くん。私、藍沢くんとこうして最後に話せてよかつた。ありがとう……」

藍沢「……ありがとな、夏海。夏海に出会えたこと、忘れたことはない。本当に……ありがとう」

俺がそういうと夏海は上に上がつて消えていった……

藍沢「……夏海が言いたかったことは『そのこえがきこえるほうこうにいって。』だろうな。誰の声かは大体わかる……何度も聞いたあいつの声だ。」

??「も……て……」

藍沢「こっちか? や、あっちか?」

??「あ……に……」

藍沢「少しづつだけど……声が近くなつてきてる。どこだ……どこから聞こえるんだ?」

??「藍……い……戻……きて……」

藍沢「……あっちの方から聞こえるな。早く行かないと……」

藍沢「・・・やつと、ここまで来たか。誰かの手かはわかる。何度も俺が掴んできた手だ、間違えるわけがない。」

夏海の声「この手を掴めば・・・藍沢くんは現実世界の藍沢くんに戻れるよ。早く戻つて安心させてあげて。」

藍沢「夏海・・・お前は目の前からいなくなつても俺の心の中に生き続けるんだな。夏海の想い・・・俺は忘れない。」

そういうつて俺は目の前に見える手を掴んだ。そうしたら俺は上に上がつていき、光の穴の中へ入つた・・・それから俺は気を失いつつも掴んだ手を握つたまま・・・

【同日午後8時：藍沢の病室】

藍沢「・・・う、ここは・・・」

あこ「あ、あ・・・」

藍沢「あ、こ・・・？」

あこ「藍にいー!!」

(ガバッ!!)

藍沢「・・・痛いぞあこ。」

あこ「だつて・・・だつてだつて・・・6日も眠つたままだつたから・・・ずっと手を掴んでたのに何の反応もなかつたから・・・声もかけていたのに・・・」

藍沢「・・・すまない、あこ。俺はずつと心の中に聞こえた幼馴染の声と話していたんだ。」

あこ「幼馴染?」

藍沢「昔、俺には幼馴染がいた。何年も前に事故で亡くなつてな・・・」

でもあいつの声は俺の中にずっと響いていた。それで、あいつが言つてくれたんだ。『その、えがきこえるほうこうにいつて。』つて。それで耳を澄ましてみたら……あこの声が聞こえたんだ。』

あこ「そんなことが……」

藍沢「ありがとう、あこ。俺にずっと話しかけてくれて。あこもあこなりに俺のことを守ろうとしてくれたんだな」

あこ「うん……うん!! あこも藍にいのこと、守りたかったから……」

藍沢「……はは、何とも情けないな俺。ここに守られ、幼馴染にも守られ続けて……でも『守り守られる』それもまた一つの形……つてな」

あこ「えへへ……よかつた、目を覚まして……」

藍沢「まだ体の節々が痛いけどな。」

(ガラガラ)

先生「おや、翠川くん起きたんですか。まだ1週間は寝たままかと思いましたが……気分はどうですか?」

藍沢「いいとはいえませんね、まだ体の節々が痛いですけど」

先生「そうですか。起きたのなら検査をしないといけないので……今日はもう夜なので明日の朝一に検査をします。」

藍沢「わかりました」

先生「ではお大事に」

(ガラガラ)

あこ「よかつたー!」

藍沢「まだ検査しないと何とも言えないけどな。というか、あこはどうするんだ?」

あこ「あこは一日おきに病院に泊まることにしてるので、今日は病院に泊まります!」

藍沢「そうか、というか寝るところはあるのか?」

あこ「休憩室で寝ます!」

藍沢「それじゃあ今日はもう遅いしもう寝ることにするぞ。まだ人が人つてことは変わらないし早く寝て明日の検査に備えないと」

あこ「そつかー……」

藍沢「そう悲しそうな顔をするな。無事退院したらまたこれからも会えるわけだしな」

あこ「・・・うん！」

藍沢「じゃあまた明日な、あこ」

あこ「・・・うんっ！」

藍沢「だからいきなり抱き着いてくるなって……じゃあお休み、あこ」

あこ「・・・うん、お休み藍にい」

そういうてあこは俺にお休みのキスをしてきた。とても長く空いた時間を埋めるような・・・そんな感じがした

Chapter 16 : On the day of the live

8月25日

俺が目覚めてから3日経つた。一昨日の検査の結果は特に異常は見受けられなかつたという。車にはねられた際に全身が少し傷ついただけで特に目立つた内傷や外傷はなく、2日入院するだけで大丈夫だつたという。俺が目覚めてから、俺が目覚める前によく来てくれたメンバーが入れ替わりで来てくれた。俺が復帰した際にR o s e l i aのメンバーに顔を合わせた時はあこは俺めがけて突げk . . 抱き着いてきた。それと、あこの話だと25日はR o s e l i aの主催ライブの日らしい。俺はR o s e l i aのサポーターなのでみんなのサポートに回ることになつていて。リサや紗夜はあこよりも心配していたばかりなのにまた病院送りされるとアタシたちはまた心配しちゃうし』とか言つてたけどあこが『藍にいなら大丈夫！藍にいのことは藍にいが一番よく知つてるし、あこたちが藍にいのことを全力でサポートすればいいんですから！』と言つた。これには紗夜とリサも驚きの表情を隠せなく、俺のサポートにも徹してくれると言つた。ちなみにR o s e l i aの主催ライブの参加バンドはP a s t e l * P a l e t t e s , A f t e r g l o w , P o p p i n , P a r t y , ハロー、ハッピーワールド。各バンドにR o s e l i aのメンバーが向かつて参加を募つたといふ。ちなみにこの参加を募つたのは燐子とあこだつたといふ。俺が目覚めてから燐子は少し恥ずかしがらなくなつたらしい（それでもまだ恥ずかしいところは相変わらず、そして俺の復帰は他のバンドメンバーには伝えてない）・・おつ

と、あいつらが来たな、ちょっと行つてくる

【ライブハウス・ステージ】

あこ「藍にい、ドラムセットはここで大丈夫ー？」

藍沢「もうちょっと左でいいんじゃないか？メンバーが全員に見えるようにしたほうがいいだろ」

紗夜「翠川さん、マイクの位置はここでいいでしようか？」

藍沢「んー・・・それはとりあえず後でみんなと話すから後回しな」

燐子「藍沢さん・・・セットリストはこんな感じで・・・」

藍沢「わかった。後で見直しておく」

友希那「藍沢さん、みんなが楽屋で待つてたわ。リサもお菓子と飲み物が準備できただって言つていたからあとで行くわよ」

藍沢「了解。とりあえずリサを一度呼んでくれないか？マイクの位置調整もしたいし」

リサ「アタシはもういるよ、もうそろそろかなつて」

藍沢「了解、マイクの位置調整するから一旦ステージに立つてみてくれ」

藍沢「こんな感じの立ち位置でどうだ？」

紗夜「いいですね、これならお客様から私たちがよく見えます」

リサ「ちょっと休憩しようか、みんな楽屋で待つてるよ☆」

藍沢「そうするか」

【ライブハウス・樂屋】

友希那「みんな、待たせたわね。セッティングに時間をかけてしまつていたわ」

香澄「友希那先輩！お疲れ様です！今日は主催ライブに誘ってくれてありがとうございます！」

リサ「香澄は相変わらずだねー♪まあ急に変わつても違和感しかないからそのままがいいけど

彩「そういうリサちゃんだけど少し変わつたよね、前より笑顔が増えたつて感じがするかな」

リサ「そう？そういう彩だつて笑顔になることが増えたんじやない？顔に出てるよ？」

彩「え！私そんな顔してた!?」

燐子「えっと・・・松原さん、最近はどうですか・・・？」

花音「私はいつも通りだよ燐子ちゃん。燐子ちゃんは？」

燐子「私は・・・別のジャンルの本を読み始めました・・・探偵ものですけど・・・」

あこ「ふつふつふー・・・今宵は我が青き薔薇が織りなす最高の宴によく來たな！えっと・・・」

つぐみ「えっと・・・巴ちゃん、あこちゃんが言つてることわかる？」

巴「んーっと・・・今日はR o s e l i aの主催ライブによく來てくれたな』って言いたいんだと思うぞ」

つぐみ「さすが巴ちゃん・・・まだ私はわからないから・・・」

紗夜「ちょっと日菜、お菓子を取りすぎよ。食べ過ぎると太るわよ？」

日菜「だつておいしいんだもーん！」

紗夜「まったく・・・緊張感がないわね」

友希那「さて・・・リサ、そろそろあの人に来てもらおうかしらと思つ

てるけど」

リサ「おつ、いいねー♪確かにそろそろいいかも」

香澄「誰か呼んでるんですか？」

紗夜「ええ、ちょっとね。誰か呼んできてもらえる？」

燐子「私が……行つてきます……（あこちゃんに行かせたらバレちやうから……）」

友希那「（さすがにあこに行かせたらバレバレでしょうし）」

あこ「（迎えに行つてあげたいけどあこが行つたらバレちゃうからここは引こうっと）」

紗夜「（宇田川さんに行かせたら即バレてしまうので白金さんはいい判断してますね）」

リサ「（アタシが行つてもいいんだけどここは燐子に任せよつかな）」

燐子「それじゃあ……行つてきます……」

美咲（ミツシェル）「行つてらっしゃーい」

【ライブハウス・ステージ脇】

燐子「あの、藍沢さん……呼びに来ました……」

藍沢「あれ、燐子が来たのか。てつきりあこが来ると思つてたんだけど」

燐子「あこちゃんが行くと……藍沢さんだつてバレちゃうので……」

藍沢「あー……なるほどな。結構あこはみんなの目の前でも俺にベツタリくつついでたしいい判断かもな」

燐子「はい……でも甘えたくなつちやう気持ちはわかります……」

藍沢「俺、どうにもあこの甘えには弱いからな……妹みたいな存在だから甘えさせたくなつてしまふ」

燐子「わかります……藍沢さんはここで待つてください、友希那さんが呼んだらお願ひします……」

【ライブハウス・樂屋】

燐子「友希那さん……とりあえず樂屋前まで連れてきました……」
有咲「白金先輩、呼んだって誰なんですか？わたし達が知らない人だつたら反応に困るんですけど……」

紗夜「市ヶ谷さんが心配することではありません。ここにいる誰もが知っている人ですから。多少変わったところがあるかもしれません」

沙綾「私たちも知ってる人？一体誰なんだろう？ひまりはわかる？」

ひまり「うーん……私もよくわからないなあ……」

モカ「ふつふつふー……モカちゃんにはおみとおなのです。」

リサ「それじやあみんなも気にしてるし、そろそろ来てもらつちゃおうか友希那」

友希那「ええ、そうしましよう。では入ってきてもらえるかしら？」

（ガチャ……）

藍沢「よ、みんな。相変わらず元気そうで何よりだ。」

蘭「あれ……もしかして藍沢さん？」

千聖「あら、もう出歩いても大丈夫なの？というかいつ退院してきたのかしら？」

藍沢「今日だ、みんなは今日また見舞いに来るつもりだつたんだろうけど、事前にR o s e l i aのメンバーに連絡をもらつて病院から出るタイミングを計つてきたんだよ」

有咲「いやいやそれでも起きてから3日で退院とか普通ねーからな!!ツーかどれだけ心配してたと思つてるんだよ！」

藍沢「有咲のツツコミは今日もキレッキレだな」

有咲 「誰のせいだと思つてゐるんだー!!」

藍沢 「おお怖い怖い。」

麻弥 「体の方は大丈夫なんですか？」

藍沢 「まだちよつと痛んだりするけど、少しでもならしておかないといざという時に困るからな。病院の先生も承諾済みだ」

美咲（ミツシエル）「いやいやそれでも出歩くのは危ないですって、白金さんに聞きましたけどあの時はとつさの反応だつたらしいじゃないですか」

藍沢「俺の体のことは俺が一番よく知つてゐる。だからこうして出てきて今日のライブのサポートに来たんだ」

ひまり 「これ、わたしたちには何も言えないのが悔しいね・・・でもよかつたー！思つたより元気そうで」

蘭 「うん、松葉杖とか車椅子を使って動きが制限されてるものだと思つてたし」

藍沢「それならリハビリして出てくるさ。面倒ことに巻き込みたくないんでな」

モカ 「というかみどりん、ちよつと変わつたー？」

藍沢 「そうか？あまり自覚はないんだけど」

モカ 「変わつたよー。なんか少し話しやすくなつたっていうかー？」

彩 「そりいえばそりかも！前は何がどこか話しごくかつた雰囲気があつたけど・・・」
藍沢 「まあちよつと色々あつてな、というかそろそろ時間じやないか？」

あこ 「あつ、確かに！」

燐子 「話すのに時間をかけすぎちゃつたね・・・」

友希那 「それじやあ行きましょうか。私たちの音楽を響かせるわよ」

【ライブハウス・ステージ】

友希那 「今日は私たちのライブに来てくれてありがとうございます。」

紗夜 「私たちはあれからさらに練習を重ねて」

燐子 「みんなで奏てる音がどれほど重要か知りました・・・」

リサ 「今日はここに来てない人にもアタシたちの音楽を届けるよ



あこ 「それじゃあいきます！ Rosellia の新曲！」

友希那 『『E a c h b r i l l i a n c e』。』

――――――――♪

香澄 「とてもキラキラした曲・・・なんだか友希那先輩たちの思ひがこもつた曲みたいです！」

有咲 「これつてもしかして・・・」

藍沢 「ああ、これは俺がみんなに課題として出してた、みんなの歌詞を一つにまとめた曲だ。それぞれのイメージを歌詞にしてもらつて、それを俺がまとめてみた」

沙綾 「そういうえば作詞作曲は一人でやつてるんでしたね。どうでしたか？複数の歌詞を一つにまとめてみた感想は？」

藍沢 「想像以上に疲れただけど、これはいい歌詞だつて俺でも思つてるよ」

蘭 「あたしたちでもわかるよ、これはすごい歌詞だつて。みんなのいつも通りが詰まつた・・・そんな感じがする」

モカ 「エモーい」

藍沢 「聞かれる前に言つておくが、俺はしばらく歌詞を作るのはないとつてくれ。」

白菜 「えー!? どうしてー!? もう飽きちゃつた!？」

藍沢 「飽きたわけじやない、俺にはやりたいことができたしな。」

花音 「やりたいこと・・・？」

藍沢 「まあ今日のライブが終わってから話すからそれまで待つてくれ。」

こころ 「わかつたわ！ まずはみんなでライブを成功させるわよー！」

みんな 「おおー！！」

――――――――♪

友希那 「ありがとう、次は・・・」

【ライブ終了後・楽屋内】

藍沢 「まずはみんなお疲れ様」

香澄 「お疲れ様でしたー！」

りみ 「それで藍沢さん、話つて何ですか？」

あこ 「話つて何藍にい？」

藍沢 「R o s e l i a のメンバーに言つたと思うけど、俺が外国から国内の有名校から推薦をもらつたつて話はしたよな？」

紗夜 「ええ。将来が有望な大学が9割くらい推薦を受けたと聞いていましたが・・・それがどうかしましたか？」

藍沢 「その大学の推薦・・・全部蹴ろうかと思つてる」

あこ 「どうしてですか？ 藍にいならもつと上を目指せるのに・・・」

藍沢 「上に進みすぎても・・・っていうのは雑すぎる理由だな。まあ平たく言えば俺の未来は俺が作りたいってだけだ。誰かの言葉に

縛られて生きていくのは性に合わないし」

燐子「でも…大学とかはどうするんですか…？」

藍沢「それもこれから考えればいい。まだまだ時間はたくさんあるんだからな。ま…どうにかかるだろ。」

リサ「あはは、それが藍沢くんらしいアタシたちにはどうしようもないかなー…」

友希那「そうね、とやかくいうと私たちも説教されるわ」

藍沢「説教までとはいかないだろうが、少しだけ話はするだろうな…と、そろそろ俺の方が時間だな」

あこ「どこか行くの？」

藍沢「ちよつとな。別にそんな変なところは行かないから着いてきてもいいんだぞ？」

あこ「それじゃああこも着いていくー！」

こころ「それじゃあわたし m」

美咲（ミツシエル）「はいはーい、こころは引っ込んでようねー」

たえ「後ろからこつそりついて行つてもいい？」

有咲「おたえはこつちなー」

たえ「あーれー」

日菜「あたしも着いていくー！」

千聖「ダメよ日菜ちゃん。私たちはこれから個々の打ち上げでしょう？」

モ力「あたしもー」

蘭「モ力もこつち。」

モ力「蘭のいけずー」

紗夜「こつちは抑えてきますのでどうぞ行つてください。」

藍沢「悪いな、それじゃあ行つてくる」

あこ「バイバーイ！」

そういうて俺とあこは控室で私服に着替えてライブハウスを後にした

【お寺・夏海の墓の前】

あこ 「ここは？」

藍沢 「前に話した幼馴染が眠つてお墓だ。何年ぶりだろうな…：夏海がなくなつた次の年は墓参りに来たんだけどあれから来てないから…8年ぶりか。」

あこ 「夏ねえだつけ？ 藍にいの幼馴染つて」

藍沢 「ああ、夏海が生きてた時はお互に笑顔で遊んでたな。夏海が目の前で交通事故で亡くなつたときは心を失いかけてけど…：夏海の声が俺の心に語り掛けてきたことは今も鮮明に覚えてる」

あこ 「あれ…？ お墓の上に乗つてたの…」

藍沢 「墓の上に乗つてる？ あこには見えて俺に見えないのつてあつたか？ 視力が落ちたつては病院の先生も言つてないし…：変なあこだな、ちよつと喉も乾いたし飲み物飼買つてくるぞ」

あこ 「はーい」

あこ 「ねえ、そろそろ出てきてもいいよ」

夏海 「あはは、あこちゃんには見えちゃうか。」

あこ 「お姉さんが藍にいが言つてた夏ねえ？」

夏海 「夏ねえつて私のこと？…：今はどうでもいいね。うん、私が夏海だよ。初めてましてあこちゃん。」

あこ 「なくなつたのつて9年も前なんだよね？ それなのに身長が伸びてるつて…」

夏海「今あこちゃんに見えてるのは未来に生きてるはずだつた私の姿。といつても実体は他の人にはあまり見えないからこの姿が見えるのはあこちゃんと藍沢くんだけ……かな」

あこ「どうして今こんなところにいるの？」

夏海「あれから藍沢くんがどうしてたのか気になっちゃつて。でも心配はなさそうだね」

あこ「うん、藍にいは夏ねえの思いを心に秘めて生きていくんだつて。」

夏海「……そつか、それを聞いて安心したよ。あこちゃん、藍沢くんのことをお願いね。今度こそ本当に藍沢くんとはお別れ……だから……」

あこ「待つて！」

夏海「どうか……した……？」

あこ「藍にいと一緒に過ごした日々は……楽しかつた？」

夏海「ふふ、今のあこちゃんたちにはかなわないかもだけど……とつても楽しかつたよ。」

あこ「そつか……ありがとう、夏ねえ」

夏海「何か感謝されるようなこと言つたかな？」

あこ「ううん……深い意味はないけど、これだけは言つておかなくちやつて……」

夏海「ふふつ、変わつた子……こつちこそありがとうあこちゃん。改めて……藍沢くんのこと、お願ひするね」

あこ「うん！」

あこがそういうと夏海はあこの目の前から消えていった……

藍沢「あこ、待たせたな……つて何泣いてるんだ？」

あこ「あ、あれ藍にい……あこ、いつの間にか泣いてた……？」

藍沢「少しだけど涙が流れてたぞ、何かあつたのか？」

あこ「さつき・・・夏ねえと会つて・・・藍にいのこと、いっぱい話してたんだ。」

藍沢「は？さつき夏海と会つた…？」の間『限界かも』って言つて俺の目の前から消えたのに」

あこ「でも…楽しそうにあことお話ししてたよ？」

藍沢「夏海は何と言つてたんだ？」

あこ「『藍にいと一緒に遊べてよかつた、藍にいのことよろしくお願ひするね。私は遠いところからずっと見守つてるから』って・・・」

藍沢「夏海・・・俺の知らないところで何言つてたんだ・・・まあおせつかいな性格だしご愛嬌と受け止めておくか。」

あこ「あの、藍にい・・・」

藍沢「どうした、あこ？」

あこ「・・・おかげり！」

藍沢「・・・ただいま、あこ」

そう言つて俺たちは抱きしめあう。あの時言つてた夏海の言葉が今になつてようやくわかるような気がした。あこのことを安心させるということはあこを幸せにしてやることなんだと思う。あこに心配をかけたこともあつたけど、今は俺に向けて笑顔を向けてくれている。その笑顔は俺が見てきた中で一番輝いているだろう・・・何せ、あこにとつて一番守りたい人が隣にいてくれてるのだから。だから俺も再び誓う・・・

『俺があここのことを幸せにしてみせる。たとえどんなにつらい道が目の前にあつても一人で乗りこえていつまでも前に進み続ける』と。目

E p i l o g u e : A f u t u r e t h a t c h a n g e s w i t h o n e w o r d

【R o s e l i aの主催ライブから6年後の9月1日：飛行機内】

俺、翠川藍汎は今海外から東京に戻る飛行機の中にいる。俺は数年前にある人と結婚し、結婚して数年後に俺たちの間に双子が誕生した。それから数年は東京で暮らしていたが、突然海外から音楽校の講師をしてほしいと頼まれた。最初は断るつもりだったが、色々な人の後押しもあり少しの間滞在することになった。今日はその帰国する日だ。まあ、講師つていつても楽譜の読み方から楽器の仕組みとかの簡単なものばかりだつたが、教え方がよかつたのかのみこみが早かつたけどな・・・それでも海外での貴重な体験は嬉しかつたが・・・おつと迎えが来たな。そろそろ話の時間は終わりか。ちなみに帰つてくることを伝えたのはある人と巴だけだ。他のメンバーには伝えてない

【空港外】

藍汎「なんだ、もう少し遅く来ると思つてたが・・・巴」

巴「アタシは結構時間にはうるさいですから。藍汎さんこそ結構早かつたですね」

藍汎「飛行機が思いのほか早く飛ばしててな、予定より早く着いたわけだ。」

巴「そうだつたんですか、それはそうと乗つてください、首を長くして待つてる人がいますし」

藍汎「おつとそだつたな、それじやあ頼む」

【藍沢宅前】

藍沢「半年ぶりだつていうのになんだか懐かしく感じるな、外国にいると時差ボケが発生するから困る」

巴「半年だけでも時差ボケつて発生するものなんですか？」

藍沢「俺は時間の間隔が普通と違うからな」

巴「それでも普通時差ボケはないと思いますよ・・・それじゃあアタシは蘭たちのところに行きますね。後のことはお願ひします」

藍沢「言われなくても。」

(ブロロロロロロ・・・)

藍沢「さて・・・と、そろそろ入るか。俺の帰りを待つてくれる人達がいる」

(ガチャ・・・)

藍沢「ただいま。」

あこ「おかえり、藍にい！」

藍沢「まだ俺のことは『藍にい』呼びなのか。少しほ下の名前で呼ぶことに慣れた方がいいぞ」

あこ「だつて・・・慣れないんだもん！」

藍沢「まあこれから慣れていけばいいしな。ところであの二人は？」

あこ「あこの後ろに隠れてるよ。藍にいの帰りをずっと待つてくれたんだ！」

??「おかえり・・・なさい・・・」

??「おかえり・・・お父さん・・・」

藍沢「ああ、ただいま。奏咲（かなえ）、桜華（おうか）。

「オリキヤラ紹介・先に出てきたのは翠川奏咲（みどりかわかなえ）、俺とあこの間に産まれた双子の姉だ。巴に似てしつかり者な反面、あこに似てかつこいいものが好き。名前の由来は俺が音楽が好きだから『奏でる』から一文字、生まれた時の笑顔が花のように咲き誇っていたから『咲く』から一文字、生ずつ取つた。髪の色は少し薄めの茶色に少し白が混じつたような色で、瞳の色はピンク。あこのことは『ママ』、俺のことは『パパ』と呼ぶ。一人称は『私』。

もう一人は翠川桜華（みどりかわおうか）。俺とあこの間に産まれた双子の姉だ。巴に似てしつかり者な反面、あこに似てかつこいいものが好き。名前の由来は髪の色が桜色で、春に産まれたことから『桜のよう華やかに』から取つた。瞳の色も桜色。あこのことは『お母さん』、俺のことは『お父さん』と呼ぶ。一人称は『私』。

（ちなみに、R o s e l i a以外のメンバーで奏咲と桜華を知つてるのは巴だけだ、他のメンバー？？？ややこしくなりそうだし知らせてない）

藍沢「しかし、半年ぶりとはいあこは変わらないな。奏咲と桜華は少しだけ笑顔がうまくなつたか？」

奏咲「そう・・・かな・・・？」

桜華「私は少しだけ笑顔が自然にできるようになった：かも・・・」

藍沢「そうか、俺がいなかつた時に成長してくれて嬉しいぞ。」

あこ「あこは変わらないってどういうこと――！」

藍沢「いつまで経つても可愛いつてことだ。で、今日は俺が帰つてきたからみんなのところに回るんだろ？R o s e l i aは最後に回るとして・・・最初はどこに行きたい？」

奏咲「私は・・・あそこに行きたい・・・」

藍沢「お、どこだ？」

そう奏咲が言つて連れて行つた先は・・・

【流星堂】

藍沢 「（よりにもよつて、ここ）が一番最初か…!! いや奏咲は好奇心旺盛だからここを選ぶことはわかつてた… わかつてたさ…!俺の胃は持つのかこれ…）とにかく入るぞ。」

あこ 「はーい！」

（ピンポーン）

沙綾 「いらっしゃー… あれ、あこじyan！」

藍沢 「俺もいるぞ」

沙綾 「藍沢さん!? いつこつちに戻ってきたんですか？」

藍沢 「さつきだな。ちょっと家の方に戻つてあこたちと一緒に來た」

沙綾 「『あこたち』？ 誰かと一緒に來たんですか？ でも周りには誰もいないような…」

藍沢 「ちょっと恥ずかしがり屋でな。ほら二人とも、ご挨拶」

（ピヨコーン）

奏咲 「翠川… 奏咲… です…」

桜華 「翠川桜華です… お母さんがお世話になつてます…」

沙綾 「よろしくね、奏咲ちゃん、桜華ちゃん、私は山吹沙綾だよ。ちなみに藍沢さん、もしかしてこの子たちつて」

藍沢 「ああ、俺とあこの子供な。ちょっとこつちで考えた結果他のバンドメンバーには秘密にしておいた。」

沙綾 「あー…なるほど、わかります。うちにはちょっと騒がしいのがいますからね…」

藍沢 「みんなはもう藏の中か？」

沙綾 「はい、もうみんな来てますよ。案内しますね」

（クイクイツ）

沙綾 「あれ、キミは… 桜華ちゃんだったね、どうしたの？」

桜華 「沙綾お姉ちゃん… だっこ」

沙綾 「あれ、いいの？ お母さんとお父さんのところじゃなくて」

桜華 「お父さんとお母さんにはいつでも抱っこしてもらえるから・・・ダメ?」

沙綾 「あはは、今日は他の人に甘えたいのかな?」

藍沢 「しつかり者同士気が合ったのかも知れないな。じゃあ奏咲はパパと一緒に行くか?」

奏咲 「うん:一緒に行く…」

あこ 「それじゃあ行こうさーや!」

(ギイイ・・・)

沙綾 「ただいま、みんな。」

あこ 「おじやましまーす!」

有咲 「あれ、もう来たのか沙綾とあこちゃん・・・って誰だその子?」

たえ 「もしかして、拾つて来ちゃつた?」

沙綾 「違うよおたえ。もう一人特別ゲストがいて、その人とあこの子供。」

香澄 「誰誰!?」

りみ 「香澄ちゃん・・・覚えてないの?」

藍沢 「俺だよ。」

有咲 「なんだ藍沢さんか・・・って何で戻つてきてるんだよ!?」いつ戻つてきた!!」

藍沢 「今日の朝方」

有咲 「戻つてくる時くらいひとこと言えよ! サプライズ好きか!」

藍沢 「あまりうるさくすると嫌われるぞ?」

有咲 「藍沢さんが原因だー!!・・・で、藍沢さんと沙綾の背中にいるのつて誰だ?」

あこ 「あこと藍にいの子供だよありしや!」

有咲 「そんなこと聞いてねーよ!!」

藍沢 「だつて言つてないしな」

りみ 「2人とも、お名前は何かな? 私は牛込みみつていうんだ。」

奏咲 「翠川奏咲・・・です」

桜華 「翠川桜華です……」

有咲 「私は市ヶ谷有咲なー。よろしく、奏咲ちゃん、桜華ちゃん。」

香澄 「私は戸山香澄だよ！よろしくね力ナちゃん、桜華ちゃん！」

たえ 「私は花園たえ、おたえつて呼んでいいよ。力ナちゃん、桜華ちゃん。」

ちやん。」

ちなみに、香澄とたえが「力ナちゃん」呼びしてるのは「なんとかくこの呼び方がキラキラしてる気がする！」という適當すぎる理由だつた。ちなみに当の本人は嬉しそうにしている。で……俺が「行きたいお姉ちゃんのところに行つておいで」と奏咲に言つて、奏咲が行つたところは……

りみ 「ふふふ、奏咲ちゃん可愛いー♪」

とまありみに向かつて一直線だつた。有咲はやつぱり俺たちが来た時に声がうるさかつたのか怖がられたのが一番の理由だろう。香澄は・・・うん、察してくれ。おたえは・・・俺でもよくわからん。まあ、りみと奏咲が嬉しそうにしてるからいいか。

それから俺は向こうでどんなことをしてたのか雑談した。途中、奏咲と桜華は交代で他のメンバーのところに行つたりしていた。

藍冴 「さて……と、そろそろ時間かな、俺たちはもう出るぞ。」

沙綾 「あれ、もう行つちやうんですか？」

藍冴 「今日はあこの提案で他のバンドのところにも顔を出すんだよ。俺が暇なときは連れてくるからまたその時にでも遊んでやつてくれ」

香澄 「はーい！またね、力ナちゃん、桜華ちゃん！」

桜華 「またね……香澄お姉ちゃん……」

奏咲 「また……遊ぼうねりみお姉ちゃん……」

りみ 「ふふ、また遊ぼうね。」

そういうつて俺たちは流星堂を後にした……

【流星堂：外】

藍沢「次はどこに行きたい？あこからの連絡だと、巴たちは羽沢珈琲店、日菜たちは事務所、美咲たちは弦巻邸、リサたちはリサの家らしいけどここは最後だな。さつきは奏咲だつたし今回は桜華が選んでいいぞ。」

桜華「じゃあ・・・」

【弦巻邸】

藍沢「（キミたち姉妹は本当にこういうところ好きだな・・・いやたしかに『○○邸』って割とかつこいい響きなんだろうけどね？どうしてこう俺の胃を確實にえぐつてくるのか・・・まあ美咲もいるし大丈夫だろう・・・多分）じゃあ入るぞ」

あこ「みさきん！來たよー！」

美咲「あれ、あこさん。こんなところまで一人ですか？」

あこ「ううん、まだ來てるよ」

美咲「誰ですか？」

藍沢「俺だよ。で、2人は隠れてるけど・・・俺の右足に隠れてるのが姉の桜華、あこと手を繋いであこの後ろに隠れてるのは妹の奏咲な。」

美咲「あれ、藍沢さん。というか帰つて來たんですね。そしてそこ

の二人は藍沢さんたちの子供ですか。」

藍沢「まあな。」

美咲「それじゃあ案内しますね。・・・あれ?なんか袖が引っ張られてるんですけど」

(クイクイ)

藍沢「なんかさつきもこんな状況あつたな、あのお姉ちゃんのところに行きたいのか、桜華?」

桜華「うん:」

藍沢「それじゃあ行つてらっしゃい、桜華。美咲、少しの間桜華のことを頼む」

美咲「はいはい、任せましたよーっと」

【こころの部屋】

美咲「花音さん、あこさんたちを連れてきましたー」

花音「美咲ちゃん?わかつたよ、今開けるね。」

(ガラガラ・・・)

花音「ありがとう美咲ちゃん・・・つてあれ?肩に乗つてる子つて誰?」

藍沢「俺とあこの子供だよ。」

花音「あれ、藍沢さん?でもこんなところで立ち話もあれなので入つて一緒にお話しませんか?」

藍沢「そうするつもりだ。」

こころ「そうがー!よく来ててくれたわね!」
はぐみ「そーくん!そんなところに突つ立つてないで入つてきてよー!」

薰「子猫ちやんたちが心より待つていてるんだ、早く入つたらどうだい?」

藍沢「桜華も奏咲も目を光らせているみたいだしな、早く入るかはぐみ「ところで、桜華と奏咲つてだーれ?」

あこ「あこと藍にいの子供だよはぐちん！」

こころ「あら、と一つても素敵な子たちね！」

藍沢「ほどほどにしておけよ？もなく嫌われるしな」

こころ「はーい！」

藍沢「さて、俺はお花摘んでくるから奏咲と桜華はお姉ちゃんたちと遊んでいいぞ」

奏咲・桜華「行つて・・・らつしやい・・・」

藍沢「戻つたぞー・・・つて何だこの状況？」

俺が戻つてきたときには・・・こころの提案（企み）で桜華と奏咲がかわいい服を着せて着せ替え人形化されていた。当の本人たちは喜んでたみたいだし・・・まあいいか。で、着せ替えが終わつた後は桜華は花音と、奏咲はこころと遊んでいた。

藍沢「じやあ次のところに行くから俺たちはそろそろ行くぞ。」

はぐみ「えー！もう行つちゃうの!?」

美咲「はいはーい、藍沢さんは忙しいから引き留めないようにしようねー。それじゃあ藍沢さん、また今度」

藍沢「またな。」

奏咲・桜華「また・・・ね・・・」

藍沢「で、あこ。次は事務所とつぐみの家、どつちに行く？」

あこ「事務所！」

藍沢「だと思つたよ。あこ、日菜に連絡入れておいてくれ」

あこ「はーい！」

【芸能事務所】

あこ 「ちせんぱーい！」

千聖 「あら、あこちゃん。6年ぶりかしら？今日はどうしたの？」

あこ 「それはねー…」

藍沢 「よ、久しぶりだな千聖。」

千聖 「藍沢くん？ いつこつちに戻ったの？」

藍沢 「今日戻ってきた。というか今日は休みだつたんだろう？どうして事務所に集合してるんだ？」

あこ 「あこがちせんぱーい先輩に頼みました！」

藍沢 「あー…なるほどな。」

千聖 「ところで、あこちゃんと藍沢くんがおんぶしてる子は誰かしら？」

藍沢 「俺とあこの子供だよ。あこが教えたがってたけどなんとなく俺が隠した。こつちには日菜もいるし」

千聖 「日菜ちゃんならスキンシップって言つてきそうだからその判断は正しいわね」

(クイクイツ)

藍沢 「ああ、行きたいのか。ほれ、行つてきていいぞ。」

そう桜華は言つて千聖のところに行つた

千聖 「あら、いいのかしら？」

藍沢 「桜華にとつて千聖は憧れみたいなものだから気にいつたんだろ」

千聖 「そう言われると照れちゃうわね」

藍沢 「人気女優がそれを言うか」

【事務所内】

千聖 「ただいまみんな。あこちゃんたちを連れてきたわよ」

彩 「ありがとう千聖ちゃん！ところで…あこちゃんたちって他に誰か来たの？もしかして、千聖ちゃんがおんぶしてる子に関係が

？」

藍沢 「その通り。」

イヴ 「ソウガさん!! 帰つてきていたんですね！」

日菜 「いつこっちに帰つてきてたのー?」

千聖 「今日の朝帰つて来たらしいわ。ちなみに、私がおんぶしてい
る子は翠川桜華ちゃん。藍沢くんとあこちゃんの子供よ。藍沢くん
がおんぶしてるのは翠川奏咲ちゃん。奏咲ちゃんが妹で桜華ちゃん
がお姉ちゃん・・・よねあこちゃん?」

あこ 「はい、ちさ先輩！」

彩 「可愛いーー！」

藍沢 「はいはい、あまり騒ぐなよ。今日は桜華と奏咲もいることだ
し」

日菜 「はーい」

で・・・パスパレのみんなは他のバンドとは違つて奏咲や桜華との
接し方がうまく、桜華も奏咲も笑顔で接することができた。

藍沢 「じゃあ、俺たちはもう行くぞ。あと2か所行くところがある
んでな」

日菜 「そつかー・・・今度時間があつたらまた来てね！」

藍沢 「またな。ほら奏咲と桜華も挨拶」

奏咲・桜華 「また・・・遊ぼうね・・・」

千聖 「ふふ、また会いましょうね」

【羽沢珈琲店】

藍沢 「で、残りは、リサの家だな。あこ、巴を呼んでくれ」

あこ 「はーい！」

(ガチャ・・・)

巴 「藍沢さん、あこ！ それに奏咲と桜華も！」

奏咲 「巴お姉ちゃん・・・こんにちは・・・」

桜華 「巴お姉ちゃんこんにちは」

巴「ああ、こんにちはだな！もうみんな待つてるから早く行きましょう！」

藍沢「はいはい。急ぎ足なのは変わらないな。（まあそれが巴にとつてのいつも通りなんだろうしな）」

巴「みんな！きたぜ！」

蘭「あれ、なんか嬉しそうだね」

モカ「おー？もしかしてもしかするー？」

ひまり「え？誰誰？」

つぐみ「もしかして有名人!?」

藍沢「有名人じゃなくて悪かつたな」

モカ「おー、みどりーん。おかえりー」

蘭「連絡くらいよこしてくれたらいいのに。で、その子供たちって

藍沢さんたちの子供？」

ひまり「可愛いー！」

モカ「ひーちゃん、ステイスティー」

藍沢「こういう時のモカつてしまふのな」

つぐみ「でも本当にかわいいですね。二人のお名前は？」

奏咲「翠川奏咲・・・です・・・」

桜華「翠川桜華です・・・お父さんとお母さんがお世話になつてます・・・」

蘭「桜華と奏咲だね。それにしても桜華つて巴に似てない？」

巴「アタシに？でも蘭はアタシが本当に小さい頃には会つてないよな？」

モカ「多分、しつかりしてるところが似てるんじゃないー？」

ひまり「たしかに・・・巴つてしまふのな」

「こに似たのかも」

巴「あー、確かにそう言われると納得だな」

つぐみ「それで藍沢さん、さつきから奏咲ちゃんが私の服の袖を掴んでるんですけど・・・」

藍沢「それって遊んでほしいってことなんじやないのか？桜華もひまりの服の裾を掴んでるし、遊んであげてくれ。」

ひまり「はーい！」

で、巴はあこのところに遊びに行つてた（俺が不在の時にもちよくちよく行つてた）から一人には懐かれたのは言うまでもないだろうけど：問題はやつぱりひまりだつた。一人によほど構いたかつたんだけうが、そこそこ騒いだものだから無理やり引きはがして接し方というものを教えた。それからは・・・普通に接してくれたけど。つぐみは店員の時に子供とよく話すからかすぐ懐いた。モカは・・・うん、想像に任せる。蘭は二人に弄られて顔を赤くしたりとかして逆に遊ばれた感じだつたな・・・

藍沢「さて・・・と、じゃあ最後のところに行くか。また会えるし」

蘭「そうですね、あまり長居させても時間は有限なので」

つぐみ「またね、奏咲ちゃん、桜華ちゃん。」

ひまり「まつたねー！」

モカ「今度来るときはパン20個のお土産よろしくー」

藍沢「すまん、最後のはよく聞き取れなかつた。それじゃあまたな。」

モカ「みどりんのいけずー」

(ピンポーン)

リサ 「はーい・・・あこじやん!」

あこ 「リサ姉ー!」

リサ 「あはは、あこは相変わらずだね☆あれ、あこの後ろに隠れてるのつてもしかして」

奏咲 「久しぶり・・・です・・・リサお姉ちゃん・・・」

桜華 「久しぶりです・・・リサねーね・・・」

リサ 「おおきくなつたね奏咲ちゃんと桜華ちゃん!元気だつた?」

奏咲・桜華 「(コクリ)」

リサ 「とにかく、積もる話もあるし中に入つてよ。みんな会いたがつてたし」

あこ 「はーい!おじやましまーす!」

あこ 「友希那さん!紗夜さん!りんりん!」

友希那 「あら、あこじゃない。嬉しそうな顔をしているけど何かあつたのかしら?」

紗夜 「そうですね。奏咲ちゃんと桜華ちゃんもいるというのはもうろんですが」

燐子 「あこちゃん、何かあつた・・・?」

あこ 「えへへー、それはですねー!」

藍沢 「久しぶり・・・つていうほどじゃないか。戻ってきたぞ」

燐子 「あれ・・・?」

友希那 「・・・」

紗夜 「もしかして・・・藍沢さん、ですか?」

藍沢 「ただけど、どうしたんだ目を丸くして」

リサ 「いや・・・藍沢くんつて海外にいるんじやなかつた?もうこつちに帰つてきたの?しばらく帰つてこないんだつたんだよね?」

藍沢 「そうしたかつたんだけど、向こうの教師が『教え方がうます

ぎて半年で覚えちやつたから大丈夫』って言うものだから帰つてきた」

燐子「それ……大丈夫なんですか？」

藍沢「まあ俺は臨時で雇われた講師だからな。半年だけだつたけど給料も弾んでくれたし、俺もこれからのこと勉強になつたから帰つてきた」

紗夜「何だか悔しいですね……追い越したと思つたらまた抜かれてる感じがします」

友希那「別に大丈夫でしょう。追い越されるということはまた一つの目標ができるということなのだから」

藍沢「ま、俺を目標にしてくれる人がまた現れてくれて俺は嬉しいけどな。昔のままなら弟子とか取らなかつたんだろうけど今は少しずつ『弟子になりたい』って言ってくる人がいるくらいだし。まあ作詞はあまりしないのは変わらないけど」

リサ「で、最近はどう?」

藍沢「どうつて?」

リサ「体調崩したりはしてなかつた?」

藍沢「別に大したことなかつたぞ。さつきまで他のバンドのところにあこたちを連れて回つてただけだしな」

(クイクイツ)

奏咲・桜華「お姉ちゃんたちと遊んできて……いい……?」

藍沢「ああ、遊んできていいで」

奏咲・桜華「行つて……きます……」

リサ、燐子、紗夜、友希那、奏咲、桜華遊び中…

藍沢「しかし驚いたな」

あこ 「何がですか？」

藍沢 「プロポーズのことだよ。まさかあこの方から言つてくるなんてな。」

あこ 「あ、あれは……あこもテンショングージがマックスで……ほ、本当に好きだったんだもん!!」

藍沢 「あの時のあこの顔といつたら今でも忘れられないな。何せあの時は……」

あこ 「わー！わー！やめてよ藍沢さん!!」

藍沢 「ほら、言えた。」

あこ 「あれ……あこ、無意識に『藍沢さん』って言つた……？」

藍沢 「ああ、言つたな。そして思い出すな、俺たちが初めて出会った日を。あの時はR o s e l i aのメンバーと口論になつて c i r c l e を飛び出したつけ」

あこ 「それであこが藍沢さんを追いかけて藍沢さんの曲の良さをあこの口から伝えて……」

藍沢 「思えばあの時からかもな、あこのことを好きになり始めたのつて。俺にあそこまで自分の思つたことを口にされるのつて中々なかつたし」

あこ 「あこも気が付いたらあこの口からどんどん言葉が出てきて……藍沢さんの口から『俺をR o s e l i aのサポートメンバーに加えてくれ』って言葉が出てきて……とつても嬉しかったんです！それで、こんなあこの言葉でも誰かの心を変えられるつてわかつた時……すつごく嬉しかった！」

藍沢 「それからどんどん仲が良くなつて今は夫婦だ。人生何があつたかわかつたものじゃないな」

あこ 「うん！」

藍沢 「あこ。」

あこ 「何？ 藍沢さん」

藍沢 「これからも、あこだけの輝きを見させてくれないか？」

あこ 「うん！ 藍沢さんも藍沢さんだけの輝きを見せてね！」

奏咲 「パパとママ……ラブラブ……」

桜華「お父さんとお母さん・・・いい雰囲気」

友希那「まつたく、見せつけてくれるわね。」

紗夜「まつたくです。私たちがいることを忘れてませんか?」

燐子「でも・・・あこちゃんと藍沢さんのこと見てるの・・・いいですね。」

リサ「ねー☆なーに話してたの?」

藍沢「秘密だ」

あこ「これはいくらなんでも友希那さんたちには言えません!」

藍沢「あこ、奏咲、桜華。逃げるぞ!」

あこ「うん!」

奏咲・桜華「待って・・・」

そういうつて奏咲は俺の背中に、桜華はあこの背中に乗つてリサの家から逃げた。

一つの言葉で人生は変わる。それを教えてくれたあこが俺の隣であこだけの輝きを見せてくれている。気が付いた時にはあこが俺の隣にいてくれた。苦しい時も楽しい時も、自分だけの輝きを心に秘めて咲き誇る。

かつて輝きを失った俺の心はあこのおかげで輝きを取り戻すことができた。R o s e l i aとなら、あことなら、俺はいつまでも輝き続けることができる。

だつて：

『虹色はどんな色にも変えられる』昔の俺の心の中にはあつた言葉は今
も俺の心の中に聞こえるのだから。

「青色の薔薇と虹色の薔薇」 f i n

EX Chapter : Celebrate Birthday

Roseliaの主催ライブから1年後：

7月2日

【午前9時：羽沢珈琲店】

藍沢「で、どうしてここに集まってるんだ？それもあこ抜きで」

友希那「あら、あこから何も聞かなかつたのかしら？」

藍沢「そうだが、何でこのメンバーで集まってるんだ？」

リサ「もー、藍沢くんてあこと付き合つて何も聞いてないんだ？」

藍沢「…悪かつたな。あこがずっと俺にベッタリしてきたりNFOと一緒にプレイしたりしかしてなかつたからあこからは何も話してくれないんだよ」

紗夜「宇田川さんも宇田川さんですが翠川さんも翠川さんですね」

藍沢「何も反論できしないな…で、何があるんだ？」

燐子「明日は…あこちゃんの誕生日なんです…それで…みんなで祝いたいと思つて…」

藍沢「なるほどな。あこが好きなものつていつたらゲーム関連の物とかしか思いつかないけど紗夜たちは何か思いつかないか？」

紗夜「そうですね…ゲームのキャラのコスプレなどはいかがでしようか？」

藍沢「ゲームのキャラのコスプレか…どんなのにするか…というか友希那たちはどうなんだ？」

友希那「…私は遠慮しておくわ」

リサ「えー？なんで？コスプレなんて滅多にしないからいい機会だ

しゃろうよ！」

燐子「私も…湊さんのコスプレ見てみたいですね…」

友希那「燐子とリサまで…」

藍沢「あまり無理はしなくていいぞ？俺たちはやるつもりだけど… というか紗夜もするのか？こういうのには縁がないって思つてたんだけど」

紗夜「私もNFOをはじめましたからその影響で色んなゲームをはじめたんです。藍沢さんほどではありませんが」

藍沢「そうだつたのか。俺がいないときにでも始めたのか？」

紗夜「ええ。まだまだ未熟ですが白金さんと宇田川さんに空いた時間を使つてもらつて教えてもらつたりしています」

藍沢「そうか。それで本題だが…友希那もしてみたらどうだ？」

友希那「…嫌よ。恥ずかしいもの」

リサ「もー、そんなこと言つてたら芸能人になつたときが大変だよ？今のうちに慣れておこうよ、ね？」

友希那「嫌よ」

藍沢「こうなつたら友希那に強制的に着せるしかないな。リサ、紗夜。頼んだ」

紗夜「わかりました。湊さん、すみませんが覚悟してください」

リサ「オツケーボーゲンね友希那♪」

友希那「紗夜？リサ？2人とも何を考えているの？」

紗夜「すみません湊さん」

そう言つてリサと紗夜は友希那を連れてどこかに行つた：

藍沢「…なんだか大変そうだな、友希那」

燐子「そう…ですね…」

藍沢「燐子はどんなコスプレにしてみるんだ？」

燐子「そうですね…こんなのが…」

藍沢「なるほどな…いいかもしれないな。あこにも何かコスプレさせるか？」

燐子「そうですね…皆さんでコスプレするのもいいかもしません…」

藍沢さんはどんなにしてみるんですか…？」

藍沢「俺か…こんなのとかどうだらうか？」

燐子「いいかも…しませんね…」

藍沢「後はリサと紗夜、友希那のコスプレだけど…バラバラでもいいよな？」

燐子「そうですね…誕生日パーティというよりはコスプレパーティになりそうですが…」

藍沢「楽しめればいいんじやないか？」

燐子「それじゃあ…・・・買ひに行きましょうか…あこちゃんに見つからないように…」

藍沢「そうだな、行くか」

俺と燐子はアニメショッピングに向かつた

【午前11時：アニメショッピング】

藍沢「ここか。結構広いんだな」

燐子「そう…ですね…逸れないようになないと…」

？？「あれー？りんりんと藍にい？どうしたのこんなところで？」

藍沢「あこ？あこもどうしたんだこんなところで？」

あこ「あこは新しいゲームを予約してたから買いに来たの！二人は何をしに来たの？」

燐子「私たちは…何か新しいのが入つてないか見に来たんだよ…」

あこ「それなら一緒に探そうよ！2人より3人でしょ？」

藍沢「いや、俺たち一人だけで大丈夫だ。気持ちだけ受け取つておくよ」

あこ「そう？あまり考えすぎないでね？あこはそろそろ行くけど藍にいは取らないでねりんりん？」

燐子「と、取らないよあこちゃん…」

あこ「それじやあねー！」

そう言つてあこはその場を後にした

藍沢「うまく誤解されない言い方ができたな。ありがとうございます燐子」

燐子「いえ…私も大学で他の人と話す機会が増えたので…」

あこちゃんとは今も偶にNFOをするので…」

藍沢「そうだつたのか。とりあえず助かつたよ燐子。それじやあお目当ての物を探そうか」

燐子「はい…見つかるといいですね…」

藍沢「とりあえず見つかってよかつたな。」
燐子「はい…後は明日…ですね…」
藍沢「そうだな。リサたちはうまくやつているだろうか…」
(ピロリン)

藍沢「ん？リサから？なになに…」

リサ『やつほー藍沢くん☆そつちはコスプレの準備できてる？アタシたちは何とかコスプレの準備は整つたけどそつちの準備ができるないならアタシの家に集合しよつか？』

藍沢『そうするか。一応こつちでコスプレの準備ができただけど衣装とかは作つたことがないからリサと燐子に頼むことになるけど』

リサ『了解☆それじゃあ家に集合しよつか☆待ってるね♪』

燐子「誰から…だつたんですか…？」

藍沢「リサからだつた。コスプレの準備ができないならいつたん集合しようつて言つてたからこれからリサの家に行こうかなつて思つてるけど燐子も来るか？」

燐子「はい…サイズも合わせたいので…」

藍沢「それじゃあ行くか」

俺と燐子はアニメショップを出てリサの家に向かつた

【午後12時・リサの家】

藍沢「お待たせ…つて友希那はどうしたんだ？」

リサ「あはは…ちょっとやりすぎちゃつて…」

燐子「湊さん…？」

燐子がリサの横から顔を覗き込んでみると…そこには机に突つ伏している友希那がいた（らしい）

紗夜「まつたく…今井さんはやりすぎです。私は少し控えめにしたほうがいいと言つたのに…」

リサ「あはは、だからごめんつて…後は藍沢くんと燐子だけだね。早めに済ませておく？」

藍沢「そうしておくか。採寸とかが終わつてから早めに休みたいし」

燐子「私も…お願いします…」

リサ「オッケー♪それじゃあ藍沢くんからしよつか」

藍沢「了解。」

それから俺はコスプレの採寸を受け、後はリサと燐子が衣装を作つておくと言つたので俺は家に戻つて夜に寝た…

7月3日

今日はあこの誕生日だ。集合場所は俺の家になつてゐるが、あこに今日のことは詳しく教えていない。まあ教えるも楽しみは減るからな…

【午前10時・翠川家リビング】

藍沢「しかし…よくこんなのが見つかつたものだな…」

ピンポン

藍沢「お、来たか？」

ガチャ…・

あこ「藍にいー！來たよー！」

燐子「おはよう…ございます…」

リサ「やつほー藍沢くん♪」

紗夜「こんな朝早くにすみません翠川くん」

友希那「おはよう藍沢くん…昨日はひどい目にあつたわ…」

あこ「??昨日何かあつたんですか友希那さん？」

友希那「色々あつたのよ…」

藍沢 「ほら、そんなところに立つてないで早く入つたらどうだ？」
あこ 「はーい！おじやましまーす！」

藍沢 「ふう…結構食べたな…」

リサ 「だね。もう食べれないよ…」

あこ 「おいしかったー！」

燐子 「ふふつ、そうだねあこちゃん…」

紗夜 「時間もいいですし、そろそろ始めましょうか」

あこ 「??何をですか？」

友希那 「…本当にやるのね」

リサ 「ここで使わなきやもつたいたいしないしね☆」

あこ 「??」

燐子 「あこちゃん…こつちに…・・・」

あこ 「うーん…?わかったよ」

あこは燐子と一緒に俺の隣の部屋に入つていつた。それを確認した後にリサと友希那、紗夜がその隣の部屋に入つていつた…：

藍沢 「もう大丈夫か？」
燐子 「はい…こつちは大丈夫です…・・・」
あこ 「ねーりんりん、あこ、よく見えないんだけど」
燐子 「大丈夫だよあこちゃん…ちゃんと目隠しは外すから…・・・」

友希那「…」

リサ「友一希那、何固まつてゐるの？いい加減覚悟しちやいなよー♪」

友希那「…」

紗夜「そろそろ行きましょうか。時間も押してますし」

藍沢「了解。それじゃあいつセーので出るぞ。いつセーの…」
バタン！

リサ「ど、どうかなー…？」

友希那「…早く着替えたいわ」

紗夜「初めてこういうのをしたんですが…してみるものですね」

燐子「はい…私はすごく楽しいですけど…」

あこ「(え？え？)紗夜さんが初めて？友希那さんは早く着替えたい
？どういうこと？」

藍沢「それじゃあそろそろあこの目隠しを取つてやるか。」

そう言つて俺はあこの目隠しを撮つた

あこ「あれ？藍にいと友希那さん、リサ姉に紗夜さん、りんりん？
それにその格好…すつごく似合つてる！」

リサ「そ、そうかなー…ありがと、あこ♪」

あこ「そうだ！せつかくだしこの格好のキャラのセリフ言おうよ
！」

藍沢「…俺もやるのかそれ？」

あこ「もちろんだよ？」

藍沢「…はあ、結局やるのか。で、誰からやるんだ？」

友希那「…私からするわ。早くこの衣装から着替えたいもの…」

リサ「それじゃあ友希那からだね☆それじゃあ言つてみてよ☆」

友希那「『お望みとあれば…』…これでいいでしよう。次はリサが
やつてちようだい」

リサ「え、アタシ？うーん…『宿れ、生命の輝きよ。今こそ咲き誇
れ！』こ、これ以外と恥ずかしいね…次は誰がやる？」

あこ「はーい！あこがやるー！えつとねー『あっこあこにしてあげ
るよー！』えへへ、楽しいー！次は紗夜さんお願ひします！」

紗夜「わ、私ですか…『答えなさい、聖なるアクエリア。私の歌に
宿り、皆さんを守ってください』…次は白金さんお願ひします」

燐子「は、はい…『そこ…動かないでくださいね…』さ、最後は翠

川さんですね…」

藍沢「俺か…『…興味ないな』…これでいいか？」

あこ「うん！すつゞく似てた！リサ姉やりんりん、友希那さんと紗
夜さんも！」

燐子「ありがとう…あこちゃん…」

友希那「…もう着替えてもいいかしら」

リサ「ダメ♪帰るまでこのままって昨日言つたでしょ？」

友希那「…早く着替えたいわ」

それから時間が経ち、あこの誕生日パーティー…もといコスプレ
パーティーは終わり、みんなはここに来る前に着ていた服に着替え、
帰つていった。あこが少しにやにやしていたのはスマホでみんなの
音声を録音し、それを着信音などに設定していたようだつた…そのこ
とを知つた友希那はあこに無言の圧力で迫り、あこに消させたとい
う。だが時はすでに遅く、あこはリサと燐子に同じものを送つてお
り、手が付けられなかつたのを友希那は知らなかつた…